

---

# ネギま！で斬魄刀

こころう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネギま！で斬魄刀

### 【Nコード】

N0818V

### 【作者名】

こじろう

### 【あらすじ】

BLEACHの能力を持った男オリ主がネギま！の世界で大暴れ！（予定） 大戦期編終了 現在、総本山謀反編。 転生モノではありません。

## 第一話

ヘラス帝国。

闘技場にて二人の男が向かい合う。

一人は褐色の肌を持ち、身の丈二メートルを越す大男。  
もう一人は腰に刀をぶら下げた少年だ。

「さあとつとうこの時間がやってまいりました！ 本日のメイン  
デッシュュ、ジャック・ラカンVS五木大和！ これまでの戦績は  
大和選手の全勝！ ラカン選手は今日こそ雪辱を晴らすのか!？」

その司会者の言葉を聞き、大男・ジャック・ラカンはニヤリと笑  
う。

「そういうことだ。今日こそ今までの借りを返してやるぜ」

「……くそつ、毎度毎度めんどくせえ」

闘気に満ち溢れたラカンとは違い、大和の顔にはやる気のかけらも  
なかった。

(これでコイツと戦うのは何回目だっけか、嫌な奴に目を付けられ  
たな)

「それでは、試合開始！」

「っしやあ！ 行くぞコラー！」

チンピラのような声を上げて突っ込むラカン。  
体格は子供と大人ほど差がある。勝負など目に見えているが、

「相変わらず荒っぽい拳打だ」

ラカンの放った右ストレートは大和の左手によりあっさり逸らされる。

オマケに右の掌底がラカンの脇腹に食い込んでいた。

「くっ、『白打』か！」

「喋ってる暇はねえぞ」

そのままの流れで肘、膝、踵などの体中ありとあらゆる部位を使い、適切にラカンの急所めがけて攻撃を繰り返す。

が、ラカンはそれらの攻撃を無視。

顎などの意識が飛びそうな部分のみ防御し、他は筋肉の鎧で防ぐ。

多少のダメージは覚悟の上で、ひたすらに大和に向かって攻撃する。

体格差にものを言わせた強引な戦術だが、それは今のところ功を奏していた。

「ハッハー！ そんななまっちょろいパンチは効かねえなあ！」

「っこの筋肉ダルマが！」

大和は思わず舌打ちする。こんな雑な拳は一日中だっけのぎ続け

る自信はあるが、そんなめんどくさいことは勘弁してほしい。

(とつとと決めるか)

ラカンの上段蹴りをしゃがんでかわし、初撃と同じ、脇腹への掌底。だがラカンに致命傷は与えられない。それどころかチャンスとばかりに身を乗り出してくる。そして、

「破道の三十三 蒼火墜」

「おほ？」

脇腹に触れている右手から蒼い波動が吹き出し、ラカンを飲み込んだ。だ。

間抜けな声を残して飛んでいったラカンはそのままの勢いで観客席を覆っている結界に直撃。大男が目の前に飛んでくるといふ衝撃映像を間近で見た観客は悲鳴を上げた。

「な、なんとという力量でしょう！ 五木選手、これで七度目のチャンピオン防衛！ というかラカン選手は生きているのか！？」

大和もこれで終わったな、と思い、退場しようとする。

だが、

「おいおい、どこ行く気なんだ？ ヤマト」

振り向いた先には体のあちこちが焦げた、しかしまだまだ戦えそう

な様子のラカンが立っていた。

「な、なんとラカン選手、未だに戦闘継続の意思を見せている！  
本当に人間かこの人！？」

程度の差こそあれ、大和も同じ意見だった。

（詠唱破棄とはいえ、蒼火墜をゼロ距離で受けてこのダメージ……  
本当にコイツ人間か？）

「こんな楽しい闘い、あっさり終わらせてたまるか！     アデアツ  
トオ！」

懐から出したカードが光り、次の瞬間には無数の剣へと変化していた。

「さあ、テメーもとっとその刀を使いやがれ！」

あからさまな挑発。だが大和はそれに乗ることにした。  
最も、正々堂々と闘いたいなど思っているわけではなく、早くこの勝負を終わらせたい、と考えているだけなのだ。

「いいだろう、すぐに終わらせてやらあ」

そう言って、刀を腰から取る。

黒い鉄拵えの鞘で包まれた刀はただの日本刀にしか見えず、そして  
実際その通りである。

多少頑丈に造られたという特徴以外は普通の、名すらない日本刀。  
しかし、大和が使用するととなると、また別の意味を持つ。

大和は刀を鞘から抜き放ち、

「霜天に坐せ」

解号を唱えた。

「氷輪丸！」

## 第二話（前書き）

こんな駄文に感想を頂けたことが非常にうれしく、つい続きを書い  
てしまいました。

## 第二話

(やっと刀を使わせることができたか)

ラカンは急激に下がった気温に身を震わせた。

これまでにチャンピオンである大和とは七回戦ったことがある。

その七回全てにおいて完敗したが、以前に一度だけあの刀を使わせたことがあった。

だが、そこから先は勝負にすら、ならなかったのだ。

その時のラカンの記憶は曖昧だった。

ただ覚えているのは、今のように急激に気温が下がったことと、突如巨大な氷の竜があらわれ、自分に向かって大口を開けていたことだけだ。

そこから記憶は途切れ、気が付けば医務室で治療魔法を受けていたという体たらく。

医者が言うには氷の竜が一瞬でラカンを呑み込み、氷漬けにしたという。

(あれから死ぬ思いで修行した。アーティファクトも手に入れた。もうあの時みたいは無様は晒さねえ！)

ラカンの新しい力『千の顔を持つ英雄』。

その力がありとあらゆる武具、防具を作り出すこと。

「喰らいやがれ、ヤマトオ！」

そのアーティファクトはラカンの意思を正確に受け取り、無数の武器となって大和へと飛んだ。

氷輪丸　その名を呼んだ瞬間に世界は変わった。

自身が所有する数多の斬魄刀の中でも、氷輪丸はかなりの上位に位置する。

その力は天候をも左右し、冰雪系最強の名にふさわしい。未だ始解だということにも関わらず、現れた氷の竜の威圧感により気の弱い観客は気絶している。

（アーティファクトを手に入れやがったか。だが、そんなもん関係ねえ。もう一度氷漬けにしてやる）

「　　行け、氷輪丸」

主の指示を受けた氷の竜は、敵を打倒すべく飛翔する。

ラカンから放たれた武器はそのほとんどを凍らされ、呑み込まれ、破壊されていった。

そのままラカンがいたところ一帯を氷の海にするが、

（手応えがない……？）

敵を捉えた感覚がないことに一瞬困惑する。

そして、背後からの殺気。

振り向いたそこには、ラカンの巨体を隠すに十分なほどの大剣。

(コイツ、大剣を隠れ蓑に)

「うおらあああああつつつ!!!」

大和が見せた一瞬の間。それをラカンは見逃さずにアーティファクトを再展開し、渾身の力をこめて投擲した。

「っ、縛道の八十一 断空！」

間一髪、断空が大和の前に展開され、武具の群れをくい止める。八十番台の鬼道だけあって貫通したものはないが、それでも何本かが突き立つ。

(この前より力が格段に増してやがる。コイツはどここの戦闘民族だ！)

だが、この奇襲が成功しなかった時点で、ほぼラカンの負けは決まっていた。

「氷輪丸！」

初撃をかわされた屈辱からか、怒りの咆哮をあげて再びラカンに向かう氷輪丸。

「あつ、やば」

渾身の力をこめた分、技後硬直も長くなり。

全てを言い切る前に、ラカンは氷輪丸に飲み込まれた。

「……はつ、わ、私としたことが、あまりの試合展開に我を失っておりまして！ ラカン選手は新しく手入れたアーティファクトにより善戦したものの、大和選手の氷の竜により惜しくも飲み込まれてしまいました！ とうるか本当に大丈夫なんですか、あの人！？」

大和は斬魄刀をひと振りし、氷山のようになっている一角から背を向けて歩きだした。

「え、えー、とりあえず勝者、大和選」

バキンッ！！！！

「まだまだあああああつっ！！！！」

誰もが勝負が終わったと感じていた。

あの冰山から抜け出すことなど不可能だと誰もが思っていた。

だが、ラカンは諦めない。

『千の顔を持つ英雄』の持つ特性。武具だけでなく、防具にもなれること。

氷輪丸に飲み込まれる寸前に、自身の持つほぼすべての気と魔力を使って、自分に創り出すことができる最大級の鎧を展開したことに気づいた観客はいなかった。

「届きやがれえつつっ!!」

最早自分に力はほとんど残っていない。この攻撃が直撃しても大和を倒すことはできないだろう。

だが、それでも意地がある。このまま終わってたまるものか。

大和はまだ背を向けている。今ならば一撃を　。

そして、大和がようやく振り向き、目があつた瞬間、ラカンの本能が最大限の警鐘を鳴らした。

「二度は食らわねえ」

射殺せ

神鎗しんそう

奇襲をかけたつもりが、奇襲をかけられた。

大和の脇腹の横から伸びてくる刀を見たラカンの心情はそれだ。

ラカンがその攻撃をかわせたのは奇跡に近い。自分の本能に従って横に飛ばなければ、今頃串刺しになっていた。

「ちっ、かわしやがったか」

「ちょ、お前、ヤマト！ 今のはよけなかったらマジでやばかったぞ！？」

「ん？ ああ、大丈夫だ。てめえならかわせると信じていた」

「今さっきお前『ちっ、かわしやがったか』って言ったろっが！」

「縛道の六十一 六杖光牢」

「うおいつ！？」

力尽きて動けないラカンを、さらに縛道で拘束する。

「つつかお前その刀の能力は一つじゃねえのかよ！ そんなの反則だろうが！」

「そんなこと言った覚えはねえし、第一テメーが言うな」

正論である。

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる」

「くっそおおおっっ！！ 覚えてやがれえええええええ！！！！」

「やなこった。破道の六十三 雷吼砲」

こうして、後々にまで語られる、ジャック・ラカンVS五木大和の八回目の闘いは幕を下ろした。

## 主人公設定

名前：五木大和  
イツキヤマト

年齢：15

身長：159

外見：碎蜂を男にしたような姿。男としては小柄だが、特にコンプレックスはない。服装は死覇装。羽織は無し。

性格：かなり口が悪い。初対面の人間に対しても口が悪い。唯一、詠春にだけ敬語もじぎを使う。

見ず知らずの人間のために戦うことを嫌う。

能力：複数の斬魄刀を使用する（この世界では、五木家の秘術により呼び出した斬魄刀の本体を精神世界で屈服させることにより使用可能となる）。

鬼道、白打、歩法もかなりの高水準で修めており、オールラウンダー！。

ただ、本人はあまり斬魄刀を使いたがらず、できる限り鬼道、白打、歩法で戦うように心がけている。

鏡花水月、虚化は使用不可。

出生：京都の神鳴流の配下である五木家の嫡男。五木家の斬魄刀の力は強大だが、下位の斬魄刀ですらほとんどの人間は屈服させることはできない。幼少期のころ詠春に面倒を見てもらったので、他の人間に比べてだが詠春のことを信頼している。

### 第三話

「さて、旅にでも出るか」

ヘラス帝国の某所にある宿屋、その二階の部屋で大和は決意した。この国に来てからすでに半年ほど経過している。

初めて出た拳闘士の大会で優勝してからチャンピオンの座は譲っていない。そのおかげで得たファイトマネーはかなりの額になった。旅の途中で路銀が尽きたことにより、この国で拳闘士なんていう職に就くはめになり、戦闘民族の筋肉ダルマに絡まれたりしたのも今ではない思い出……になるわけがなかった。

「……さつさとこの国を出よう」

何故だか嫌な予感がするのだ。

筋肉ダルマにリベンジを挑まれてもめんどくさい。

手早く荷物を纏め、一階で宿屋の女将にチェックアウトしてもらおうと扉に手をかける。

コンコン。

今まさに扉を開かんとしたところで、ノックの音が室内に響いた。

「あー、すみませーん。ここが五木様のお部屋だと聞いたのです  
がー」

「……」

嫌な予感がどんどん膨らんでいく。大和のこの手の直感の外れたこ

とがない。

(さて、どうするかね……)

そして大和は決断した。よし、居留守を使おう。  
抜き足でベッドまで移動し、寝転ぶ。

「あれー、いないんですか？ 困ったなあ、王様直々の招待なのに」

(王様直々の招待い？ 面倒ごとの臭いしかしねえ)

その後、数分間ノックと呼び掛けが続いたが、徹底的に無視した。  
時が経つほどに廊下からの声が涙声になっていったが、無視した。  
大和は図太い。

そしてやっと諦めたのか、鬱陶しいノックと声が消えた。

「さて、行くか」

扉を開けて廊下に出る。

階段を降りてチェックアウトをすまそうと歩きだした大和だったが、  
その階段から女将と騎士姿の女が上がってくるのを見て動きを止めた。

「「「……」」」

なるほど、女将の手にはマスターキー。それで開けようとしたわけ  
ね。

大和はUターンして部屋に入り、流れるような動作でベッド動かし

て扉を封じた。

「え、あ、ちょっと！ 五木さーん！ 五木さんですよねー！？  
お願いします、開けてくださーい！」

バンバンと叩かれる扉。知らねえな。

「お願いしますー！ 貴方を連れていかないと、今月のお給料カットされちゃうんですよー！」

へえ、大変だね。

それじゃ窓から出るか。というよりなんで最初からそうしなかったのだろうか。

「来てくれないと、病気の妹の治療代にするはずのお給料がカットされてしまっんですー！」

「そうか、だが断る」

「ふええええええ！？」

宿泊費を部屋に残し、さあいざ脱出という段になった時、部屋の扉がベッドごと吹き飛んだ。

「くおらアンタ！ こんなかわいい子泣かしてんじゃないよ！ 男なら男らしくとつと城にでも行ってきな！」

おい、女将がこんな武闘派だなんて聞いてねえぞ。

その後、紆余曲折を経て、結局俺は王城に行くことが決まった。

何なんだよ、あの女将の理不尽な強さは……。

## 第四話

王城にて。

「おい、お前が城下で噂になっている闘技場チャンピオンなのか！？」

(……今起こったことをありのまま話すぞ。ヘラス帝国の皇族に呼び出しにくらったかと思えば、いきなり幼女に絡まれた。何を言っているのかわからんと思うが、俺にも状況が理解できてない。筋肉ダルマだとか、最凶女将だとか、そんなもんじゃあ断じてねえ。ヘラス帝国の恐ろしさの片鱗を味わったぜ……)

つまるところ、大和は混乱していた。

「へえ、つてことはこのガキも皇族だったのか」

「ガキじゃないのじゃ！ テオドラなのじゃ！」

「あわわわわ、皇族にタメ口……お給料カット……懲戒免職……きゆう」

宿屋での騒動の後、王城へと招かれ（連行され）た大和は、城門前にてテオドラ第三皇女に捕まった。

最初の剣幕から、てつきり決闘でも申し込まれるのかと思ったのだが、実はテオドラは大和のファンらしく、この前のラカンとの試合

も特等席で見物していたそうだ。

「あれは闘技場の歴史に残る素晴らしい闘いじゃった！ 特にあの筋肉ダルマが障壁に叩きつけられたあたりが最高に興奮したぞ！」

「お、結構話がわかるじゃねえか。よし、サインくれてやるう」

「本当か!？」

「ああ、ほら背中向ける」

大和はどこからともなくマジックイ○キ（極太）を取り出し、テオドラのドレス（純白）の背中にでっかく『大和魂』と書いた。

「やったのじゃ！ これで他のファン達に自慢できるのじゃ！」

「記念すべきサイン第一号だな」

「プレミアじゃー!!」

「ああ……三百万ドラクマのドレスが……特攻服に……」

テオドラと放心している女騎士に連れられて、大和は謁見の間に案内された。

どうでもいいが、テオドラが先導するので背中 of 文字がいちいち目

に付き、その度に笑いを堪えるのに苦労した。

大和のイメージでは、謁見の間というと玉座の周囲に偉そうな將軍や大臣などが並んでいる、というものだったが、驚いたことにその場には皇帝しかいなかった。

（警備とか大丈夫なのか？）

一応周辺の気配を探ってみたが、玉座の陰で忍が守っているわけもなく、今の皇帝は本当に無防備だ。

そんな大和の困惑が伝わったのか、

「ふむ、警備がないことを気にしているのかね？ 簡単な話だ。

そなたが私の命の狙ったならば、たとえ警備がようがいまいが関係なかるう。私もあの闘いは見物させてもらったからな」

皇帝は笑いながら語った。警備の者たちも、大臣たちなどの側近も全て下がらせたのだと。

「そなたの性格は調べさせてもらった。私は気にしないが、皇族に普段と同じような対応をされると必ず側近たちと衝突するであろう」

大和はため息をつく。

（……やりづれえ相手だ）

「で、わざわざ俺を呼びつけたのは何の用だ」

尋ねてはみたものの、連合との戦争が迫っているこの状況で、それ

を察するなという方が難しい。

「うむ。そなたを呼んだのは他でもない、我らと共に連合と戦ってほしいのだ」

「断る」

俺の横では、テオドラが話についてこられずに疑問符を浮かべており、女騎士は未だに魂が抜けていた。

「……即答か。予想はしていたのだが、一応理由を聞かせてもらってよいか？」

「俺は俺の為だけに戦う。誰かに戦う理由を預けたくない。誰かを戦う言い訳にたくない」

「ふむ、そうか」

皇帝はひとしきり顎鬚を撫で、

「ならば仕方がないな。五木殿、わざわざ来てもらって悪かったな」

(? 意外とあっさり引き下がったな)

だが、もとより引き受ける気はない。こちらとしても好都合だった。

「ああそうだ、これは先程の話とは別口なのだが」

「……何だ？」

「テオドラの護衛を引き受けてはくれんか？」

「「はあ？」」

皇帝の提案に俺とテオドラはそろって間抜けな声をあげた。女騎士は以下略。

「別に戦場に出てくれなどと言うつもりはない。ただ、もうそなたにもわかつているだろうが、テオドラは少々奔放に育ってしまった。信のおける目付け役が欲しいと考えていたのだ」

「俺が信用できると？」

「これでも皇帝だ。人を見る目は持っているつもりであるし、そもそも悪人にはテオドラは懐かん」

(なるほど……さっきまでの戦争云々の話は、俺にこの話を断りにくくするためのものか……)

ポリポリと頭を掻く。

ちらりと横を見れば、テオドラの魂まで抜けかけていた。

再びため息をつく。やはりやりづらい相手だ。

「わかった。引き受けよう」

「うむ。娘を頼んだぞ」

そのまま謁見の間を出ようとして、二つの屍が立っているのを放置するわけにいかないことに気づき、二度ため息をついた。

## 第五話

SIDE：紅き翼

現在、ナギ・スプリングフィールドは欲求不満だった。

ただし、エロい意味ではなく、強者との戦いに餓えているという意味だが。

自分の力を試すために故郷を飛び出し、連合側として戦争にも参加しているが、未だに心が奮えるような戦いは経験していない。

そして、そのことを仲間たちに相談すると、サムライマスターこと青山詠春が野営地で聞き捨てならないことを言った。

「圧倒的強者か……俺には一人、心当たりがあるな」

「マジか詠春!？」

「ああ。俺と同郷でな、年下なのに結局一度も勝てなかった」

「貴方が一度も、ですか？」

流石にその事実にはアルビレオ・イマも聞き逃せなかった。

詠春の実力は仲間である彼らも十分把握している。

リーダーのナギには一歩劣るが、それでも実戦形式の模擬戦をすれば五回に一回は詠春が勝つ。

その彼が過去一度も勝てず、しかも自分とそう変わらない歳だと聞いたナギのテンションは上がった。

「なあなあ、もっとそいつのこと教えてくれよ！」

「そうですね、私も興味があります」

「お前らな……ゼクト殿のように食料調達してこいとまでは言わんが、少しくらい野営の準備を手伝ったらどうなんだ」

ちなみに詠春は先程から鍋料理の支度をしている。

「わかったって。後で俺たちがテント作るからよ、今はそいつのことを教えてくれ」

そう言われ、詠春は少し考えて説明した。

「俺の住んでいた京都では『鬼道』『白打』『歩方』そして『斬魄刀』という四種類の戦い方があってな、その中の一つでも極めれば一流と言われている」

「ふむふむ」

「そして彼、五木大和はその全てを極めたらしい」

詠春がそう説明すると、アルビレオは「ああ。なんだ、ただのバグか」という顔をした。

「そしてその中でも『斬魄刀』というのは特殊でな、五木家にもみ伝わっている戦闘技能だ。解号を唱えると、その解号の種類によっ

て刀の性質が変化する。この性質変化には二段階あって、一段階目の性質変化は『始解』、二段階目の性質変化は『正解』と言われるているんだ。彼はここまで到達したらしい」

「ほうほう」

「ちなみに『始解』の状態で既に手が付けられないから、俺は『正解』を見たことがない。戦闘力が五倍から十倍に変化するらしいが詠春がそう説明すると、アルビレオは『ああ。なんだ、バグじゃないかチートか』という顔した。

「なるほどなるほど」

「………ナギ、貴方は本当に理解しているのですか？」

「おう！ とにかく強いんだろ！？」

アルビレオはため息をつき、詠春は『俺は説明が下手なのだろうか』と落ち込んだ。

「喜べお主ら、美味しいドラゴンが狩れたぞ………って、何じやこの空気は」

そしてこの数十分後に新たな仲間、ジャック・ラカンがやってくることを、まだ誰も知らない。

S I D E : 大和

「おいやマト！ あれは何なのじゃ!？」

「あれはホツトドック屋。安くて、早くて、まずい。俺もよく世話になった」

「そうですね、私も給料日前にはよく助けられました」

大和とテオドラと女騎士は城下町をぶらついていた。

大和が皇帝直々に依頼を受けてから、既に一ヶ月が経過している。

いくら戦争中といっても、皇女の身が危険に晒される事態などそうそう起こるはずもなく、これは楽な仕事を手に入れた、という大和の考えは初日に潰された。

もちろん、どこから捻り出してんだ、と言いたくなるほどの元気であちこちに引つ張り回すテオドラのせいである。

別に子供が多少やんちゃするくらいならば、大和にとってはどうとということもないが、テオドラのそれはそんな可愛いものではない。

（龍樹に向かって石を投げた時はマジで頭を握り潰そうかと思ったな）

ちなみに龍樹というのはヘラス帝国の守護聖獣であり、まじごと

なき最高戦力だ。

なぜこんなことをしたのかと優しく（頭をわしづかみしながら）尋ねると、大和の氷輪丸と龍樹が戦っているところを見たかったらしい。

正直に答えたのでデコピン三発で許してやった。半泣きになっていたが。

「おお？　あの看板が裸の女性の店はなんじゃ？」

「はっ、み、見てはいけませんテオドラ様ー！」

「ああ、あの店は」

「ヤマトさんも説明しないでくださいっ！」

一通り町を見て回り、疲れたから背負ってくれというテオドラの要求を却下して喫茶店で休むことになった。そこそこの値段の料理をバイキングの如く食べ散らかすテオドラと『大丈夫……きつと経費で落ちるはず』と呟いていた女騎士の表情が対照的だった。

（こんな時間も久しぶりだな……）

大和にとって、この国での生活は路銀を稼ぐためのものであり、今日のように観光気分です町を歩いたことはない。

そのせいか、半年も暮らしていた町だというのにどこか新鮮に感じている。

皇帝の策に嵌まっている自覚はある。

だが、それでも、大和はこの国とテオドラたちに、愛着のようなものを持ち始めている。

(間抜け)

自分を罵倒しても何も変わらない。

ふと、大和は周りから向けられている視線に気がついた。

大和たちのテーブルは周りから浮いていた。

闘技場チャンピオンと、騎士と、フードファイトの如く食べ物を飲み込む少女が同席しているのだから、ある意味当然とも言えるが。

「テオド………テオ様、あまり急いで食べられるとお体を壊されますよ」

「むぐむぐ」

「いや、むしろとつとと食べ。速攻で食い終われ」

「むぐぐ?」

「ヤマトさん！」

「周りの奴らに注目されてる。このままじゃばれるぞ」

「むぐ」

状況を理解したのか、スパートをかけるテオドラ。

しかし、

「むぐっ!?!」

「わっ、テオドラ様！っ!?! 誰か水を！っ! テオドラ様に水を！っ!?!」

おいなんかやばいぞ待てあれってテオドラ様じゃないのか本当か俺にも見せる間違いないあの騎士もテオドラ様って言っていたぞ。

見事に喉を詰まらせたテオドラを中心に、騒ぎが広まっていく。

(なにやってんだ、俺は……)

どうしてこうなった。

「ん……………う、ん？」

「やっと起きたか」

「ヤマト……………？ あれ、わらわは城下町をぶらついて……………」

寝起きでブーツとする頭を振る。少しして記憶が段々と戻ってきた。

そして今の自分の状況に気づいて愕然とする。

男としては小柄だが、意外と筋肉質な背中。それが目の前にあった。ようするに、大和に背負われている。

「ん、これか？あの女騎士に『貴方のせいなんですから、責任取ってください』って言われてな」

「……………そういえば、シレーヌはどこなのじゃ？」

「シレーヌ？ 誰だソイツ」

「お主は一月も共に行動しておいて、名前も知らなかったのか……………」

「ああ、あの女騎士か」

もう既に大和の中では女騎士で定着していた。

「あいつなら店で騒いだ謝罪とかしてる。お前が皇女だったことまばれたからな」

で、と大和は続ける。

「あー、その、あれだ……悪かったな。けしかけたりして」

「……」

テオドラに、喉を詰まらせた時以上の衝撃が走った。

皇族に対しても普段の調子を崩さぬ、この不遜な男が、普通に謝っている。

「……」

「……」

「……何か言えよ」

「お主、大和の偽者か？」

大和は脱力した。

（久しぶりに素直になってみればこのザマだ……）

やはり自分にこういうのは似合わない。そのことを再認識した。

そのままなんとなく会話がなくなり、無言で城へと歩き続ける。

「なあ、テオドラ」

「なんじゃ？」

素直になつたついでに、前から疑問に思っていたことを尋ねることにした。

「お前、俺に戦場に行けって言わないんだな」

「ああ、そのことか」

ふむ、とテオドラは考え込む。

「そうじゃな、言ってみれば勘じゃ」

「勘だと？」

「うむ、わらわの女の勘が告げるのじゃ。お主を安易に戦場へ連れて行くべきではないとな」

「……」

啞然とした。そして、そのすぐ後には笑いがこみ上げてきた。

「ふっ、くく」

「ヤマト？」

「い、いやなんでもない。それにしても勘か……そうか」

「む、からかっているのか？」

「いいや。素直に、お前は凄くなって思ったただけだ」

背中であたテオドラが驚いたのを感じる。

「今日はよくヤマトに驚かされる日じゃな……」

「お互い様だろ」

そのまま二人して笑い合う。

「一回だけ」

「え？」

「一回だけ戦場に出よう。なんだっけ、『紅き翼』だったか。そいつらを一回だけ追っ払ってやる」

「……本当か？」

「嘘は言わん」

少しの間、沈黙が二人の間を支配した。

そして、

「頼む」

テオドラは頭を下げる。愛すべき民のために。

こうして、一回だけの契約が結ばれた。

第五話（後書き）

戦闘シーン……次こそ……

## 第六話（前書き）

主人公無双、ではなくテ才無双回。纏めきれなかった……

## 第六話

SIDE：紅き翼

目の前にそびえる建築物、グレート＝ブリッジを前に、連合の兵士たちの士気は最高潮になっていた。

「今日こそグレート＝ブリッジを帝国の奴らから奪い返すぞ！」

「連合の底力を見せてやる！」

「俺たちには『紅き翼』がついてんだ！ 恐れることはねえ！」

兵士たちの口から度々『紅き翼』という言葉が出る。

赤毛の少年、ナギ・スプリングフィールドをリーダーとする戦闘集団。

これまでの帝国との戦いにおける活躍は目を見張るものがあり、個人の戦闘力は尋常ではない。

さらに、新メンバーとしてジャック・ラカンが参入したことにより、尚更手が付けられなくなっていた。

『紅き翼』はグレート＝ブリッジ奪還作戦の中核を担う予定となっている。

彼らは迫る戦いに向けて準備を、

「んー、『赤毛の死神』……ダメだな。いまいちピンとこねえ」

「そうだな……『千の呪文の男』なんてのはどうだ？」

「おお、かつけえ！　すげえぞジャック！」

「何が『千の呪文サウザントマスターの男』じゃ、この馬鹿弟子。お前は未だにアンチヨコ見ながらでないと詠唱もできんじゃろつが」

「まあまあ、ハツタリとしてはいいんじゃないですか？　味方の士気も上がりますし」

「お前ら少しくらい緊張しろよ……」

していなかった。

「さて、今回の作戦もいつもどおりでいいですね？」

「……おいアル、俺たちはいつも作戦なんて立てていたか？」

「あるじゃないですか詠春　突っ込んで暴れる、です」

「孫子に謝れ」

「まあまあ、でも実際これが一番効果的じゃないですか。あの二人が前線に突っ込んで暴れ、私たちがカバーする。単純ですがそれ故に破れにくい」

「まあ、確かにな」

「……あれ、おいジャック。今俺たち馬鹿にされてんじゃねえの？」

「ちげーよ、アルの野郎、最近出番があんまり無いからひがんでんだよ。ここは大人の余裕で受け流せ」

「おお、なるほど！」

(馬鹿じゃの)

「それにしても、最近の敵は手応えがねえぜ。これならヘラスの闘技場の方がレベルが高かったな」

「そついやジャックは拳闘士出身だったな。強い奴とかいたか？」

「おうよ、聞いて驚け！ その新チャンピオンとは今までに八回戦ったが、全て完敗だ！ 手も足も出なかったぜ！」

( ) ( ) (なぜ自慢げ?) ( ) ( )

この瞬間、アル、ゼクト、詠春の心は一つになった。

「ジャックが手も足も出ねえとはな……やべえ、俺も戦いたくなってきた！」

興奮を隠そうともしないナギ。

「いや、悪いが今のお前じゃ勝てないだろう。これは俺の勘だが、あの野郎は俺と戦った時も手加減してやがった」

「そんなこと聞いたら余計に我慢できねえよ！ なあなあ、ソイツの名前は？」

「ああ、そいつの名は」

ラカンが答えようとした時、彼らのいる天幕が開いた。

「『紅き翼』の皆さん、そろそろ作戦開始時刻となります」

伝令兵の知らせにより、弛んでいた空気が張り詰める。

「話の続きはコレが終わった後だな」

「おう！ 行かせてめえら、『紅き翼』、出陣だ！！」

SIDE：大和

「ヤマト……本当に大丈夫なのか？」

「今更なに言っただやがる。ちょっと行って、少し薙ぎ払ってくるだ

けだ。命の取り合いまでしてくる気はねえよ」

「だが……」

グレートブリッジの頂上、戦いが一望できる場所に大和とテオドラは立っていた。

本来この場所も戦闘区域内であり、大和としてもテオドラを連れてくる気はなかった。だが、

『わらわがお主を戦場に送り出すのだぞ！ わらわが見届けんとどろする！』

テオドラが吠えたことにより、こんな所までついてきてしまったのだ。

俯いて不安げな顔を見せるテオドラに、大和は頭を掻いた。

「おい、テオドラ」

大和の声に反応して顔を上げる。その顔色は悪い。

「俺が誰だが忘れたか？ 常勝無敗の闘技場チャンピオンだぞ？」  
もう引退したけどな、と慣れないジョークまで言う。

その言葉でやっと安心したのか、決意の表情で頷くテオドラ。

「頼むぞ」

「おう、ここで見物でもしてる」

大和は下で起きている戦闘を観察する。

噂の『紅き翼』は、確かにすさまじい突破力で帝国の軍勢に食い込んでいた。

（このまま突っ込む前に）

大和は両腕の袖を上げ、両手の親指に気を集中させる。

気の集中させた親指で腕をなぞることにより複雑怪奇な紋様を印す。

「黒白の羅 二十二の橋梁 六十六の冠帯 足跡・遠雷・尖峰・回地・夜伏・雲海・蒼い隊列 太円に満ちて天を挺れ」

（悪いが、奴らと戦うのにてめえらは邪魔だ）

「縛道の七十七 天挺空羅」

薄い気で作られた網が、大和を中心に展開し、天を覆いつくしてゆく。

この技は自らの気で編んだ網を展開することにより、遠く離れた存在の捕捉、伝令を可能とする。

戦闘区域では突如として出現した天挺空羅に混乱していた。

『おいへラス帝国の野郎ども。聞こえているな』

耳元に響く声に、帝国軍の誰もが周囲を見回す。が、気で編まれた網以外には何も存在しない。

『いいか、よく聞け。その『紅き翼』の相手は俺がする。てめえらはグレートブリッジの防衛に専念しろ』

戸惑いの表情を見せる帝国軍達。それを見て大和は舌打ちする。

(無理もねえか。戦場で突如降って湧いた声に従うヤツなんざいやしねえ。クソつ、対策しておくべきだった)

少しばかり無理をすれば、帝国軍を巻き込まずに相手をする事も不可能ではない。

説得を諦めて自分も参戦しようとしたが、

「テオドラ？」

テオドラが自分の袖を掴んで引き止めていた。

そして大和も理解する。テオドラの狙いを。

「なるほど、おもしれえ。やってみろよテオドラ」

不敵な笑いを浮かべてテオドラは頷く。

そして、

(帝国軍の勇者たちよ、聞け！ わらわの名はテオドラ！ ヘラス帝国の第二皇女である！)

その声を聞いた帝国軍の者は皆、一様に動きを止めた。

巨大な軍勢が、まるで一つの生き物のように息をひそめる様は、不気味ですらあった。

（皆の者！ 確かに敵、連合の勢力は強大じゃ！ かの戦場の死神、『紅き翼』を尖兵とする奴らには今まで幾度となく苦渋を舐めさせられた！）

固唾を飲んで次の言葉を待つ。

（　　だが、臆することはない！ 我らには誇り高き戦士が味方してくれる！ かの闘技場で無敗を誇ったチャンピオンじゃ！）

目を見開く。あの男が我らに味方してくれるというのか？

ヘラス帝国の人間で五木大和の名を知らぬ者はいない。

そして、その『紅き翼』を凌駕するであろう戦闘力を知らぬ者もまた、いない。

（『紅き翼』の相手は五木ヤマトに任せるのじゃ！ 皆はグレートブリッジの防衛に専念！ 今回の戦いがこの戦争の正念場なのじゃ！）

一瞬の静寂。

そして、

ドオツツツツ！！！！！！

爆発した。

「やるじゃねえか」

「ふん、当然じゃ」

「ここまでお膳立てされては、自分としても答えなければなるまい。

「じゃ、行ってくる」

「うむ、はよう戻ってくるのじゃぞ」

自分を信頼しきった声に、ニヤリと笑うことで返した。

「っしゅあつ！ 轟とんけ 天てん譴けんッ！！」

「これはっ、天挺空羅か！？ しかもこの規模 まさか！」

『紅き翼』のメンバーの中で、空に拡がる気の網に一番動揺したの

は詠春だった。

他の面々はどちらかというところ、様子のおかしい帝国軍の方に注目している。

今まで必死に自分たちの進撃を食い止めようとしていたにも関わらず、急に動きを止めたかと思えば、今度は一糸乱れぬ撤退だ。ナギ達だけでなく、他の連合軍も訝しんでいる。

そして自分たちに迫る脅威にいち早く気がついたのは、フォローのために索敵魔法を展開していたゼクトだった。

自分の索敵範囲内に一点の反応。

その点は恐るべきスピードでこちらに接近しており、咄嗟にその方向を視認する。

かなりの距離が空いているため、姿はほとんどわからない。

しかし、その点は急激に気の圧を増し

突如として、天をも衝くほどの刀を構え

自分たちに向かってその刀を　　！

「全員横に飛ぶのじゃああああッッッ！！！！」

ゼクトの号令、いや、怒号により『紅き翼』のメンバーは反射的に行動を起こす。

そして、数瞬前まで自分たちがいた地点に巨大な鉄塊が叩きつけられた。

その異常なサイズの刀は地面にぶつかっても勢いが死なず、まさに大地を割ろうとせんが如き力で決り続ける。

度肝を抜いた先制攻撃に『紅き翼』達の額に冷や汗が流れた。

もしあんなものが直撃すれば、たとえ障壁を張っていようと諸共に潰されるに違いない。

ゼクトの指示がなければ、まず間違いなく巻き込まれていただろう。

「今度は天譴　やはりっ」

「この刀の形って、おいおいマジか!？」

詠春とラカンは敵の正体に確信を持つ。

「はじめまして、いや、久しぶりでもあるな、『紅き翼』。できればそのままお引き取り願う」

「大和君、なぜ君がこんな所に！」

「お久しぶりですね、詠春さん」

「はあ！？」

大和が詠春に対して敬語を使ったことにより、目が飛び出そうなほど驚くラカン。

こいつはヤマトの偽者か？ などとテオドラと同レベルのことを考えている。

「話には聞いていたが、本当にテメエもいたんだな、筋肉ダルマ」

「あ、本人だわ」

すっかりお馴染みの毒舌を受け、むしろラカンはホツとした。

「ってコラあ！ 俺を無視してんじゃねえ！」

天譴の一撃による風圧に吹き飛ばされていたナギが復帰。

「まったく、いきなりあんなもの振り回すとは乱暴な人ですね」

「これまで長く生きてきたが、あんなものは初めて見たわい」

アルビレオとゼクトも大した怪我を負っているわけでもなく、それぞれ別方向から復帰。

図らずとも大和を五方向から包囲する形となった。

だが大和の実力を知っている詠春とラカンからすれば、これでも心もとないぐらいだ。

「さっきも言ったが、このまま帰ってくれるんなら戦う気はねえ」

「……いきなり不意を打って先制攻撃してきた人の言葉を信じると？」

「あんなもんだだの挨拶だ」

「ふざけたことを言いよって……」

アルビレオとゼクトは大和に怒りを顕にするが、さっきの一撃は本当に挨拶に過ぎないことを知っている詠春とラカンは気が気でない。実際、天譴ではなく『正解』のいずれかを放っていれば、そこで終わっていただろう。

「この五人に囲まれておきながら、大層な余裕ですね」

「まあな。で、返答は？」

「そんなもの」

「断るに決まってるだろうがッ！ マンマンテロテロッ！」

「おいナギ！？ 待て、迂闊に魔法を」

「うるせーぞ詠春！ 結局の所、コイツは敵なんだろうが！ 『契約により我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて、走れよ稲妻』！」

詠春の静止を振り切って、対軍勢用魔法の詠唱に入るナギ。

「 雷悉く我が盾となれ。 雷悉く我が刃となれ」

「喰らいやがれッ！ 『千の雷』！！」

「んなもん喰らうか 双魚の理」

解号が終わり、大和の刀が変化する。自身の所有する中で、ただ二組しか存在しない二刀一対型の斬魄刀。柄同士が札付きの縄で結ばれた特殊な形状をしている。

そしてこの斬魄刀の能力は、敵の技を片方の刃で吸収し、刀を繋ぐ縄と札で威力を調整して、

「あぶるべっ!?!」

敵に返すことができる。

自らの『千の雷』を受け、吹き飛んでいくナギ。

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「さっきも言ったが、このまま帰ってくれるんなら戦う気はねえ」

「……いきなり不意を打って先制攻撃してきた人の言葉を信じると?」

「あんなもんだの挨拶だ」

「ふざけたことを言いよって……」

アルビレオとゼクトは大和に怒りを顕にするが、さっきの一撃は本当に挨拶に過ぎないことを知っている詠春とラカンは気が気でない。実際、天譴ではなく『卍解』のいずれかを放っていれば、そこで終わっていただろう。

「この四人に囲まれておきながら、大層な余裕ですね」

「まあな。で、返答は？」

「断るッ！」「断るッ！」「断るッ！」「断るッ！」

グレート＝ブリッジの地にて、闘技場無敗の男と、『紅き翼』が激突する

## 第六話（後書き）

書いていて『あれ、双魚の理って魔法使いに対して無敵じゃね？』  
と思いました。

ちなみに天譴は狛村の始解です。

## 第七話

「ジャック！ 詠春！ お主らでヤツを引き止めることは可能か！？」

「はっ、余裕だぜ！ 闘技場での借りを返してやらあ！！」

「こんな所で大和君と闘うことになるとは……だが、相手にとって不足はない！」

ナギのいない今、（死んでいないが）『紅き翼』は自然とラカンと詠春が前衛、アルビレオとゼクトが後衛を担当する。

後衛に向かわせないためにラカンはアーティファクトで手甲と足甲を展開、詠春は自らの愛刀である夕凧を構えた。

「おい詠春！ こいつは俺一人じゃさすがに抑えきれねえ！ 勝手にへばんじゃねえぞ！」

「そんなこと、お前に言われるまでもない！」

そして二人は大和に向けて駆ける。

「交渉は決裂か……まあ、わかりきったことだがな」

大和は二人がかりの攻撃を、双魚の理でそれぞれ受けとめた。そのまま三人はもつれ合うかのように接近戦へと移行する。

「ラカン、インパクトオオ！！」

ラカンは剣術を使うよりも直接殴る方が性にあっていただけ、大和に敗北して以来は体術の訓練をしていた。  
武器の群れを飛ばす方法も大和には通じなかったため、牽制だけにとどめている。

「神鳴流奥義、斬岩剣！」

一方、詠春はこのメンバーの中で一番大和の能力に詳しい。彼の使用している斬魄刀、双魚の理についても知っていた。故に、雷鳴剣などの放出系の技は避け、直接攻撃系の技で大和に攻撃する。

だが、達人二人の猛攻すらも、大和はいなし、逸らし、かわし続ける。

ラカンの岩をも砕くような突進を見れば、瞬歩で回避し、回り込んで詠春への楯にする。

詠春の鉄をも切り裂くような斬撃を見れば、双魚の理の十手で固定し、武器破壊を目論む。

アルビレオとゼクトは必死に大和の間を探るものの、ナギの『千の雷』があっさりと返されたことを考えると、迂闊に魔法を放つわけにもいかない。

現状、彼らは膠着状態になっていた。

「破道の五十八

てんらん  
？嵐」

大和はそれを崩しにかかる。

ラカンと詠春の目の前に突如竜巻が現れ、視界を塞ぐ。竜巻に直接的な攻撃力はなかったものの、一瞬大和を見失ってしまった。

その一瞬の隙を使い、再び解号を唱える。

「こんどはこいつだ。水天逆巻け 掬花<sup>ねじばな</sup>」

大和が唱え終わった瞬間、両手の刀は消失し、代わりに身の丈を越すほどの三又の槍が現れた。それを片手で軽々と持ち上げ、独特の高い構えをとると同時に回転させる。

「おい詠春、あれの能力はわかるか!？」

「あれは掬花 振ると同時に、水の波濤を繰り出して敵を滅する槍だ! 絶対に下がって回避するなよ! 波濤に巻き込まれる!」

「おっしや、了解!」

再び二人は大和に攻撃を開始する。だが、カウンターに特化した双魚の理とは違い、凄まじい攻撃力を持つ掬花に二人は徐々に押され始める。

「いい加減に諦めたらどうだ?」

「はっ、抜かせ！」

「御免被る！」

既に二人の身体には無数の切り傷が刻まれていた。

たとえ槍の一撃を防いだところで、追加攻撃の波濤に粉碎される。

よって防御はできず、二人はどんどん苦しい戦いを強いられていた。

このまま大和が押し切るかと思われたが、

(っ、これは……重力か?)

双魚の理を解除したことにより、後衛の二人が戦闘に参加できるようになった。

めまぐるしく位置が変わっていく高速戦闘の中で、アルビレオは的確に大和だけを重力で捉える。

特殊な歩法で重力の影響を地面に逃しながらも、戦いにくくなったのは否めない。

一方のゼクトはというと、空中で全体の流れを把握し、絶妙なタイミングでの魔法でサポートをしていた。

掬花がラカンを捉える直前でゼクトの遠隔障壁に阻まれた時は、大和でさえ驚愕に目を見開く。

(あの距離から障壁を展開して、しかも掬花を防ぐほどの強度。しかも全体の司令塔までしてやがる。……なるほど、コイツらの中で一番厄介なのはあのガキか)

そう判断し、大和は真っ先にゼクトを排除することに決めた。

「君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！」

「この野郎、接近戦の最中に涼しい顔して詠唱しやがって！」

「蒼火墮か、もしくは赤火砲か、攻撃系の鬼道がくるぞ！」

大和に鬼道を使わせまいと、ラカンと詠春の攻撃が一層苛烈になる。  
だが、

「 雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ」

「っ、二重詠唱か！？ まずい、大和君の狙いは」

「蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ 縛道の六十一  
六杖光牢」

大和の詠唱が終わると同時、ゼクトの周囲に六つの帯状の光が胴を  
囲うように突き刺さり、その動きを奪う。



が驚愕する。

大和は落ちてきた掬花を受け止め、苦い表情を隠さない。

「命中する寸前に、転移魔法を発動させたか……やっぱりテメエは厄介だな」

虚空から現れたゼクトは少々傷を負っていたものの、まだまだ戦闘可能な状態であった。

それを見て『紅き翼』のメンバーは安堵の表情を見せる。  
だが、

「少し、舐めてかかりすぎたか」

その場を覆う殺気が一段と濃密になり、咄嗟に身構える。

「安心しろ、殺しはしねえ。けどな、多少は本気でやらせてもらう」

大和は掬花を解除、通常の刀の形態に戻した。

そして、

「 卍解」

その言葉を発した瞬間、大和の気の圧力が爆発したかと錯覚するほど膨れ上がった。

「かみしにのやり  
神殺鎗」

『紅き翼』のメンバーに、油断はなかった。

いかなることが起きても、咄嗟に回避か防御ができるように構えていた。

だが、

まるでコマを落とされた映像の如く、一瞬後にゼクトの腹部を刀が貫通していることに、誰もが硬直した。

刺さった時同様、一瞬後には刀は元の長さまで縮んでおり、ゼクトは無言で崩れ落ちる。

ここに至り、ようやく『紅き翼』の硬直が解ける。

そして大和はそのままアルビレオへと刀の切っ先を向けた。

(っ、マズイ！)

あの刀の能力はわからないが、このままではゼクトの二の舞になることは間違いない。

そう直感したアルビレオは、自身の持てる魔力の大半を使って障壁を展開。

そして、

「神殺鎗

無踏連刃ぶとつれんじん」

まるで壁が迫るかのように、大和の持つ刀が伸縮を繰り返してアルビレオの障壁を削った。

(そうか、この刀の特性は異常なまでの伸縮速度！)

アルビレオはそのことを看破するも、今の状況は変わらない。  
このままではいずれ、障壁が全て削りとられる。

(ならば！)

アルビレオは切り札を使う。

それは重力使いとしての奥義ともいえる、自らにかかる重力の軽減。アルビレオは自身の体重を限りなくゼロに近づけ、高速移動により大和の背後へと回り込んだ。

そして、その掌に重力球を作り出す。

アルビレオはそのまま重力球を大和に叩きつけようとするが、

「裂き狂え

るりころへいしゃく  
「瑠璃色孔雀」

背中越しに大和の声が聞こえたかと思うと、彼は無数に蓄をつけた鳶に絡みつかれた。

「これは、一体!?!」

アルビレオは必死に脱出しようとするが、鳶は決して緩まない。むしろその強度を増しているように思える。

そしてアルビレオは気づく。自分の魔力がどんどん減っていることに。

「その蔦についている蕾は見えているな？ 瑠璃色孔雀は敵の魔力を喰らい、その花を咲かせる。諦めて大人しくしている」

咄嗟にその蕾を見る。

確かに自分の魔力が失くなっていくにつれて、蕾はゆっくりと膨らみ始めていた。

「そうはさせん！」

「俺たちを忘れてんじゃねえぞ！」

現在大和は無手であり、詠春とラカンにとってはこれ以上ないほどの好機だった。

二人は同時に反対方向から大和へと駆け、自らにできる最強の一撃を放つ。

「全・力・全・開！！ ラカン、インパクトオオオ！！！」

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣！！！」

避けようのないタイミングでの攻撃だった。

そして事実、二人は自分たちの攻撃が大和に直撃するのを確認した。

だが、瞬きをしてみれば、そこには誰もいない。

またしても硬直する二人だったが、突如詠春の両手が後ろ手に固定

される。

(これは縛道！　だが詠唱は聞こえなかったぞ！?)

詠春の手を固定したのは、最も基本的な縛道の一　塞である。

一流の戦闘者にとってはすぐに解除できるものであり、詠春もすぐに弾き飛ばそうとしたが、さらにどこからともなく現れた気の縄が絡みつく。

「今度は這縄かつ！　くそっ、どうして詠唱が聞こえない!?!」

二つの縛道を合わせられたならば、即刻解除とはいかない。

必死にもがくが、解除するよりも早く、這縄が引かれて詠春の体は宙を舞う。

そして、引っ張られた先に大和の姿が浮かび上がるのを見て、縛道の二十六　曲光で身を隠していたのだと理解した。

「　俺は三十番台以下の鬼道に限り、念じるだけで発動できます。『完全詠唱破棄』と呼んでますがね」

そのデタラメさに詠春が驚愕を頭にする前に、破道の一　衝が顎に直撃し、脳を揺さぶられて昏倒した。

そして同時に、瑠璃色孔雀の花が咲き誇り、存在を維持できなくなったアルビレオが一冊の本となって地に落ちる。

「で、残るはお前だけだ。筋肉ダルマ」

「……やっぱりお前はとんでもねえな。けどよ、ここでスゴスゴと引き下がる俺様じゃねえぜ？」

「ついでに言っておくと、お前らの攻撃をかわしたのは歩法『空蝉』つつー技だ。直撃したように見えたる？」

自分はこのままでデタラメな相手と何度も戦っていたのか、と冷や汗を流すラカン。

「お前はどこまでボロボロになっても立ち上がってくるから夕チが悪い」

大和は瑠璃色孔雀を解除し、ラカンへと向き直る。

「だから、お前は物理的に動けなくするのが一番だ」

またしても、大和の気の圧力が増す。

「 卍解、大紅蓮氷輪丸」

そして、世界は極低温に支配される。

氷輪丸。かつてラカンが二度敗れた斬魄刀。

それがさらに力を増すというのか？

「俺が何故、掬花を使ったと思う？」

ラカンが見たのは、巨大な翼を持つ氷の竜を纏った大和。

「氷輪丸は氷を操る斬魄刀だが、新たに氷を生み出すよりも、その元となる水があつた方がより力を発揮する」

足元を見れば、掬花によりまき散らされた水。

「つまり、こういうことだ」

ラカンが最後に見たのは、自分に迫り来る無数の氷柱だった。

千年氷牢。

ナギ・スプリングフィールドは自身の魔法に吹き飛ばされた後、飛行魔法を使って仲間たちの元に向かって急いでいた。

ナギはこれでも仲間の強さを信用しており、まさか自分のいない数分間に全滅しているとは思ってもいなかった。

むしろ、自分が戻るまでに敵を倒しているのではないかと心配し

「……………なんだよ、これ……………」

ていたほどだ。

だからこそ、ナギは目の前の光景を信じられない。

そこで見たのは、腹部から血を流して倒れているゼクト。

本となって地面に落ちているアルビレオ。

外傷こそ少ないが、気を失っている詠春。

そして、

「ああ、筋肉ダルマならこの中だぞ。ナギ・スプリングフィールド」

見上げんばかりの氷の塊と、その側に立つ大和の姿だった。

「こいつらをやったのは、テメエの仕業か……？」

ナギは怒りに震える。

仲間を傷つけたこの男に。

そして、最初にむざむざ退場してしまった自分自身に。

「ああ、そうだ。まあこいつらも死んではいねえけどな」

「そうかよ　それだけ聞けりゃ、充分だツツツ……！」

咆哮を上げて大和に突撃するナギ。

「勘違いしているかは知らんが、俺はお前のことを低くは評価して

いない」

大和は刀を突き出し、その切っ先を地面に向ける。

「まさか、双魚の理の吸収限界に近づくヤツがいるとは、思いもしなかった」

そして大和は刀から手を離す。刀は音も無く地面に吸い込まれた。

「だから、喜べ。こいつを見せてやる」

己解。千本桜景蔵。

「かなり痛いだろうが

そのかわり、綺麗だろ？」

連合軍の一部隊は『紅き翼』が敗北したと聞き、半信半疑ながらも救助に向かうこととなった。

そして、彼らは驚くべきものを見る。

そこで見たのは、情報通りにボロボロとなった『紅き翼』と、

全身に傷創を刻まれながらも、決して膝をつかぬように、立っ  
たまま気絶しているナギ・スプリングフィールドの姿だった。

「おい、五木大和が『紅き翼』を倒したってのは本当か!？」

「ああ、偵察のやつに直接聞いたから間違いねえ！ やっぱチャン  
ピオンはとんでもねえよ!！」

グレートブリッジの内部にて、帝国軍の兵士たちはその報告に沸

き立つ。

「これからも帝国軍と一緒に戦ってくれんのかなあ」

「それはわからねえが、とりあえずこの戦いで勝てたことでも凄いつて！ ここを拠点にして連合と戦えるんなら、帝国の勝利も目前だ！」

それじゃあ、困るんだよね。

どこからともなく聞こえたその声に、帝国兵は慌てて周りを見回そうとするが、それはできなかった。

なぜならば、彼らの胸には既に、石の槍が突き刺さっていたから。

「今回の戦いで帝国はグレートブリッジを奪われる。そういつシナリオ』になっているんだよ」

暗がりから白髪の青年が現れる。

「さて、早く仕事を終わらせようか」

『コスモ・エンテレケイア  
完全なる世界』が、動き出した

## 第七話（後書き）

本当は諒助も出したかったんだけどなあ……タイミングがなかった  
……

というより、詠春がヤムチャポジションになってるんだけど……

## 第八話（前書き）

短いです。

## 第八話

SIDE：紅き翼

あの『紅き翼』が撃破されたという情報は、連合軍の間に大きな動揺をもたらした。

救助部隊は『紅き翼』のメンバーを直ぐに回収、治療を行い、彼らは奪還成功したグレートブリッジに運び込まれた。

彼らの怪我は重傷ではあったが、致命傷には程遠く、しばらく治療に専念すれば、また戦場に復帰できるとのことだ。

だが、心の方はどうかというと

「こんなところにいたか、ナギ」

「……ジャック」

グレートブリッジの上、大和とテオドラが会話していた場所で、ナギは座り込んでいた。

もうすでに夜の帳が空を覆い、野営地の明かりがぼんやりと浮かんでいる。

「お前、怪我は大丈夫か？ 全身ボロボロだったらしいじゃねえか」

「……そういつジャックはどうなんだよ。氷河期時代のマンモスの化石みたいになってた、って聞いたぞ」

「ガハハ、俺は氷漬けにはもう慣れた」

いつもの軽口もどこか空々しく、覇気がない。

「なあ、ジャック」

「なんだ？」

「お前が言ってた闘技場の無茶苦茶強いヤツって、あいつのことだよな？」

「そうだ。俺もあそこまでデタラメなやつだとは思わなかったけどな」

「……俺たち、手加減されてたよな」

「ああ。妖怪ジジイもアルの野郎も、少し休めばまた戦えるってよ。最初から俺たちを殺す気はなかったんだろ」

「……そうか」

会話がなくなり、二人は建物の上から雄大な夜景を眺める。

グレート＝ブリッジは連合が奪還に成功し、下の野営地では勝利の宴が開かれていた。

だが、『紅き翼』に笑みはない。

「……何が『紅き翼』だ……何が『千の呪文の男』だよ。強いヤツと戦いたいだの言っておいて、結局ボコボコにされてへこんでる」

「はは、俺も奴隷拳闘士の時はもっと強いヤツはいねえのか、とか思ってたな。まあヤマトの野郎にあつてからは考え直したが」

「……」

「……」

また、二人の間に沈黙が訪れる。

「ジャック、頼みがある」

「奇遇だな、俺もだ」

「お前、俺の新技の実験台になってくれ」

「……ぷっ、くっくく、何だよ、考えることは一緒か」

「だな。このまま負けっぱなしするのは性に合わねえ。あのスカした面に一撃くれてやらにゃ、俺たちは前に進めない、だろ？」

ガハハ、と二人して笑い合う。

「おう！ よっしゃ、早速戦ろうぜジャック！ 俺すんげー必殺技思いつんだんだよ！ 雷を自分に直撃させて突っ込む、『神風アタック』だ！」

「俺も新技考えついたぜ！ 世界中の生物から気合を少しづつ吸収して（無理）放つ、『超気合玉』だ！」

二人は立ち上がり、距離をとって向かい合う。

その夜、グレートブリッジの上で、巨大な魔力と気がぶつかり合うのが確認された。

(馬鹿弟子が落ち込んでるかと思って来てみたが……いらぬ心配じやったの)

青山詠春は、グレート＝ブリッジの一室の中で座禅を組んでいた。

(まさか、こんな所で彼に会うとは思ってもしなかったが……やはり彼の強さは変わっていなかった)

詠春は座禅を組みながら、過去に思いを馳せる。

詠春とヤマトが初めて出会ったのは、詠春が十五の時だった。

詠春は神鳴流の修行に明け暮れている日々の中で、五木家に天才がいるという噂を耳にする。

神鳴流の中で、既に詠春の相手ができるのは師範代クラスだけだったことから、その噂の天才に興味を引かれるのは当然の流れだった。木刀を引っさげて五木家に乗り込み、道場で瞑想をしていた大和に手合わせを申し込んだ記憶はまだ、詠春の中に色褪せず存在していた。

もちろん結果は敗北。

しかし、それ以降の詠春の修行はより一層苛烈になり、得た物も確かにある。

(それにしても大和君、随分ガラが悪くなっていたな……)

今の和しか知らない人間には信じられないだろうが、昔の大和は礼儀正しく、素直な少年だった。

手合わせした以降、詠春と大和は親しくなったのだが、その時大和は目上の人間に対する礼儀を心得ていたのだ。それがどうなってあんなったのか、流石に詠春も気になったが、今はそれよりもこれからの方が大切だった。

(今のままでは彼には勝てない……やはり、アレを習得するしかないか)

これまでは大和に勝つことは一度もできなかった。しかし、これからもそうであるわけにはいかない。

詠春は『紅き翼』の中で一番軽傷だった。ほぼ無傷だったと言っても過言ではない。

だが、それは一番手加減されていた、ということにほかならない。

知り合いだから、昔親しくしていたからという理由で手加減された。

その事實は、普段冷静な詠春の心に火をつける。

「見ている……絶対に追いついてみせるからな、五木大和！」

この叫びが隣の部屋にいたアルビレオに聞かれ、後で散々弄られたのは余談である

「そう言えば詠春、貴方の故郷から何かが届いていましたよ」

「本当か!？」

「ええ、私が預かっておきましたが……これは書物ですか？」

「ああ……こんなに早く届けてくれるとは、ありがたい」

詠春が手にした書物、それは青山家に伝わる秘伝の書。

本来五木家にだけ伝わる『斬魄刀』の秘伝。

だが、長い時代の流れの中で、一冊だけ青山家に流れた書物。

かつて詠春が挑み、そして敗北した記憶を持つ斬魄刀。

その名は、  
斬月。

第八話（後書き）

『紅き翼』強化フラグ。

第九話（前書き）

斬月人気あるな……

## 第九話

「ウエスペルタティア王国の王女と会談をするだあ？　おいテオドラ、てめえ何考えてやがる」

グレート＝ブリッジの戦いから二ヶ月が経過したあくる日、緩やかな日々を過ごしていた大和にテオドラはそんなことを言い出した。

あの戦いにより、確かに大和は『紅き翼』を撃退したものの、グレート＝ブリッジ自体は連合に奪還された。

テオドラから事情を聞いたが、建物内部から何者かの手引きがあったということ以外にもわからず、帝国の上層部を悩ませている。

そしてその後の大和だが、てっきり国民からまた戦場に出てくれ、などと言われることも覚悟していたのだが、自分がテオドラの護衛をしていると明かすと『じゃあ護衛の方に専念してくれ』と言われた。

この小さな皇女は自分の予想以上に、国民に愛されているらしい。

そんなわけで、これまで通りにテオドラの護衛をする日々が今まで続いていたのだが、

「……この戦争にはな、どうやら裏で糸を引いている連中がいるよ

うなのじゃ。ウエスペルティアの王女もそれに気づいたらしくての、二人で対策を練ろうということになったのじゃ」

「中立国の王女だろ。そんなヤツと会ったら同盟を目論んでいると思われるんじゃないのか？」

「無論、バレたら大問題じゃ。だからお忍びで行く。そして大和にもついできて欲しいのじゃ」

「まあ、別に異論は無いけどよ」

そのような経緯があり、大和はその会談に護衛としてついていくことが決まった。

会談の場所は帝国にほど近い位置で、テオドラと大和はすでに到着しており、後は王女を待つだけとなっていた。

「王女ってのはどんなヤツなんだろうな」

「わらわも写真とかで顔は知っておるがの、かなりの美人だったのじゃ。ヤマトも見蕩れるかもしれぬぞ」

「はっ、んなわけあるか」

そんな軽口を叩きながら時間を潰していると、フードを目深にかぶった者がこちらに近づいてくるのが見えた。

そして、その女を見た瞬間、大和は目を見開いて硬直する。

「本日はこのような会談の機会を頂き、感謝する」

「いや、それはお互い様なのじゃ、アリカ殿」

彼の前でテオドラが挨拶をしているが、そんなものはまったく意識の中に入らない。

大和の意識はアリカの顔に集中し、それ以外の情報は全て遮断していた。

ふと、アリカが大和の方を向く。

「この者が噂の護衛であるか？」

「そうじゃ。彼が今回の会談を護衛してくれる五木ヤマトなのじゃ」  
アリカとテオドラが自分のことを話しているが、それすらも無視する。

大和はアリカの顔から目が離せない。

そしてアリカは大和の顔と雰囲気を確認し、こう言った。

「ふむ、確かに面白い護衛を雇っておるな」

「いや、面白いのはお前の眉毛だって。枝分かれってなんだよ。面白すぎんじゃないかねえか」

次の瞬間、王家の魔力をふんだんにこめた平手打ちが顔面を直撃し、大和はトリプルアクセルをきめた。

「よし、埋めるか」

「ま、待ってほしいのじゃ！ わらわの護衛を埋めないでくれなのじゃ〜！」

「くそっ、ここ最近で久しぶりにダメージ食らったぞ」

「むしろそれで済んだのを幸運に思っべきなのじゃ、ヤマト……」

アリカは弛んだ空気を引き締めるために咳払いをし、正式に自己紹介する。

「お初にお目にかかる、テオドラ皇女。わらわがウエスペルタティア王国が王女、アリカ・アナルキア・エンテオフユシアじゃ」

「え、アナル？」

次の瞬間、王家の魔力をふんだんにこめた平手打ちが以下略。

「殺す。ケルベラス渓谷に突き落とす」

「ヤマトはそれでも生き残りそうな気がするのじゃが……」

「や、やばい、視界が朦朧としてやがる……」

「もうフォローのしようもないのじゃ」

「さあ、テオドラ皇女。早速会談をはじめよう」

どうやらアリカは大和のことをなかつたことにするつもりらしい。

テオドラとしても、いつまでも馬鹿な問答をしているわけにもいかないの、アリカと話し合いを始める。

大和は二人に背を向ける形で周囲を警戒していたが、

「この間のグレートブリッジでも奴らが動いていたのは間違いなのじゃ」

「ふむ。となると、奴らは両軍に介入したことになるな」

(なんか重要なことを話してるっぽいけど、俺としてはどっぴろい経緯で王女の眉毛がああなったのか、という方が気になる)

あまり集中はしていなかった。

「過去の戦闘の記録も調べたのじゃが、戦争の勝敗が決まりそうな戦いの時は必ず、奴らの介入の跡が見られるのじゃ」

「つまり奴らの目的は、戦争の長期化か？　しかし一体なんのために……」

(元からあんな風に枝分かれしていたのか？　いや、あんな不自然な眉毛が生えたヤツがいるとは思えねえ。必ず裏がある)

「双方ともに、かなりの上層部まで入り込まれているようじゃな」

「うむ、『紅き翼』の調査によるとメガロのナンバー2も黒らしい」

(そうか！　元々は極太の一本の眉毛だったのを、真ん中だけ剃ったのか！　……なるほど、さすがに一国の王女だけはある。侮れねえぜ)

「……マト……ヤマト！」

気がつくのと、いつの間にかテオドラが自分の服を引っ張っていた。

「ん、どうした？」

「どうしたはこっちのセリフなのじゃ。ボーっとして、何か考えこ  
とでもしておったのか？」

「ああ、ウェスペルタイアの王女もやるじゃねえか、と思っつてな」

「ほう、お主もようやく理解したか。無礼者の其方にはわらわ達の  
話し合いなど、とうてい理解できぬと思っつていたが」

認識に多少の齟齬があるが、通じているので問題はない。

「とうか、さっき『紅き翼』って言葉が聞こえたような気がした  
んだが」

「む？ 彼らならば、わらわの協力者として動いてくれているぞ？」

「」「」  
「」「」

思わずテオドラと顔を見合わせる。

「彼らがどうかしたのか？」

この前、ボッコボコにしました。

「「イエエ、ナンデモナイデス」」

そんなこと言えるはずもなく、大和とテオドラは誤魔化すしかなかった。

「さて、会談も終わったんだろ？ さっさと帰ろうぜ、テオドラ」

「う……久しぶりに城の外に出たのじゃ。ちょっとぐらい遊んでもよいではないかの？ ほら、アリカ殿にこの辺の案内もしたいし」

「いや、気遣いは無用だ。わらわにもこの後、出席せねばいかん会議があるのでな」

「ほら、本人もこう言ってるんだろ。それに」

「日が暮れたら、変質者とか増えるしな？」

「……いつから気づいていたんだい？」

ボコリ、と地面が盛り上がり、それは徐々に人の形をとった。

「最初から。俺が王女に二回目の張り手食らった時」

「……なるほど。『紅き翼』を打倒したのはマグレじゃなさそうだね」

地面から現れた白髪の青年に、アリカとテオドラは身構える。

「白髪の男……何度か情報に上がっていたが……」

「『完全なる世界』の人間か！」

「ああ、初めましてだねアリカ王女、それにテオドラ皇女も。僕の名はアーウェルンクス。プリームムと呼んでも構わないが」

「『プリームム1番目』ねえ……センスのねえ名前だな。で、そのプーさんが何の用だ？」

「アリカ王女とテオドラ皇女の拉致」

アーウェルンクスがその言葉を発した途端、アリカとテオドラの警戒は最大になった。

「の予定だったんだけどね。流石に君相手じゃ分が悪そうだな。今日はやめておくよ」

「ん？ 別にその王女を守る気はないが」

大和がそう返した時、テオドラはもちろんのこと、アーウェルンクスさえも目を見開いた。

アリカだけが驚きもせず、表情も変えない。こうなることが分かっていたかのようにならぬ。

「……正気かい？ 僕らにその王女を渡せば、ロクなことにならないなんてこと、少し考えれば予想できるはずだけど」

「別に、俺に害がなけりゃ構わん」

「そ、そんな！ 大和、これはどういっつもりなのじゃ！ そなたはこの会談の護衛として」

「だから、もう会談は終わったじゃねえか」

「うっ!？」

確かに会談は終わっており、テオドラ自身も町に繰り出そうとしていただけに言い返せない。

「い、家に帰るまでが会談なのじゃ!」

「……遠足かよ。あんなテオドラ。俺にはあの王女を守る義理も義務もねえ。お前のことは気に入っているし、皇帝からの依頼もあるから守るさ。けどな、今日会ったばかりのヤツのために命張れっのか?」

「う、うう、でも、ヤマトならあんなやつ簡単に」

「ああ、無傷で殺せる。だからな、テオドラ。 今日会ったヤツのために、俺に人を殺せってのか?」

大和の言葉にテオドラは固まる。

そうだ。彼は見ず知らずの人のために戦うのを嫌い、そして自分もそれを承知していたはずなのに

「くくく、はっははははははは!」

アーウエルリンクスが哄笑をあげる。  
本当に愉快だと言わんばかりに。

「君は面白いな、五木大和！ どうだ、いつそ僕たちの仲間にならないか！ 君がいれば僕らの計画だって必ず成功するはずだ！」

「まあ、内容によるな。テオドラを守る気なのは変わらねえし」

「ヤマト!?!」

「そうだね。確かに、計画も話さずに仲間になってくれというのは虫のいい話だった。……ここで、この二人に計画のことを知られるのは予定にないが、まあ直に分かることだしね」

そしてアーウエルリンクスは語る。

自分たち『完全なる世界』が何を為そうとしているのかを。

「なるほど、このままだったら魔法世界は滅ぶ。だからテメエらはその前に、魔法世界人たちを『完全なる世界』に避難させようってわけだ」

「まあかなり大雑把な概要だけだね。僕たちは誰も傷つける気はないし、殺すなんてもつての外だ。それはもちろん第三皇女も例外ではない。どうか、少し興味が湧いてきたかい？」

「そうだな。他に魔法世界の滅亡を止める手がないのなら、お前らの策が一番かもな」

「ヤ、ヤマト……」

テオドラの顔に絶望が宿る。  
アリカは無表情を崩さない。

「ただ、一つ聞かせる。テメエらはそれで魔法世界人が幸せになれると信じているのか？」

「もちろんだ。少なくとも、このまま消えてしまつよりはずっとマシだろう？」

その言葉を聞いた瞬間、大和から表情の一切が消えた。

「ああ、計画を教えてくれまでして誘ってくれたのは嬉しいが、やっぱりテメエら気に食わねえわ」

テオドラが俯いていた顔を上げると同時に、アーウェルンクスの顔から笑みが消える。

「……理由を教えてもらっていいかな？ それとも、最初から計画を聞き出すための演技だったのかい？」

「いや、テメエらが本気で世界を救おうとしてるのはよく分かった。むしろ世界中から後ろ指さされてんに、一文の得にもならないことをしてるテメエらは、ただのお人好しだと思ってる」

「……ならば、何故」

「まあ、個人的な理由で恐縮なんだが」

青山家に仇なす者を殺せ。五木大和。

「別に、誰かが幸せになるのが許せないとか、そんなんじゃないよ」

お前の力は、殺すためだけのものだ。

「ただな、勝手に人の幸せだの、生き方だのを決めつけるヤツが」

お前はそのためだけに、これまで修行をしてきたのだ。

「俺は大ツキライなんだよ」

第九話（後書き）

少し雰囲気変わるかも。

次回は戦闘。

## 第十話

「まったく、計画を漏らしてしまった上に勧誘も失敗するとは……今日の僕は散々だ」

「ご託はいい、とっとと仕込みでもなんでも終わらせる。待ってやるから」

「それではお言葉に甘えて……」  
『おお 地の底に眠る死者の宮殿よ、  
我らの下に姿を現せ』

アーウェルンクスの詠唱が始まり、それと同時に彼の巨大な魔力が膨れ上がる。

地面を蹴り、宙を舞いながら苦もなく上級攻撃呪文を完成させた。

「挨拶代わりだよ。『冥府の石柱』」

アーウェルンクスの背後上空より、突如として大質量の石柱が複数出現。

総数五本にも及ぶ巨大な石柱は、大和だけでなく背後のアリカとデオドラ共々、圧碎せんと迫り来る。  
それを、

「轟け、天譴」

大和は迎撃を選択。

大質量の石柱を、それ以上の規模を誇る刀をもって爆砕する。轟音を響かせ、打ち碎かれた岩の塊が三人の周囲に突き刺さった。闘技場のように障壁など存在するわけもなく、テオドラは目の前で始まった『殺し合い』の重圧に押されて蹲る。

『冥府の石柱』を砕いた刀を返し、その一撃にて空中のアーウェルンクスを捉える。

だが、

「その防ぎ方は失敗だったね」

まき散らされたのは臓腑ではなく、岩の欠片。

上半身と下半身を分断されたアーウェルンクスは、地面へと落ちる際に砂と化した。

「ドリュ・ベトラス石の槍」

周囲に突き刺さった岩石群。その中の一つから大和の頭めがけて鋭い石柱が飛来する。

大和は首を傾げることで回避するが、その石柱から石柱が生え、避け続ける大和をまるで茨のような槍が追いつける。

「二人とも、伏せていろ」

石の槍は周辺の岩石からどんどんその数を増しており、石でできた檻は物理的に回避ルートを潰している。

そこで大和がとった方法は単純明快。

全てを薙ぎ払う、である。

巨人の腕と刀は、咄嗟に地面に伏せたアリカとテオドラの上を通り過ぎ、まるでおもちゃのように周りの岩石を吹き飛ばしていく。

だが、アーウェルックスの攻撃は止まらない。

「『千刃黒耀剣』」

まき散らされた石の礫のことごとくが黒き刃となり、三人を包囲する。

「一斉射出」

アーウェルンクスに躊躇いはない。

この男が敵に回れば、自分たちの主以外に太刀打ちできるものがない。

今回の任務は重要人物二人の拉致だったが、危険度言えば大和の方が遥かに高い。

故に、魔法が通じぬアリカはともかく、テオドラ一人くらいなら死んでも構わない、という気で攻撃している。

大和の意識をテオドラを守ることに使わせるために。

「唸れ、灰猫」

大和の持つ刀の刀身が崩れ、灰のように空中を舞う。

灰猫とは、粉々になった刀身が相手を切り刻むという応用性の高い斬魄刀であるが、この状況でテオドラを守るには一手足りない。

「破道の五十八　　？嵐」

大和は続けてその一手を打つ。

詠唱とともに、大和たち三人の周囲を竜巻が覆う。

台風の目の中に入り込む形となった三人だが、この鬼道にアーウェルンクスの一斉射出から身を守る防御力はない。

しかし、そこに灰猫が加われば話は別だ。

灰猫は？嵐の風に乗る、まるで鉄のカーテンのような防御壁に姿を

変える。

アーウエルンクスの千の刃はそれを突破せんと試みるが、その風に触れた刃は例外なく刻まれ、削られ、風化していき、最後にはその嵐に吸収されていった。

なんとか危機を逃れ、安堵するテオドラの顔に影が落ちる。

「上ががら空きだよ、五木大和。『万象貫く黒杭の円環』」

咄嗟に上を見上げたテオドラの目に映るのは、無防備な上空から放たれる無数の黒杭。  
下は地面、そして横は嵐。逃げ場は存在しない。

「舞え、袖白雪」

解号と共に、大和の刀が再び変化。  
そして現れた、刀身も鍔も柄も全て純白の斬魄刀に、テオドラは危機的状況を忘れて目を奪われる。

「初の舞  
月白」

大和が刀で地面に円を描き、詠唱を終えた瞬間、その円の範囲内の天地全てが凍りついた。

無論、黒杭もその氷結領域から逃れることはできず、凍り、粉々になつて砕ける。

「これで終わりか？」

「まったく……本当に、君を引き入れることができなかつたのが悔やまれる」

「なら、今度は俺から行くぞ」

大和は袖白雪を解除。

刀を半回転させ、逆手に持ち帰ると同時、大和の体がブレる。

「じんてきしやくせつ  
尽敵罄殺」

その言葉はアーウェルンクスのすぐ背後から聞こえた。

「雀蜂」

まさに一瞬、回転をかけた瞬歩『閃花』により回り込まれたアーウエルンクスだったが、それからの大和の攻撃を右手へのかすり傷で済ませることができた彼は、やはり超一級の実力者だった。

（今のは瞬動！？ いや、途中で軌道を変えることができる瞬動など聞いたことがない！）

咄嗟に掌に生み出した石の剣で、大和の新たな斬魄刀 右手中指に付けたアーマーリング状の刃を防いだ。

その際、剣を持った右手にかすり傷を負ったが、それは戦闘に支障のない程度。

そのはずだったが、

「なんだ……これは」

アーウエルンクスの右手に出現した蝶の紋章。  
別に体に異常は感じない。

魔力が減少したわけでもないし、毒を打ち込まれたわけでもない。

しかし、右手に存在する蝶の不吉さは、アーウエルンクスに二の足を踏ませた。

「その紋章が気になるか？」

「……まあね、どうせロクなものじゃないんだろうけど」

「正解だ。その紋章は『蜂紋華』ほうもんか といってな、その気になる効果だ

が」

大和は隣に積み上がった瓦礫に、雀蜂を刺す。

「この斬魄刀に傷つけられた位置に、蝶の紋章が浮かび上がる」

アーウエンルクスの右手同様、蜂紋華が出現した。

「そして、同じ箇所をもう一度傷つければ」

蜂紋華の中心を、雀蜂で刺す。

その瞬間、蝶の紋章が巨大化し、瓦礫を飲み込んだ。

「　　な？　　ロクなもんじゃねえだろ？」

「ッ！」

再び瞬歩にて接近、そのまま近接戦闘に移行するが、元々アーウエンルクスは戦士よりも魔法使いタイプであるのに対し、大和は近接が主流。

さらに、右手の蜂紋華をかばいながら戦わなければならないアーウエンルクスは苦戦を強いられる。

「はっ、はあっ、……くっ」

「これで右手のを合わせて、もう五箇所か。そろそろ限界だろ？」

息切れするアーウェルンクスと、涼しい顔をした大和。

最早、勝敗は明らかだった。

「確かに……これは少しやばいかもね」

でも、と続けるアーウェンルクス。

「僕は慎重だから、保険はかけておくタイプなんだ」

そう嘯き、懐から四枚のカードを取り出して、招喚の言葉を唱える。

その言葉に反応したカードは発光し、彼の四人の従者を呼び出す。

「一人一人が『紅き翼』級の実力者だ。それぞれ火、風、氷、影のエキスパート。君も少しは手こずってくれるよね？」

そして彼らは自分たちにできる最大の攻撃を放つ。

『燃える天空』

『千の雷』

『こおる大地』

『千の影槍』

『引き裂く大地』

一人に対して使う規模の魔法ではない。

五つの魔法、そのどれもが対軍勢用魔法。

圧倒的練度で放たれる、それらの攻撃は全てを灰にし、焦げ尽くし、凍てつかせ、串刺しにし、大地の力で飲み込む。

「なるほど。確かに、これはちょっとキツイ」

万象一切灰燼と為せ。

「でも ピンチと言つほどでもないな」

流刃若火。

「逃げたか……まあ妥当な判断だな」

刀をひと振り、解除して鞘に戻す。

「それにしても王女さん、アンタ胆が座っているな。普通はそののじゃじゃ馬姫みたいになるはずだが」

魔力や気の飛び交う戦闘を間近で見せられたせいか、テオドラは気を失っていた。

そして、そのテオドラを平然と支えるアリカ。

「ふん、普通の戦闘ならばいざ知らず、其方の戦いなど見ても怖くなるわけがない。そこらの子供が喧嘩しておる方がわらわには恐ろしいわ」

「ああ？」

「まだわからんか？ 人を殺すのが怖くて、怯えながら剣を振っておる其方など、恐ろしくもなんともないわ」

「おい、テメエ」

大和がアリカに掴みかかる。

そしてその時、

「五木ヤマトツ！ 姫さんから手を離しやがれッッ！！」

ナギ・スプリングフィールドの咆吼が響く。

大和はその声を聞きながら、またややこしいことになった、とため息をついた。

## 第十話（後書き）

テストがあるから、少しゆっくりになるかも。

外伝一（前書き）

みんな大好き刀子さんのターン。

## 外伝一

『脇を締め過ぎです。もう少し力を抜くといいですよ』

京都の旧家の家系図は、非常に入り組んでいる。

宗家や分家、その他のしがらみが複雑に絡み合い、少しでも自分の家の地位を上げようと必死だ。

そして彼女、葛葉刀子はいわゆる分家、あまり地位の高くない家の出身だった。

気や魔力といった、生まれ持った素質は血筋によって左右される。

無論、それだけが力の強さを決める要因ではないし、日々の修練により増幅させることも可能だ。

稀にだが、先祖返りのような現象を起こして、強い力を宿すこともある。

実際刀子もそのタイプで、宗家である五木家にも劣らぬほどの気を宿していた。

だが、それが必ずしも良い結果に結びつくとは限らない。

強い力は宗家の人間に疎まれる。  
分家の分際で、と。

強い力は分家の人間に妬まれる。  
同じ分家なのに、と。

その生まれ持った気と剣術の才能は、神鳴流と出会うことにより最大限に引き出され、宗家を含めた同年代で刀子に敵うものはいなかった。

刀子自身剣術は好きだったし、自分が力をつけることで家の地位が上がり、家族が喜ぶのも嬉しかった。

そのために多少の陰口を叩かれようと、我慢した。  
宗家や分家の人間に嫌がらせを受けても、我慢した。

だが、今日家族に頼まれたことは刀子には我慢できなかった。

三日後の宗家との御前試合、相手の顔を立てるために、わざと負けてくれ。

それからは何を言ったのかは覚えていない。  
恐らくは怒鳴ったのだと思う。

ただ感情に任せるがままに、心の内側に溜まっていたドロドロを吐き出した。

この時の刀子は僅か十歳。

この年の子供にしてはよく我慢した方だし、聞き分けの良い子供として今まで振舞っていた。

しかし、ストレスを感じないわけではないし、嫌なことがあれば確実にそれは心に蓄積していく。

そして今日、それが爆発してしまった。

刀子は家族に一方的に泣きわめき、叫んだ後、修行を終えた時に持っていた木刀を掴んだまま、訳も分からず外に飛び出した。

外に飛び出した刀子は、とにかく人のいない場所にいたくて、山の中に入っていった。

本来、許可なく立ち入ることは禁止されていたが、冷静さを失った  
刀子は思い至らず、そのまま茂みを掻き分けて進む。

そこで、ふと水の音が聞こえた。

(この音って……滝?)

その音に釣られるように歩いていくと、見上げんばかりの滝の下に  
ついた。

涙やその他諸々により、顔を洗いたかった刀子は滝壺にまで移動す  
る。

(……ひどい顔やな)

顔を洗う際に水面で自分の顔を確認したが、目は赤く腫れ上がって  
おり、とても人前に出られた顔ではなかった。

何も考えずに家を飛び出した方がいいが、行く宛もなく、これからど  
うすればいいかもわからない。

途方に暮れる刀子だったが、ふと家から出る時に持ち出した木刀に  
気がつく。

他にすることもないので、仕方なく河原で素振りをすることにした。

いつもならば、素振りをしていれば雑念が消えていく。

だが、今日に限って余計なことばかり考えてしまう。

刀子が剣術を始めたきっかけは、親に褒められたからだ。

幼い頃、子供心にもわかった。

自分が頑張れば、お父さんやお母さんが喜ぶ。

だから今まで努力してきたというのに、一体どこで間違ってしまったんだろうか。

思い返せば、また涙が滲んできた。

慌てて袖で顔を拭う。

そして、少年の声が響いてきたのは、そんな時だった。

「脇を締め過ぎです。もう少し力を抜くといいですよ」

「だ、誰や!？」

突然届いた声に刀子は動揺する。

そして、ここが立ち入り禁止の地であることにようやく思い至った。

（妖怪の類！？ いや、たとえ人間でも、宗家の人やったら……！）

最悪の可能性に、刀子の顔が蒼くなる。

周囲を見回すが、人影は見えない。

その時滝の上の方から、とうっ、とうっ、という間抜けな声が聞こえた。

「へ？」

刀子は反射的に上を見上げる。

そこには、自分と同じ年頃の子供が両腕を広げて、滝壺に向かって落っこちているという、よくわからない状況があった。

その子供は頭から着水。水飛沫をほとんどあげない、見事な入水だった。

予想外の出来事に思考停止する刀子だったが、しばらくして再起動する。

そして気づいた。少年が浮いてこない。

訝しむ刀子だったが、ようやく水面に影が浮かび　そして絶句した。

ぷかり、と浮いた少年の周りに、なんか、血のような赤いものが。

「え……えええええ！？」

「いやー、助かりました。ここって結構水浅いんですね」

予想外でした、と笑う男の子。

それを見て刀子は、はあ、と気のない返事しかできなかった。

あの後、動揺から立ち直った刀子はすぐに少年を引き上げ、応急手当をした。

少年も額を切っただけであり、出血量のわりに軽傷だった。あんなに慌てた自分は何だったのだ、と問い詰めたい。

「えっと、それであなたは誰なん……ですか？」

慣れぬ敬語で刀子は尋ねる。

家同士の付き合いの関係で、同年代の人間の顔は大体覚えていたとえ関わりの少ない家でも、少なくとも顔に見覚えくらいはある。よって、このまったく見たことのない少年の正体がわからなかった。

「僕は大和といいます。この辺を散歩してたら道に迷っちゃって……山に迷い込んだ時は、もうダメだと思いましたよ」

ああ、それと別に敬語はいいです、と付け加えた。

「それで山の中をさまよっていたら、素振りの音が聞こえてきたので、こっちに来たらああなった、という次第です」

大和と名乗るこの少年は、ひょっとしたら宗家の客人ではないかと刀子は考えた。

それならば自分が顔を知らないのも頷けるし、退屈で外を歩いていて道に迷った、と考えれば辻褄があう。

「えっと、ウチは葛葉刀子って言います。それで、実はこの山って勝手に入っちゃダメなんですけど、ウチ色々あつて混乱してて」

刀子の言いたいことがわかったのか、ああ、と笑いながら頷く。

「大丈夫ですよ、誰にも言いません。そもそも僕も勝手に入っちゃったわけですし、おあいこです」

それと敬語はいりません、と言う。

「うう、でも、君も敬語つこうとるし」

「僕のは癖になってるんです。不快に感じるなら直すように努力しますけど……」

「そ、そんなことない！」

刀子の躊躇いは、自分だけ敬語を使っていないのは子供っぽい、という意地だったのだが、それを自覚することはなかった。

「じゃあ、僕もできるだけ普通に話すようにするから、刀子ちゃんもそれでいい？」

「……うん。ええけど、その刀子ちゃんって」

「嫌だった？」

「……ウチ、自分の名前、あんまり好きじゃうねん。かわいくないし……」

「そう？ 凛々しい雰囲気似合っていると思っけど。それと、僕  
のことも大和でいいから」

不思議な少年だと思った。

会話のペースをずっと握られっぱなしだ。

それは別に不快ではないけれど、気が付けばお互いに各前で呼ぶこ  
とを決められてしまった。

（あ、そういえば、苗字聞いてへん）

「それで、刀子ちゃんはこの所に何をしに来たの？ ここには雄  
大な大自然しかないけど」

「え？ あ、ええと、それは」

家族と喧嘩して家を飛び出してきた、とは言いづらかった。

第一、事情を話して、外部の人間に八百長をもちかけられたなどと  
知られれば大目玉だ。

どう誤魔化したものかと、周囲に忙しなく目を泳がせる。

そこでふと、川辺に置いてある木刀が目についた。

「そ、そう！ 素振りしに来たんよ！ ウチの道場じゃ、あんまり  
集中できへんかったから！」

かなり苦しい言い訳だったが、大和は深く問い詰めるわけでもなく納得した。

「じゃあさ、刀子ちゃんが素振りしてる姿、見学してていい？」

「え……」

予想外の切り返しに、刀子が言葉に詰まった。

「で、でも、もうそろそろ暗くなるし」

「大丈夫。夜までには帰るし、それにどのみち刀子ちゃんに付いていけないと、山を降りられないしね」

「じゃ、じゃあ直ぐに送るから」

「それはわざわざここまで来た刀子ちゃんに悪いよ」

「ウチの素振りなんて見てもおもしろくないで？」

「僕も剣術を習っているから、何かアドバイスとか出来るかもしれないよ？」

反論を片っ端から潰されて、結局刀子は彼の前で剣を振ることになった。

河原で素振りをする刀子と、それを石に座りながら見学する大和の構図は、傍から見れば奇妙なものだっただろう。

「やっぱりもう少し腕の力を抜いた方がいいよ」

(うつ、じつと見られると恥ずかしい)

「刀子ちゃん？」

「え、な、なに？ 大和くん」

「いや、なんかボンヤリしてるみたいだから。なにか悩みごと？」

「うつん、そんなんやあらへんよ。それで、さっきは何て言ったん？」

「そうそう、腕の力がね……」

大和は自分の体で解説する。

大和の説明はとてもわかりやすく、下手な師範代よりも要領を得ていた。

その知識に驚きながら、この大和という少年は一体何者なのだろうか、という疑問が胸の中で膨らんでいく。

(そういえば、ウチの素振りの音が聞こえたって言うってたけど、こんなに滝の音がうるさかったら、普通聞こえへんもんちゃう?)

疑問が疑問を呼び、我慢できなくなった刀子は、この不思議な少年のことをもっと知りたいと思うようになった。

「ねえ、大和くんの素振りも見せてくれへん？」

「ん？ いいよ」

あっさりと了承した大和は、刀子から木刀を受け取り、その感触を確かめてから剣を振る。

そして彼の素振りを見た刀子は目を剥いた。

(す、すごい。木刀がほとんど見えへん！)

集中力、構え、体さばき、剣速、残心、そのどれをとっても刀子より上。

特に、風切り音さえ置き去りにするほどの剣速は、いつそ感動すら覚える。

その知識と指導力から只者ではないと思っていたが、大和の力量は刀子の予想の遥か上を行っていた。

「ふう、これでいい？」

一通り型を終えた大和が、刀子に尋ねる。

しかし刀子は鮮やかな、美しくすらある剣舞に見蕩れており、すぐに返事を返せない。

「刀子ちゃん？」

「……ふえ？」

「いや、ふえって……」

「……はっ、い、いや、ちゃうねん！ その、凄く綺麗な太刀筋だったから見蕩れちゃって、ああもう何言うとんのウチ！？」

テンパった。

「いや、これぐらい刀子ちゃんならすぐにできるよ？」

「いや、無理や……ウチ、そんなんでできる自信ない……」

「大丈夫だって。ほら、こっちにおいで」

大和は刀子の腕を掴み、優しく引き寄せせる。

「ええ！？ ちょ、何するん！？」

「はい、木刀持って」

「そんなん強引すぎ……え？」

「僕が型を教えてあげるから、一緒に練習しようっ。」

「……」

「ん？」

「……スケベ」

「えええええ！？」

「はい、ここで足を前に出す。大切なのは重心を崩さないこと」

「なるほど……」

刀子の力は、大和のわかりやすい指導のおかげもあり、この短時間にしては飛躍的に上昇した。

大和は観察眼も異常に優れていた。

悪い癖があれば即座に指摘し、正しい型に直す。

本当にこの少年は何者なんだろうか。

その疑問は刀子の胸の中に残っていたが、そんなことがどうでもよくなるほど充実した時間だった。

「すごいな、こんなに早く覚えちゃうなんて」

「ううん、大和くんの教え方がよかったからや」

新しい技、新しい足捌きなどを覚えた刀子の精神は高ぶっており、今すぐにも試したくなっていた。

次の試合はいつだろう、と考えた時、不意に思い出す。

三日後の宗家との御前試合、相手の顔を立てるために、わざと負けてくれ。

「あ……」

「どうしたの？」

「え、な、なんでもなくて」

思い出してしまった。

自分は三日後、わざと負けねばならない。

感情のやり場を無くし、家を飛び出してしまったものの、旧家というものは面子を非常に重んじる。

御前試合で宗家が分家に無様に負けることが、宗家にとってどれほどの屈辱であるか、聡い刀子は十分に理解していた。

刀子自身、落ち着いた今となっては父と母の言うこともわかる。

宗家に恥をかかせたとなれば、その後に一番苦しむのは他でもない刀子だ。

ただ、こんなに一生懸命に指導してくれる大和を見ると、わざと負けるというのが、ひどい裏切りに思えて

「ごめんなさい……」

「え、どうしたの刀子ちゃん？」

「ごめんなさい……っ」

ポロリ、ポロリと。

涙がこぼれ落ちる。

「え、ええ！？ どっか痛めたの！？ それともさっき、刀子ちゃんに触りながら教えたのが気持ち悪かったり!？」

「ぐす、ちゃ、ちゃうねん……ほ、ホンマに、ひっく、うっ、ごめんなさい……」

罪悪感に耐え切れず、とうとう泣き出す刀子。

それを見て慌てる大和。

「うえええええええええん!!」

「うえええええええええええ!？」

「そんでな、大和くんに申し訳ないって思ったんよ……」

「そうだったのか……」

刀子は大和に事情を説明した。

といても、宗家だの分家だのと正直に全てを打ち明けてしまっわけにもいかず、ただ『今度の試合でわざと負けないといけない』とだけ言った。

「ホンマにごめんな、せつかく色々教えてくれたのに……」

「ううん、刀子ちゃんが気にすることじゃないよ」

「でも」

「はい、『でも』は禁止。そんな事情があるなら仕方がないよ。それとも、僕と一緒に練習するのはイヤだった？」

「そんなわけない！」

自分でも驚くほどの声が出た。

そんな刀子を見て、大和は笑う。

「ならいいじゃない。それに、僕にも隠してることはあるし」

「大和くん？」

「ん、ああゴメンゴメン。もう暗くなってきたし、そろそろ帰らないとね」

「あ……」

もう、この夢のような時間が終わってしまふ。

刀子の心に悲しみと、寂しさが募った。

「さあ、家の方が心配しちゃうよ。早く帰ろう」

「……うん」

そして二人は山を降りる。

その間、二人に会話はなかった。

「ここまで大丈夫。もうあとはわかるから」

「……うん」

「刀子ちゃんは大丈夫？　ここから一人で帰れるの？」

「……うん、大丈夫。この辺詳しいから」

上の空で受け答えをする刀子。

「そう。それじゃあね、刀子ちゃん」

「あ……」

くるり、と大和は宗家の屋敷へ帰っていく。

再会の約束もできなかった。

ううん、それ以前に剣術を覚えてくれたお礼もしていない。

何か声をかけなければいけない。

でもなんて言えばいいんだろう？

ありがとう？

またね？

それとも……

「刀子ちゃん」

はっ、と意識が浮上する。

気が付けば、彼は歩みを止め、こちらを振り返っていた。

「月並みなセリフで悪いんだけどさ……」

彼は恥ずかしそうに頬をかく。

そして、言った。

「刀子ちゃんには、泣き顔よりも笑顔の方が似合ってる。だから安心して。僕がなんとかするから」

不覚にも、また泣きそうになった。

そして、家に帰った刀子は家族から告げられる。

宗家の方でなにかゴタゴタがあったらしく、御前試合は急遽、中止になったと。

父と母が刀子に謝る。

すまなかった。

辛い思いをさせた。

刀子は泣きそうになったが、ここで泣いたら進歩がない。

唇を噛み締めて、必死に涙を堪える。

彼にこんな顔を見せるわけにはいかない。

結局、今日は一度も彼に笑顔を見せることはできなかった。

それなのに、彼は泣き顔よりも笑顔の方が似合うと言ってくれた。

ならば、ここで笑顔の練習をしておくべきだろう。

また、あの場所であ会った時に、とびっきりの笑顔を見せるために。

## 外伝二

「君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！  
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ！」

胸の前で印を組み、詠唱する大和。

「破道の三十三 赤火砲！」

突き出した腕から、その名の通り、まさに大砲のような火球が発射され、赤い残光を引いて滝に直撃。

瞬時に蒸発した水分は衝撃波とともに、周囲にまき散らされた。

霧のような蒸気が眼鏡を曇らせるが、刀子は気にせず、というより気づいていないようだった。

口をあぐりと開けて、大和のデタラメさに思考停止する。

「これが中級鬼道の赤火砲。威力を弱めて出せば照明にもなるし、かなり使いどころの多い鬼道だよ」

大和はなんでもなさそうに言うが、本来鬼道というものは、鬼道衆なる専門家が一生をかけて極めていくものだ。

補助的に使う、というのならばわかる。

だが今の大和の赤火砲は、威力、スピード共に実戦でも通用するレベルだった。

剣を振るって鬼道も使える、などという人間がいるなど聞いたこともない。

結局、大和が声をかけるまで刀子は呆然としていた。

あれから、刀子は暇な時間を見つけては山の中の滝まで行った。

大和は大抵の場合ここで修行しており、刀子が来るようになってからは合同で訓練、もしくは大和が刀子の指導をするという日々が続いた。

入れ違いになることもあったが、刀子は大和と初めて会ったこの場所が気に入っており、ここ以外の場所で待ち合わせをする気にはなれなかったのだ。

それには大和と二人きりになりたい、という乙女的要素もなきにもあらずだったのだが、幸か不幸か、刀子本人を含めて気づいていない者はいなかった。

そして、それほどの時間を共に行動しているとやはり、大和が何者なのかという疑問が再び浮かび上がる。

しかし、それを聞いてしまえば、この穏やかな時間が壊れてしまうかもしれない。

(でも、もし大和くんが宗家の客人で、もうすぐ帰らなあかんとかやったら……)

そんなこと耐えられるわけもない。

聞こうが聞くまいが、どちらにせよ別れの可能性はある。

だったら、せめて勇気を出して聞いてみよう。

そこまで決意するのに三日かかった。

「や、大和くん！」

「ど、どうしたの急に血相を変えて」

「あなたは一体何者なん!？」

……もう少しマシな尋ね方はなかったのかと、数秒前の自分を殴りたい。

「僕？」

「う、うん。だって、大和くんのこと今まで見たことないし、だったら宗家のお客さんなんかなくて思ったんやけど、ずっとここに来てくれるし。剣の腕がすごいと思ったら、三十番台の鬼道を簡単に使っちゃうし」

「あー……（本当は詠唱破棄もできるんだけど、それを言ったら大変なことになりそうだな）」

思い当たる節があるのか、視線を逸らしながら頬を掻く大和。

「いや、別にすごい秘密があるとかじゃないんだけど、今更言うのはちょっと恥ずかしいというかさ」

「教えてくれへんの……？」

刀子の上目遣いと涙目（無意識）のコンボにより、大和の心は多大なるダメージを負った。

「えっと、言ってもいいけど、それで刀子ちゃんの状態が変わったりしないかって」

「ウチってそんなに信用ないんや……」

「えっ？ いや、あの」

さらに追い打ち。

「ごめんな……大和くんの迷惑も考えんで」

「ぐふっ」

トドメをさした。

「ま、待って！ 言う、言うから！」

ゴホン、と咳払いし、大和が自分の苗字を告げようとした時、

「こらーっ！ 大和君、今日は俺と試合する予定だったろうがー！」

山の下から若い男の怒りの声が響いてきた。

「あっ、やば。詠春さんだ」

「え、詠春さんって……あの青山家の！？」

刀子は、思わぬ人物の出現に目を見開く。

青山家と近衛家、京都においてこの二つの家を知らぬ者はいない。

特に優れた武芸者を輩出する青山家は、武を志す者たちから崇拜されてさえいる。

刀子もその例に漏れず、彼らを目標として設定し、いつか追いついてみせると息巻いていた。

もっとも、最近はその目標が大和に変わりつつあるのだが。

「あわわわわ」

「いつけない、今日は詠春さんと三本勝負する日だった」

完全に忘れてた、と頭を搔く大和。

どうしてそんなに落ち着いているのだろうか。

あの青山家の詠春と勝負できる、と分家の人間が言われれば、一ヶ月ほど山籠りして備える。比喻ではなく。

それをすっぽかしておいて、全く慌てていない。

刀子の中の大和の印象が、もはや宇宙人のそれに近づいた。

「ごめんね刀子ちゃん、この埋め合わせはいつか必ずするからさ」

ちよつと行ってくるね、とまるで近くのコンビニ行ってくる的なノリで大和は山を降り始めた。

刀子はそれを口を開けて見送っていたのだが、途中で大和がふと足を止める。

「僕の名前は五木大和。これからよろしくね、刀子ちゃん」



「ちょっと、お母さん！」

かれこれ一時間ほどフリーズしていた刀子だったが、我を取り戻した瞬間、家に向けて走った。

「あらあら、どうしたの刀子ちゃん。そんなに血相を変えちゃって」

「五木大和くんって知ってる!？」

その名前を聞いた瞬間、刀子の母親はわずかに目を見開いた。

「……どこで彼のことを知ったの？」

「え、あ、その」

その反応から、自分はなにかいけないことを聞いてしまったのかと心配になる。

「聞いちゃアカンことやった……?」

「……そんなことはないわ。でも、刀子ちゃんが彼のことを知ってるなんて思わなかった。どこかで知り合ったの?」

「うん。この前、家を飛び出した時に……」

それを聞いて、母親は納得した。

「じゃあ試合が中止になったのも、やっぱり彼の……」

「お母さん？」

「ああ、そういえば説明がまだだったわね。別にあの子の存在は隠されているわけじゃないわ。実際、大人たちの大体は彼のことを知っているしね」

「じゃあ、なんで」

「……才能がありすぎた、からかしら。剣術も鬼道も」

「それがいけないことなん？」

「いけなくはないのよ……ただね、剣術で青山家を上回る子がいる、  
というのはあまり広まっていい情報じゃないの」

「あ……」

それは刀子も以前に経験したこと。

旧家は面子を重んじる。

確かに、五木家は代々伝わる由緒正しい一族だ。

だが、青山や近衛といった頂点に比べると、どうしてもいくらか見劣りする。

その家たちにとって、大和の存在はあまり広まってほしくないに違いない。

「だから、彼のことを口に出さないのは暗黙の了解のようなものの。誰だって青山に睨まれたくないから」

「そうやったんや……」

そんな事情も知らずに、自分は大和に無神経なことを聞いてしまった。

自責の念に駆られて俯く刀子だったが、その肩に優しく手が置かれる。

「でもね、刀子ちゃん。大和君と青山家の子たちはとっても仲がいいの」

「え？」

「大人の事情なんて知ったことじゃない。そういうことなのよ、あの子たちにとってはね」

そう言われて、刀子は思い出す。

勝負をすっぱかされて怒っていた詠春だったが、恨んでいるような声だっただろうか？

青山家から圧力をかけられているにも関わらず、大和は詠春のことを疎んでいるようだっただろうか？

「あ……」

そんなことはなかった。

詠春の声は不真面目な弟を叱るような声だったし、大和も詠春に隔意があるようには見えなかった。

つまり、彼らにとってはどうでもいいことなのだ。

「それにしても大和君かー。ねえ刀子ちゃん、どうせなら玉の輿を狙ってみない？」

「……ふえ？」

母親のその発言により、シリアスな空気は粉微塵にされ、ちょうど帰宅した父親が『刀子をやれるか!』と叫び、てんやわんやの大騒ぎとなった。

「は、初めまして。わたしは葛葉刀子っていいいます」

「俺は青山詠春。別にそんなに固くならんでいいよ」

「そつどすえ刀子はん。ウチは青山鶴子。もっと碎けていきまひよ」

「わ、わたしは青山素子です。よろしくお願いします、刀子さん」

その後、刀子は大和から青山家の三人を紹介された。

（あ、アカン。この人たち、なんかオーラみたいなん出とる！）

錯覚だ。

元々、この三人は家の地位などをあまり気にしない質だったのもあり、親しくなるのにそう時間はいらなかった。

修行の時間が終われば、誰からともなくいつもの滝まで集まり、そこで遊んだり、剣を教え合うといった生活が続いた。

刀子は大和の修行の成果もあり、急激にその力を増して、今や鶴子のよきライバルとなった。

そんなある日のこと、

「うっうっう……」

素子が泣きながらいつもの場所に現れる。

既に素子以外の全員が集まっており、大和と詠春、刀子と鶴子のペアに分かれて試合をしていた。

泣きながら現れた素子を見た四人は、血相を変えて詰め寄る。

特に大和と詠春と鶴子の三人は、幼い素子を溺愛していた。

「ここに来るまでに、蜂に刺されました……」

「蜂退治に使える鬼道は何だったかな……飛竜撃賊震天雷砲でいいか」

「まあ待てよ大和君、ここは俺がこの前覚えた雷光剣でだな」

「まったく、一気に殺すなんて二人とも甘いどすなあ。一匹一匹斬り刻んでいくのに決まってるやないですか」

三人は顔を見合わせて笑う。

「」「蜂狩りじゃあっ……」「ここら一帯の蜂を絶滅させんぞっ……」

そのまま三人は山の中に消えていった。

取り残される刀子と素子。

「……」

「……」

「それじゃ、素子ちゃんはウチと稽古しとこか？」

「は、はい！ よろしくお願いします、刀子姉さま！」

「破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲！！」

「神鳴流奥義、雷光剣！！」

「神鳴流奥義、百烈桜花斬！！」

その日、巨大な山のひと区画が消滅した。

楽しい日々。

「ぐぐぐ……今日こそは大和君から一本取れると思ったのに」

「あそこで勝負を焦ったのが敗因です。もう少しどっしり構えなアカン」

「兄様……かっこわるい」

「ぶげらっ!?!」

穏やかな日々。

「ねえ、大和くん。一つ聞いてええかな？」

「どうしたの刀子ちゃん」

「大和くんはすつごく強いし、毎日修行しとるけど、一体なんのために力をつけてんのかなって」

「……………」

「聞いちゃアカンかった……………」

「…………いや、隠す理由もないけど、苗字と一緒に、知られるのがなんか恥ずかしいというか」

照れくさそうに頬を掻く大和。

それが大和の癖だと理解するほどには、刀子は彼とともに行動していた。

「毎日修行して、力をつけようとしてるけどさ、別に戦うのが好きってわけじゃないんだ。いや、むしろ嫌いなぐらい」

「うん」

それも理解していた。だから気になった。

「…………話は変わるけど、鬼道ってさ、破道に比べて縛道はあまり評価されてないんだ」

「そうなん？」

「うん。敵を殺さずに捕らえるというのは軟弱なんだって」

でも、と続ける。

「僕はどちらかといえば縛道の方が好きだな。作成者の、できるだけ人を殺したくないっていう気持ちがある」

「……」

大和は今、大事な話をしているということを察して黙り込む刀子。

「僕らの修行してるのは、どう言い繕ってもなにかを傷つける技術だ。それは言い訳のしようもない」

「……」

「でもさ、この技術でなにかを守れることもあると思っただ。僕はこの技術で、人を守る存在になりたい。多くの人の命を救えるよ  
うな存在に」

そう、お伽噺の英雄のように、僕はなりたい

「……もし」

刀子が口を開く。

「もし、大和くんが英雄になってくれたら、ウチのことも守ってくれますか？」

「ああ、もちろん!!」

満面の笑みで言い切る大和。

刀子はその顔に見蕩れ、どンドン顔を近づけていき

「ちょ、二人とも押さないで……!!」

「もう少し詰めいや、ウチが見えへん……!!」

「あ、あ、刀子姉さまがキスしそう……」

「マジか!?!」

大和と顔を見合わせる。

二人揃って笑う。

そして、傍らに置いてある木刀を手にとった二人は、そのまま茂みへと歩いていき、

「「のわーっ!?!」」

二人分の悲鳴が響きわたった。

こんな日がいつまでも続くと思っていた。

こんな穏やかな日が、いつまでも続くのだと。

だが、大和と刀子が初めて会った日から三年後、その日に

全てが壊れた。

それからさらに、二年後

「ここに来るのも久しぶりですね……」

真夜中、丑三つ時を過ぎたところに、刀子はいつも遊んでいた場所までやってきた。

刀子は十五歳になり、昔のようなオドオドした態度はもう無い。

「起きろ、紅姫」

刀子の持つ刀が鍔の無い、短めの直刀に変化する。

斬魄刀は、宗家である五木家だけのものであり、普通は分家に伝えられることなどない。

だが、血の滲むような修練により、宗家の中でも敵うものがないなくなった刀子は、特例として一冊だけ斬魄刀の蔵書を見ることが許された。

そして、刀子は見事、斬魄刀『紅姫』を屈服させることに成功した。

「啼け、紅姫」

刀を一閃、刀身から放出される血霞みは、見事に巨大な滝をまっぴたつにした。

「大和さん……あれから、私は強くなりました」

二年前のあの日、大和になにがあったのか、刀子は詳しく知らない。

ただ、あの日に天ヶ崎夫妻が西洋魔術師に殺されたことを発端とする、大きな戦争があったとしか知らない。

そして、その戦争に大和が参加し、西洋魔術師を皆殺しにして、帰ってこなかったことしか

大和が消えたその日から、詠春は物思いにふける日が多くなり、その後、武者修行の旅に出た。

鶴子も素子も、この場所にはあまりこなくなつた。

刀子は河原の石を拾う。

うっすらと赤い石だった。

そう、まるで血が染み込んだかのような、赤い石。

本当に、刀子はあの日に大和が何を思い、何をしたのかを知らない。

ただ、いつも想像した。

この技術で、人を守れる存在になりたい。

笑いながらそう語った少年は何を思い、その刀を振るっただろうか、と。

「なんで……ウチを置いていったんよ……」

刀子の目から涙がこぼれ落ちる。

血に染まった赤い石に、吸い込まれていく。

だが、決して血は消えずに、こびりついたまま。

刀子は涙を流し続ける。

その光景を、ただ月だけが見ていた。

第十一話（前書き）

文がグダグダだ……

## 第十一話

「なんじゃ、これが『紅き翼』の秘密基地か。ただの掘っ立て小屋ではないか！」

「そーだそーだ。こちららゲストだぞ。VIPだぞ。もっと待遇よくしやがれ」

「……おい、ヤマトとじゃじゃ馬姫。今の俺たちはお尋ね者なんだが、そこんとこ理解してんのか？」

「うるさいのじゃ筋肉ダルマ。闘技場でヤマトにけちよんけちよんにされたくせに」

「よし、俺って今喧嘩売られてるよな？ だったら買っていいよな？」

「助けてなのじゃヤマトー！ 筋肉ダルマが襲ってきたのじゃー！」

「あ、テメエ卑怯だぞ！」

「よし任せろ。焼死、凍死、圧死、溺死、感電死、ショック死、窒息死、衰弱死、野垂れ死に、どれがいい？」

「最後のひどいな！」

「ふふふ、楽しそうですね。ねえ詠春？」

「そうか……？」

和氣藹々（？）に行動を共にする、大和たちと『紅き翼』。

アーウエンルクスとの戦闘を終えた後、『紅き翼』は王女の危機に駆けつけた。

そして、そこにいたのは殺気立った大和に、今まさに掴み掛かられんとしていたアリカ。

その状況を見て、リーダーであるナギは即座に割って入ろうとしたのだが。

「……」

「おや、ナギはまだ拗ねているのですか？」

「……拗ねてなんかねえよ」

ニヤニヤと笑うアルビレオ。

「まあ仕方ないだろ。かつこよく助けにきたのいいものの、勘違いで命の恩人に攻撃しそうになったんだから」

タバコとスーツが似合う渋い男、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグも同調する。

「それにしても、あの張り手は痛そうでしたね……空中で三回転もする張り手なんて初めて見ました」



(アレ痛いんだよなあ……)

地面に墜落し、痙攣するナギを見下ろす。

少し、哀れだった。

「ナギ！ 勝手に飛び出すな……って、大和君!？」

「詠春さん……」

続々と『紅き翼』のメンバーが集まる。

「何だお前ら、この男とは知り合いなのか？」

「ふむ、知り合いと言いますか、なんと言いますか。どちらかといえば裏ボスって感じでしょうか、ガトウ」

「裏ボス？」

「……以前、グレートブリッジで辛酸を舐めさせられた相手ですよ」

「コイツが、噂の!？ まだ子供じゃないか！」

「……子供で悪かったな。俺はもう帰るぞ」

気を失っているテオドラをアリカからひったくり、肩に担いで『紅き翼』に背を向ける。

「待て」

「……なんだ。王女さんよ」

アリカに呼び止められ、嫌々な顔を隠そうともせず振り返る。

「先程は助かった。礼を言う」

「ああ？」

「わらわを助けるつもりはなかったのだろうが、結果的に奴らに捕まることもなかったのも事実じゃ」

「あつそ、どーいたしまして」

素っ気無く言い放ち、再び歩を進める。

「待ってくれ、大和君！」

だが、今度は別の人物に呼び止められた。

「……なんですか、詠春さん」

「君と話がしたい。少しの間でいい、私たちに付いてきてくれないか？」

その発言をした詠春に、『紅き翼』から正気か？ という視線を向けられる。

ちなみに、ナギはまだ痙攣していた。

「俺には話なんてないですよ」

「君が去った後の、刀子君の様子を知りたくはないか？」

一瞬、大和の肩が揺れた。

「私も、刀子君も、鶴子に素子ちゃんも、君と話したいことは山ほどあるんだ。頼む、少しだけでいい。時間を私に取れないだろうか」  
詠春は深々と頭を下げる。

「……………」

大和も詠春も、他の人間もなにも言葉を発しない。

その沈黙を破ったのは、

「いいではないか、ヤマト」

「テオドラ……お前、起きていたのか？」

大和の肩に担がれた、テオドラだった。

「目が覚めたのはついさつきじゃがの。それでもそこの男との会話は聞いた。別にちよつと話すぐらいよいではないか」

「やかましい、ガキは黙ってろ」

「なにをーっ！ ヤマトだってそんなに変わらないではないか！  
いつものじゃれ合いをする二人に、『紅き翼』の面々は呆気に取られる。

「ならばわらわが『紅き翼』と行動すればよいのじゃ！ そしたら護衛であるヤマトもついてこなければいけないのじゃ！ わらわ天才じゃ！」

「そうか、なら遠慮なく行ってこい」

大和はテオドラをラカンへ投げ飛ばす。

美しい放物線を描き、ラカンにキャッチされた。

「そんなバカな！？ 命にかえても守ってくれるのではなかったのか！？」

「誰がいつそんなこと言った」

「むがーっ！！」

ラカンの腕の中で暴れるテオドラ。  
たまた腕や足などがラカンの顎に直撃する。

「ちよ、コイツいい加減に離せ！ 筋肉臭い！」

「お？ そんなに俺様の筋肉臭が気に入ったかい？ よし、遠慮なく嗅いでいいぞ」

「むぎゃーっ！！？？」

テオドラの絶叫が響きわたる。

その間、ずっと詠春は頭を下げ続けていた。

「詠春さん……やめてください、貴方がそんなことをする必要はありません」

「俺が京都を離れて武者修行する理由のひとつは、君を探し出すことだ。前は戦場だったが、今回の機会を逃すわけにはいかない」

「……」

「頼む」

このまま断り続ければ、詠春は土下座でもしそうな勢이었다。

青山家に仕えていた身分として、居心地の悪さがひどい。

「……少しだけです」

結局テオドラを放っておくこともできず、大和は一時『紅き翼』と行動を共にすることに決める。

この間、ナギはずっと地面で痙攣していた。

『紅き翼』の隠れ家に案内された大和は、ナギの威嚇やラカンの挑戦、タカミチの尊敬の視線などを受け流していた。

（コイツら、俺が敵だっってこと忘れてんじゃねえだろうな……）

テオドラはといえば、ラカンとじゃれついていた。その光景を見た大和はため息をつく。

そして、少し離れていたガトウ達が状況の整理を始めた。

「つまり、マクギル議員亡き今、連合すら頼ることはできません。我々も敵の罠により、指名手配されてしまいました」

「そうか……連合も帝国も、既に奴らの手の内か」

「残念ながら」

「なるほど、これで世界中が敵に回ったわけじゃな」

絶望的な状況であるにも関わらず、アリカの顔には焦燥は見えない。

むしろ不敵な笑みすら浮かべる。

「だが、まだお主らがおる。一人一人が一騎当千の『紅き翼』が」

アリカはナギに正面から向き直った。

「我が騎士ナギ・スプリングフィールドよ」

「騎士？ 俺は魔法使いだけど……」

そこまで言ったナギは、周りから『空気読め』の視線を受け、黙り込んだ。

「我らに味方はおらぬ。連合も敵。帝国も敵。このままでは世界は奴らに滅ぼされるのを待つだけじゃ」

「……」

ナギも大和も、その言葉を受け入れる。

「誰も頼ることはできぬ。これからもわらわたちが奴らと戦うといふことは、世界と戦うことと同義」

そこでアリカは一度言葉を区切った。

「それでも、戦い続ける覚悟がお主にはあるか？」

そう問いかけられたナギは不敵に笑う。

「ああ。俺たちはこんなところで折れるほど、ヤワな翼は持ってねえ」

その言葉を聞いたアリカも笑う。

「ならば、我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ、我が楯となり、我が剣となれ」

「へ……まったく、相変わらずおっかねえ姫さんだぜ」

そして、ナギは騎士の誓いを立てる。

日の出の明かりに照らされたその光景は、まるで物語の中のような

った。

それを見た大和は思う。

自分がかつて目指し、失敗した道を。

自分は、どこで間違えてしまったのか、と。

「すまないな、こんな時間に呼び出してしまって」

「いえ」

現在は夜。

詠春に呼び出された大和は、隠れ家の外で落ち合った。

「まず、君が無事でよかった。あの日に行方をくらませてから、君が無事かどうかもわからなかったからね」

「……」

「京都を出てから、ずっと一人で旅をしてきたのかい？」

「……ええ、旅費は拳闘士の試合とかで稼いでいました」

「そうか。まあ、大和君なら問題なかっただろう」

「ええ」

「……」

「……」

会話が途切れる。

大和が心を開く様子がないのは明白だ。

詠春は思わず天を仰ぐ。あの素直な大和がここまで変わってしまったことに。

「大和君。あの日に一体何が起きたのか、俺に教えてはくれないか」

「……」

「いや、何が起きたのかは大体理解している。あの時に君が何を思っていたのか……それを教えてくれないか」

詠春の真摯な願いに、大和は首を振る。

「……別に、大したことじゃありません」

そう告げる大和の顔に、表情は存在しなかった。

「ただ、人のために戦うとか、少し疲れたんです」

「……そうか」

詠春は、大和が自分にこれ以上本心を打ち明けてはくれないだろうことを悟った。

「とりあえず、君が無事で安心した。できるならば京都に一度戻って、刀子君たちに顔を見せてくれると嬉しい」

「はい……」

大和は踵を返し、隠れ家に戻っていく。

詠春はその場に座り込み、もう一度天を仰ぐ。

二年前のあの日も、こんなに綺麗な夜空だったな、と思った。

「で、今度は王女さんか」

「うむ。お主たちが外に行くのが見えたからな」

「……こんなに堂々と盗み聞きしてたのをバラすやつ、初めて見たわ……」

隠れ家の小屋の前、部屋に入って寝ようとしていた大和の前に立っていたのはアリカだった。

「その点については謝罪しよう。すまなかった」

「……いや、別に気づいて見逃してたし、大事なことも話すつもりもなかったしな」

大和は特に気にしていない。

そんなことよりも、さっさとベッドで寝たかった。

アリカの横を通り過ぎて、小屋の中に入るうとする。

だが、

「……おい、なんだよこの手は」

アリカの手が、大和の腕を掴んで離さない。

「話がある」

「断る」

アリカの提案を聞く前に却下。

内容など簡単に予想できる。

「どうせ、『紅き翼』と協力しろって言うつもりだろ？ 悪いがパスだ」

「先程お主が言っていた、人のために戦うのが疲れたと、そういうことか？」

「ああ。心配しなくても、アンタの騎士は強い。俺なんざいなくと

も『紅き翼』だけで十分に世界なんざ救えるさ」

実際に戦ってみてわかった。

ナギ達の力は、まだ伸びる。

現在はあのアーウェルンクス達の方が強いだろうが、このまま成長を続ければ、間違いなく追い抜くだろう。

「だから、この手を離せ」

「ふむ、先程は我らの騎士の誓いを羨ましそうに見ていたのな、てつきりお主も世界を救いたいのかと思ったわ」

「……っ」

無言で腕を振り払う。

「わらわはこれでも王族じゃ。人を見る目くらいはある。お主が内心では、人を救いたがっていることくらい丸わかりじゃ……どうしてそこまで無理をする」

凶星だった。

そもそも、戦うことが嫌いなのに、刀を捨てていない時点で語るに落ちている。

結局、五木大和はまだ、縋っているのだ。

刀に。

力に。

この力で、何かを守りたいと。

第十一話（後書き）

次で過去編完結予定。

### 外伝三

京都、関西呪術協会の総本山のさらに奥。

とてつもなく広い屋敷の部屋の中で、一人の男が跪いていた。

「申し上げます。関西魔法協会の西洋魔法使い達は最終防衛線突破。ここ、総本山に向けて進撃中であります」

跪いている男が、絶望的な状況を知らせる。

「敵の総数　およそ百」

その部屋の奥には簾に覆われた空間があり、そこから老人のため息が漏れた。

「……本国でAクラス、またはAAクラスによる混成部隊。儂らの小飼いの術者では足止めにもならんとはな……」

数日前、関西呪術協会の一員である天ヶ崎夫妻が、西洋魔法使いによって殺されるという事件が起こった。  
メガロメセンブリアの魔法使いにより行われた犯行は、瞬く間に関西に衝撃をもたらし、元々険悪だった両者の関係に火種を放り込む形となる。

今回の事件は、メガロの元老院の一人が功を焦り、関西を滅ぼしたという功績をあげるために企んだものであった。

小康状態にあつた両者の間で、西洋魔法使いが関西の術者を殺すという事件は、戦争のきっかけとなるには十分だった。

いたる場所で小競り合いが起きる。

やられたからやり返す。その繰り返し。

関西呪術協会と関東魔法協会は、もう引き返せないところまで来ていた。

伝令が去つた後、薄暗い部屋に残されたのは老人だけ。

「大和……大和はおるか」

「此処に」

その部屋に、五木大和がどこからともなく現れる。

「今の状況は把握しておるな」

「はい、当主様」

簾の奥に潜む老人、彼こそが現代の五木家当主、五木元蔵。

実質的な戦闘力は少なかったものの、その類い稀なる政治力を用いて五木家の地位を向上させてきた老獪。

そして、大和の実の祖父でもある。

「ならば話は早い。大和よ、お主の力で西洋の魔術師どもを蹴散らしてこい」

「……」

「どうした、何か不服でもあるのか」

跪き、下に顔を向けた大和は、苦しそくに声を出す。

「……戦いは、避けられないのですか……」

「無論だ。そもそも、先に手を出してきたのは向こうの方。今更矛を収めることなどできはせぬ」

「しかしっ!」

「一番最初に西洋魔法使いに殺された、確か天ヶ崎といったか？  
その娘も哀れだのう。葬式の時、二人の遺体に縋り付いて泣いていたそうではないか」

「……っ」

「大和よ、状況は最早引き返せぬところまで来ているのだ。奴らの狙いは青山家と近衛家、お主は青山の御三方と親しかろう。彼らを守るのがお前の役目だったはずだ。何を躊躇うことがある」

「それは……」

「詠春殿や鶴子殿はまだ未熟だ。今の彼らでは百のAクラス魔法使いを相手にするのは不可能。だが、既にいくつかの卍解にまで至ったお前ならば、西洋魔術師とも渡り合えるだろう」

詠春や鶴子は将来の武を約束されてはいるが、現時点では戦力として大きな期待はできない。

それ以前の問題として、彼らは青山家の者。

いわば総大将だ。

大将自らが戦争に参加するようなりスクの大きい行為、関西からしたら認め難く。

「……私の縛道を使えば」

「不可能だ。今回の敵は殺さずに済むほど甘くはない。そもそも縛道は敵を長時間拘束するのに向いてはおらん。そんなことはお主も重々承知のはずであろう」

「……」

大和は黙り込む。

なんだかんだと言いつつをしたところで、結局大和には人を殺すだけの覚悟が無いだけの話。

そして、それを見抜けぬ元蔵ではない。

「やはり、お前には甘い部分が枷となるか」

「……申し訳、ありません」

大和自身、自分が甘いことは自覚している。

自分が戦場に出なければ、他の誰かが代わりに戦場で死ぬことになるのだろう。

それならばいつそ、最初から大和が敵を皆殺しにすれば、少なくともこちらの犠牲は抑えられる。

そこまで分かっている、大和は人を殺すことを、受け入れることは出来ず。

「……今のお前を戦場に送ったところで、戦力としては期待できぬな」

思わず大和は顔を上げる。

「ふむ、まあ関西の今の勢力からいって、お前を無理に出す必要もないな。他の分家などから戦力を徴収すれば、十分に奴らに対抗できるであろう」

無論、犠牲は出るであろうがな、と言葉を続ける。

元蔵のその言葉を聞いた時、大和は不覚にも安堵した。

誰かを救いたいという願望は、確かにある。

だが、大和は未だ十三歳。

味方を守るために敵を殺せと言われても、簡単に頷くことはできなかった。

「お前は五木家の切り札でもある。そうおいそれと出すわけにもいかんしな。今回の戦では分家から兵を集めるとしよう」

大和は自己嫌悪に駆られながらも、異議を唱えることができない。

「それに、ここ最近の分家の成長振りならば、Aクラスの魔法使いと云えどもそうそう引けをとるまい」

……不意に、嫌な予感がした。

「彼らならば、その身に変えても京都を守護するであろう」

自らの第六感が叫ぶ。それ以上言わせるなど。

「ほれ、なんと叫びたかな、急に力をつけてきた分家の娘」

だが、元蔵の言葉は止まらず。

「 葛葉刀子のような才能ある者達が集まれば、奴らに対抗することもできるであろう」

葛葉刀子。

ふとしたことから縁ができた女の子。

自分の修行場に迷い込み、泣きながら剣を振っていた。

最初は見てみぬ振りをしようとした。

しかし、滝の下で泣いているその子をどうしても放っておけず、つい声をかけてしまった。

葛葉刀子と名乗ったその子から話を聞けば、どうやら宗家である五木家からの八百長が絡んでおり、そのことで家族と衝突したという。

そこまで聞いた時、思い出したのだろうか、彼女は再び泣き出しそうになる。

なぜだろうか、出会って間もないにも関わらず、大和はその子の泣き顔が見たくなかった。

家に帰った大和は、宗家の嫡男であるという立場を利用して、試合を中止に追い込む。

今まで人の言うことには逆らわない、優等生だった大和の最初の反逆だった。

それからというもの、毎日その修行場に通いつめた。

彼女は青山家の三人とも打ち解け、身分の差など気にしない関係にもなれた。

共に修行し、共に遊んだ。

自らの夢も語った。

笑顔の似合う、優しい女の子だった。

その彼女が、戦場に出る？

自分が戦わないせいで？

Aクラスの魔法使い達と殺し合いをさせられるというのか？

大和はゆっくりと立ち上がる。

自らの策が上手くいったことを察した元蔵は、簾の奥でほくそ笑んだ。

「そこに戦装束を用意しておく。衝撃、防刃性能に優れた『死霸装』といわれるものだ。それを着ていくがいい」

その部屋の出口付近に、全てが黒に覆われた着物が置かれてあった。

大和は緩慢な動作でそれを拾い上げ、その部屋を後にする。  
その背中に、声が投げかけられる。

「お前の力は殺すためのものだ」

一瞬だけ、足を止める。

だが、大和は言い返すこともなく、そのまま歩いていった。

その集団は、夜の闇に紛れ、森の中を進んでいた。

「まったく、たかだか小国の土着勢力一つのために、オレらが動く必要があるんすかね？」

その中の一人、軽薄そうな雰囲気を漂わせた男が言った。

「任務中の私語は慎め。もうここは既に敵地だぞ」

先頭を歩く男、恐らくはこの中でのリーダー格であろう男がたしなめる。

「へーへー、お固いこって」

軽薄そうな男はあまり反省している様子はない。

だが、それは周りの男達も同様であった。

彼らはメガロに雇われた殲滅部隊。関西を滅ぼすために組織された手練たちだ。

Aクラス、もしくはAAクラスの戦力だけで集められた、一流の戦闘者達。

軽薄そうな男にしても、一人で村一つぐらいは焼き尽くせる程の力を持っている。

それほど力を持った彼らだが、現在は大して緊張しているわけでもなく、どこか弛緩した空気が流れていた。

それもそのはず、彼らは既に関西の術者と幾度か交戦しているが、まったく手応えを感じなかったのだ。

こちらは一人で数人を相手にすることができると。

それほどの実力差があり、なおかつ、この山は百の味方が包囲しているのだ。

集中しろ、という方が無理な話である。

リーダー格の男が何度か注意を促すが、部下の男たちは大して聞いていなかった。

なんの前触れも無く、リーダー格の男の頭が、吹き飛ばすまでは。

「……………へ？」

首の無い体がゆっくりと自分達の方へ倒れてくる。

そしてその男から、思い出したかのように大量の血が吹き出て、後ろの男達の体を濡らした。

「お、おい……………」

リーダーのすぐ後ろにいた、屈強な肉体を持つ魔法使いが呆然と近づく。

そして、今度はその魔法使いの胸に風穴が空いた。

「っ、敵襲だっ！！」

ここまでの時間、僅か数秒。

それだけの時間で魔法使い達は現状を認識し、戦闘態勢に移る。

「あがつ」

「ゴフっ」

だが、死の連鎖は止まらない。

何が起きているのか把握する前に、体の急所のどこかが欠けていく。

しかも、立ち直りの早い、場馴れしている人間を優先的に狙っているらしく、魔法使い達はすぐに体勢を立て直すことができない。

「狙撃だ！ 全員、円陣を組んで障壁を展開しろ！」

彼らが障壁を展開し、戦闘態勢に入るまでに、半数である六人の仲間が犠牲になった。

自分達にできる最硬の障壁を展開した瞬間、障壁に敵の攻撃が衝突。

（これは、雷の槍か！？）

彼らを襲っていた攻撃は破道の四　白雷。

雷の槍を相手にぶつけるといふ初級の鬼道であるが、その異常なまでの収縮率により、最早電磁砲レールガンと言える代物になっていた。

おまけに完全詠唱破棄で放たれるので、発動を見極めた時には体に風穴が空いている。

その攻撃を見た魔法使い達は顔を蒼ざめ、慌てて障壁に追加の魔力をつぎ込む。

だが、

「ぶっ手切れ、くびきりおろち 馘大蛇」

その声が聞こえるのと同時、大きい刃の突起が幾つもある巨大な刀が障壁を喰い破り、三人の首を飛ばした。

残り三人となった魔法使い達は呆然と目を見開く。

粉々になった障壁の向こうに見えるのは、真っ黒な着物を着た子供。

彼らの目には、その光景がひどく現実味のないものに映った。



「『来れ雷精、風の精！ 雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！ 雷の暴風！』」

その隙にもう一人が上位魔法を起動。雷と風の嵐が、少年を飲み込んだ。

「や、やった、これで終わ」

り、という前に、彼の首が飛ぶ。

少年がとった戦法は単純。かわして、回り込んで、首を切り落としただけである。

これで、残りは一人。

「……嘘だろ、なんだよ、この化け物」

最後に残った魔法使いである、軽薄そうな男が呟く。

彼が生き残ったのは単純に運だ。

立ち直りが早いわけでもなく、すぐに反撃したわけでもない。

そして運良く最後まで生き残った彼だったが、これからも殺されな  
いほど運がいいとは思っていない。

即座に反転、自分の杖に跨り、脇目も振らずに逃走を図る。

掻き筆れ、あしそきじぞう正殺地蔵

しかし、少年はそれを追撃。

さらに変化した斬魄刀にて、男の腕にかすり傷を負わせた。

男はかすり傷など気にも留めず、その場を飛び去ろうとするが、不意に手足に違和感を感じる。

(手足が、動かない!?)

男は杖のバランスをとることができず、木に衝突して地に落ちる。

それでも這いずって逃げようとするが、その足に刀が突き立てられた。

「づ、ああああアアアアアアア!?!」

おかしい。

手足が動かないのはまだ分かる。

斬られた時に麻酔かなにかを体に入れられたのだろう。

だが、それならば痛覚も消えるはずだ。

だというのに、彼の足は燃えんばかりの苦痛を訴える。

彼が混乱の極みに達していると、背後から少年の声が届いた。

「お前らの勢力と配置を教えろ」

その声に、慈悲や慈愛は一切存在しなかった。

足に刀を突き立てられた男は、無意識に喋った。自分達の標的、勢力、その配置にいたるまで。

刀がゆっくりと引き抜かれる。

助かった、そう安堵する男の胸に、刀が突き立てられて

十二人。

「た、助けっ」

「あああああああああ！！」

その部隊はパニックに陥っていた。

刈れ、風死かぜしに

その声が響いた瞬間、風切り音がしたと思えば、一対の鎖でつながった特殊な刃の形状をしている鎌が飛来。まとめて数人の命を刈り取った。

魔法使いとしてだけでなく、魔法戦士としても訓練を受けた男もおり、この攻撃に反応するものも確かに存在した。

高速回転しながら飛来する鎌を、引きつけてかわす。

その一連の動きは洗練されており、Aクラス魔法使いの実力の高さが垣間見える。

だが、木の幹に鎖が引っかかり、大回りしながら戻ってきた鎌に、その首は刈り落とされた。

「どつから攻撃が飛んできているんだ!？」

「それよりも障壁を張るのを優先しろ!」

「だ、誰か、俺の腕が……」

風切り音がするたびに、確実に仲間が死んでいく。

そんな異常な状況に統制などとれるはずもなく、混乱が混乱を呼ぶ。

鎌は鎖を最大限に使い、不規則な動きで先読みを許さない。

気が付けば、一人の男だけが残り、その周囲の人間は全員命を散らしていた。

ヒュン、ヒュン。

「ひっ……」

戦意を喪失した男の耳に、死を呼ぶ風切り音が届いた。

咄嗟にその方向を見る。

そこには真っ黒な着物を着た少年が、まるで死神の如く鎌を回して立っており

その瞬間、飛来した鎌に、命を刈り取られた。

二十八人。

「おかしいな、他のグループと念話が通じない」

そのグループはかなりの大所帯だった。

補給、支援を専門としたメンバーが多く、その護衛も含めると二十人を超える。

その中で、連絡を担当している魔法使いが首を傾げた。

「念話を通じないだと？」

「ああ、スコットとアルクがリーダーの班だ。この二つの班に念話が届かない」

「ふむ、何かトラブったか、それとも戦闘中か……」

その二つの班の全員が殺されているなど、考えてもない。

だが、その思考はすぐに覆される。

## 卍解、狒狒王蛇尾丸

直後、巨大な蛇の骨がグループのど真ん中を突っ切り、その直線上にいた人間のことごとくを圧殺した。

二つに分断され、呆然と蛇の骨を見上げる魔法使い達だが、場馴れした彼らはすぐに正気を取り戻す。

「敵襲だ！ 全員戦闘態勢に移れ！」

「ちきしょう、よくも仲間たちを！」

突如現れた蛇に対し、その胴体に向かって攻撃魔法を放つ。

『雷の暴風』『闇の吹雪』『魔法の射手』などの攻撃は、的確に骨の関節部分に命中し、バラバラにすることに成功した。

「やったぞ！」

蛇の骨を解体することに成功し、沸き立つ魔法使い達。

だが、その分かれた関節部分が発光していることに気がついたのは、ほんの数人だった。

「おい、まだ終わっていない！」

「は？」

人の脊髄を模したかのような骨。

一つ一つの関節が人間サイズである。

その関節部分が、突如として近くの魔法使いへと飛ぶ。

「……………あれ？」

呆然とした声が響く。

彼らの内の大多数が、骨の突起により心臓を貫かれていた。

解体された刀身を相手に突き立てる技、獠牙絶咬。

その技をかわすことができたのは、このグループのリーダーを含めた三人だけ。

彼らは発光する関節に脅威を感じ、一斉に空へと逃れたのだ。

だが、彼らに襲い来る脅威は、未だに終わってはいない。

「関節が、繋がっていく……………！」

空から見下す彼らの目に映ったのは、地上でどんどん関節が結合していく蛇の姿。

「マズイ、地上に降りるぞ！ こじや的になる！」

リーダーの指示が飛び、残り二人の魔法使いもそれに従う。

しかし、時既に遅く、

「うあああつつつ！！！」

「ぎゃあああああ！！！」

元通りに復元し、空中を泳ぐように移動する蛇に、一人はその胴体に薙ぎ払われ、もう一人は口に挟まれる。

凶悪なまでの顎の力により一瞬で魔法使いは咀嚼され、バラバラの手足が森へと落ちていく。

一人だけ残ったリーダーも、蛇のスピードには劣っており、地上に降りる前に顎にくわえられた。

「障壁……展開！」

それでも諦めずに障壁を展開し、咀嚼されるのを防ぐ。

彼の全魔力を注ぎ込んだ障壁は十二分にその力を発揮し、蛇の顎の力にも負けぬものだった。

このまま凌ぎきることができれば、と思考する男だったが、口の奥に、巨大な気の輝きを目にし、凍りつく。

ひこつたいほう  
狒骨大砲

障壁などまったく意に介さぬ一撃が放たれ、死体も残さずに男は消えた。

五十九人

「だめだ、他のグループと念話がほとんど繋がらない！」

「どうなってんだ！ こんな島国にオレ達に対抗できるヤツらがいるなんて聞いてねえぞ！」

総本山に侵入している魔法使い達も、ようやく異常事態に気がついた。

念話を通じないだけならまだしも、魔力を索敵できる人間が、味方の魔力反応がどんどん消えていくのを報告し、全体の指揮官を務める男は決断した。

分散していたいくつかのグループを集結させ、混乱を鎮めた。

現在は、全員で総本山の青山家と近衛家を目指している。

索敵要員に、限界まで周囲の警戒をさせ、不意打ちを防ぐためである。

不審な反応があれば、そこに向かって絨毯爆撃。

この作戦は功を奏し、報告にあった黒い着物の少年の迎撃に成功した。

隠れていた森ごと爆砕され、魔法使いの前へとその姿を晒す少年。

一定の距離を置き、少年と魔法使い達は向き合う。

「報告にはあったが、本当に少年だったとは……」

指揮官が思わずといった具合に声を漏らす。

こんな年端もいかぬ子供を相手に、自分達は半数以上の味方を失ったなどと、にわかには信じられることではない。

「大人しく投降してくれば話は早いのだが……その気はないようだな」

「……」

少年は何も答えない。

ただ、髪の間から覗く目は、この不利な状況下においても、諦めの色を見せてはいなかった。

「全員、上位魔法起動用意！」

指揮官の指示を受け、戦闘要員の魔法使い達が、一斉に起動キーを唱える。

「発射！！」

数十発の上位魔法が、まるで覆い尽くすかのように少年に迫る。

「縛道の三十九

円閼扇えんごつせん」

少年の前方に、気で編まれた円形の楯が出現する。

その楯を展開したまま、少年は上位魔法の嵐の中に突っ込む。

すべての魔法が集中する現在地点にいるよりも、それより前に突っ込んだ方がよいという判断だ。

「っ、くっ」

だが、それでも上位魔法の威力は凄まじい。

円閼扇はみるみるうちに削られていき、その身は焼かれ、焦がされ、傷ついていく。

体にいくつもの怪我を負いながらも、少年は魔法の嵐を突破した。

「打ち碎け、天狗丸!!」

少年の前にいるのは、魔法を放ったばかりで無防備な魔法使い達。

このチャンスを逃すまじと、少年の刀が変化、巨大なトゲ付きの金棒になる。

「う、おおおおお!!!!」

それを全力で振り回し、敵を滅殺せんとする。

しかし、

「第二陣、障壁展開！」

突如として現れた障壁に、轟音を鳴らしながらも止められてしまう。目を見開き、驚愕を顔にするが、敵はその隙をつかないほど甘くはない。

「『魔法の射手』、多重起動！ この少年を寄せ付けるな！」

光、風、雷、炎、水、闇など、様々な属性を備えた魔力弾が少年へと迫る。

それらを薙ぎ払い、かわし、逸らしながら少年は距離を取らざるを得なくなる。

そして、この統制の取れたグループは、今までの敵とは違うことを感じ取っていた。

「今のものぐとは、未恐ろしいな」

指揮官が、しゃがみこむ少年に声をかける。

「だがこの人数差だ。いかに優れた戦闘力を有していようと、数の暴力には抗えん。降伏することを勧める」

指揮官の、冷徹な声が響きわたる。

「青山家と近衛家の人間を引き渡せ。そうすれば、命だけは保証しよう」

少年は聞こえているのかそうでないのか、ゆっくりと立ち上がった。

少年の一挙手一投足に、全員が息を飲んで集中する。

そして、少年は刀を前方に突き出す。

思わず身構える魔法使い達だが、その予想は裏切られる。

少年は刀の切っ先を地面に向け、そのまま手を放したのだ。

(観念したか……)

思わず安堵する指揮官と魔法使い達。

しかし、彼らの予想はまたしても裏切られる。

地面に落ち、そのまま突き立つと思われた刀が、なんの抵抗もなく地面に吸い込まれていったのだ。

そして同時に、少年の気が爆発的に高まる。

足元から巨大な千本の刀が立ち上るといふ絶景を目にし、魔法使い達は状況も忘れて魅入った。

「吭景・千本桜景敵」  
こうけい せんぽんざくらかげよし

「いかん、全員障壁展開しろっ!!」

真っ先に我を取り戻した指揮官。

彼は自らの第六感に従い、全方位に向けて障壁を展開させる。

その直後、桜色の濁流が魔法使い達を襲った。

「な、なんだよコレはっ」

「ヤバい、障壁を抜かれちまう！」

最早彼らの目には桜色しか見えない。

三百六十度、球体の内部に包まれるかのごとく、無数の斬撃が覆い尽くしていた。

（不味い、このままでは術者の魔力が持たん！ 一人でも力尽きればその時点で終わりだ！ 何か、何か打開策は……！）

指揮官は必死に頭を回転させるが、このような状況は想定したことがない。

まさか子供がこれ程の力を持っているはずがないという、自らの思い込みが招いてしまったミスだった。

（一体、どうすれば……！）

考える指揮官の肩に、そつと手が置かれる。

振り返ってみればそこには、真剣な顔をした一人の男。

彼と最も長い付き合いである、この部隊の副官だ。

その副官が口を開く。

「このままでは持ちません。せめて、貴方だけでも脱出してください」

「っ、ふざけるな！ お前たちを置いていけるわけないだろう！ 第一脱出する方法など、どこにも……」

「いえ、あります」

そう言つて、副官は彼の胸に何かを押し付ける。

指揮官の胸元で発光する、その紙は

「これは、転移魔法符!？」

「すみません。私には、こんな形でしか貴方に恩を返せない」

彼が子供の頃から面倒を見ていた男だった。

戦災孤児だったのを拾い、魔法の技術を教え込んだ。

戦闘者として、人を殺すことを強いてきた。

ずっと、恨んでいるのだと思っていた。

「や、やめ」

「生きて、ください」

副官の泣き笑いのような表情を最後に、彼はその場を飛ばされ、桜色の濁流が全てを飲み込んだ。

九十九人

少年が飛ばされた指揮官を見つけた時、彼は夜空を見上げていた。

「来たか……」

「……」

少年は周囲を見渡す。

彼にとって、この場所は特別だった。

流れ落ちる滝、足元の砂利、周りの森も、昨日までと何も変わって  
いなかった。

「逃げようかとも思ったのだがね……逃げたところで、どうするの  
だと思ひ直したのだよ」

指揮官の男がこの場所に飛ばされたのは偶然だ。

しかし少年は、変わらない周囲の景色が、自分を責めているように  
感じた。

少年がゆっくりと口を開く。

「降伏しろ」

「断る。私は一部隊のトップだ。降伏したところで、生きては帰れ  
ないだろう」

そう言って、指揮官の男は杖を構える。

「それに、今の私には形容しがたい感情が渦巻いていてな。君と戦わねば、それが収まりそうにないのだ」

攻め込んでおきながら、自分勝手だとは思っがね、と付け加える。

それを聞いて、少年は無言で刀を構える。

両者ともに動かない。

木々のざわめきだけが、周囲を支配する。

先に動いたのは指揮官の男。

詠唱を始め、攻撃魔法を発動させようとする。

だが、長年指揮ばかりを担当し、魔法を自ら使うことはほとんどない彼の詠唱は、悲しいほど遅く。

少年の刀が、彼の胸に突き立つ方が、遥かに早かった。

ぼたり、ぼたりと、赤い雫が垂れる。

それは刀を伝い、少年の手をも赤く濡らす。

指揮官の男の体が、ゆっくりと傾いでいく。

やがて刀が抜け切る頃、男の口が僅かに動いた。

すまない、リオン

彼の体は完全に倒れ、河原の石を赤く、紅く、染め上げていく。

「……………」

血塗れた刀を持つ少年　大和は、静かに肩を震わせる。

結局、こうなってしまった。

お伽噺のように、ハッピーエンドになると思っていた。

しかし、これが現実。

人を救いたいだの言っておきながら、今日大和は百人の人間を殺した。

目の前に横たわるこの男にだって、大切な人はいたはずだ。

その証拠に、彼は誰かの名前を呼びながら死んだ。

不意に、元蔵の言葉が蘇る。

お前の力は、人を殺すためのものだ。



外伝三(後書き)

投稿のペースが続かない……

第十二話（前書き）

短いです。

## 第十二話

「王女さんよ……俺なんかをスカウトしてくれんのは嬉しいけどな、俺はもう、そういうのを目指すのはやめたんだ」

「ほう、そういうのとはなんじゃ？」

「正義の味方とか、そんなんだよ」

月明かりに照らされた大和の顔は、一気に老け込んだようだった。

「逆に聞くけど、なんでアンタらはそんなに頑張れるんだ？ 見知らぬ人を救うために人を殺して……苦しいだけじゃねえか」

大和はアリカに問う。

どうして、たったの八人で世界なんてものを抱え込むのかと。

「アンタには世界を救う義務なんてないだろ……もう、そんなに頑張らなくてもいいじゃねえかよ」

言い切ってから、自分は本当に情けなくなったな、と思った。

「……そうじゃな、確かに、わらわとて人間だ。人を殺す命令を下せば心は痛むし、挫けそうになることもある」

「……」

「それに、わらわの父君も『完全なる世界』の一員だ。いつの日か、わらわの手で打ち倒さねばならぬ時が来るじやろつ」

「なら、もつ」

いいだろ、と続けようとして、息を呑む。

アリカの目を見てしまったから。

その、命そのものを燃やしているかのような瞳を。

「人を殺すのが怖い？ 大いに結構だ。人を殺すことを好きなのは百倍マシというものじやろつ。わらわがお主に文句を言いたいのは別のことだ！」

「あ……」

「お主が傍観者気取りでいることに、わらわは何よりも腹が立つ！ どうせ、自分が動けば世界がどう動くかわからないのが怖いのじやろつ！ その神のような思考が気に食わん！」

「……」

「思い上がるなよ。誰がどう言おうと、お主もこの世界のたった一欠片だ」

ああ、なんとなく分かった気がする。

「この世に産まれた以上、お主の行動は全てお主のもの。誰にも否定はさせぬ」

どうして、彼女を見るのが、こんなに苦しいのか。

「お主には何かをする権利がある。お主の行動も、この世界を造る一つの要素なのだ！」

必死に『生きています』彼女が、眩しいんだ

「だから、自分は世界の邪魔者だ、などという顔をするでない」

大和の肩が震える。

「なあ、王女さん……」

「なんだ」

「俺さ……ずっと、後悔してた」

「うむ」

「初めて人を殺した日から、ずっとずっと、後悔してたんだ」

「そうか」

「俺なんて、生まれてこなければよかったって」

その言葉を言った瞬間、左頬に痛みが走った。

目の前には、右手を振り切ったアリカ。

魔力もなにも籠めていない、ただの女性としての張り手。

だが、今まで受けた張り手の中で、一番効いた。

「人を殺したことを悔やむのは自然なことだ。受け入れるとも、乗り越えろとも言わん。だがな、事実だけは認める。己の人生から目を背けるでない」

その言葉を聞いて、大和は過去に思いを馳せる。

僕はさ、この技術で人を救いたい

お前の力は、人を殺すためのものだ

すまない、リオン

「なあ……」

大和が口を開く。

「アンタの言うとおり、俺は行動することで誰かの人生を左右する

のが怖い、ただの臆病者だ」

そして、閉じ込めてきた思いを語る。

「人を殺したくないってのも、ただの言い訳」

アリカは無言で聞く。大和の人生を。

「ずっと、自分の存在から目を背け続けていたんだ」

すべての思いを吐き出して、大和の心には、たった一つの約束が残った。

「そんな僕でも、誰かを救いたいと、思ってもいいですか？」

それは、嘘偽りのない『五木大和』としての言葉。

今まで自分を縛っていた呪縛はもうない。

そんなもの、目の前の王女が吹き飛ばしてしまった。

そして、アリカが僅かな笑みと共に、口を開く。

「そんなもの、自分で決めろ」

「ぶっ……くくく」

思わず笑ってしまった。

「まったく、本当に自他共に厳しい王女さんだ」

「ふん、こんなものは序の口じゃ」

「はは、『紅き翼』の連中、絶対に味方する側間違えたぜ」

「ぬかせ」

大和は笑う。アリカも笑う。

「さて、そろそろ戻ろうぜ。他の奴らも心配する頃だろ」

「うむ」

二人は小屋に向かって歩き出す。

満天の夜空を見上げながら、大和は思った。

刀子ちゃんに、黙って出ていったことを、いつか謝りに行こう。

「ありがとう……だいぶ楽になった」

「……ふん」

そしてその日、少年は夢を思い出した。

## 第十三話（前書き）

これから投稿が不定期になりそうですが、できるだけ早く書き上げていこうと思います。

## 第十三話

「ま、そんなわけで、これからは俺も『完全なる世界』と戦うことにした」

「……………え？」

明朝、大和の突然の宣言により、『紅き翼』+テオドラは目を丸くした。

そして詠春は、大和の顔つきが昔に近づいていることに気がつく。

「大和君、もしかして……………」

「ええ……………全部が全部吹っ切れたわけじゃないですけど、少しずつでもいいから、前に進んでいきたいな、と……………今まで色々心配かけました」

照れくさそうに頬を掻く大和。

その仕草は紛れも無く、彼の昔からの癖で

「そうか……………良かった、本当に良かった」

それを見た詠春は思わず涙ぐむ。

「え、ちょ、ちょっと待つのじゃ！　なんか感動のシーンっぽいのだが、わらわ達まったくついていけないのじゃ！」

テオドラの叫びに同調する『紅き翼』。

「うるさいぞテオドラ。空気読め」

「できるかなのじゃあああああああ！！」

結局、いつものじゃれ合いになる大和とテオドラ。

一方、『紅き翼』の反応はというと。

「別にいいんじゃないですか？　彼が協力してくれるというならば心強い」

「そうじゃな、実力は保証済みであることじゃし」

「ヤマトと共闘か……燃える展開じゃねえか！」

「お、おい待てよ、アルにお師匠にジャック！　コイツはグレート  
「ブリッジで戦った敵だぞ！？」

概ね同意の意思を見せる『紅き翼』だったが、ナギは異議を唱える。

「ナギ、お前は負けたことを根に持っているだけじゃろつが」

「むぐっ!?!」

完全に凶星をつかれるナギ。

「まったく、ナギはツンデレですねえ。心の中では誰よりも彼のことを認めているのに」

「ああ!?! テメエぶっ飛ばすぞアル!」

「でもこの前、『あの野郎は絶対に俺が倒す!』って息巻いていましたよね」

無邪気にナギの傷口を抉るタカミチ。

「……お前って気持ち悪いヤツだな、バカフィールド」

「ぐがあががあがああがが」

大和にトドメを刺され、ナギは床でのたうち回る。

「ヤマトはわらわの護衛をやめてしまふのか!?!」

「いや、別にテオドラの護衛をやめる気はねえし、ましてや『紅き翼』に入るつもりもねえ。ただ、俺は俺で帝国側から動いてみようっただけだ」

「おお、それならばわらわも異論はないぞ! むしろ協力するのじや!」

大和とテオドラの間でも話は纏まった。

「さて、それじゃ帰るぞテオドラ」

「もうなのか？ もう少しくらいよいではないか」

「ダメだ。女騎士とかも心配するぞ。お前は一応皇女だろうが」

「一応とはなんじゃ！」

じゃれ合いながらもテオドラは帰還の用意をする。

流石にテオドラも本気で発言したわけではない。皇女である自分の責任というものを理解している。

仕度を終えた二人は隠れ家から外に出る。『紅き翼』のメンバーも見送りをするらしく、外に出てきた。

「あ、そうだ！ 記念に全員で写真でも撮りませんか！？」

タカミチが名案とばかりに声を上げる。

「写真ねえ……俺はいいが、テオドラや皇女さんは立場上マズインでねえの？」

現在、『紅き翼』は御尋ね者だ。

指名手配犯と親しげに写真を撮るといふのは問題ありなので、最終的に大和と『紅き翼』だけで写真を撮ることにした。

「で、なんでお前が隣に来るんだバカフィールド」

「俺だっってお前の隣なんてゴメンだっつの！」

「もう撮りますから、二人とも喧嘩しないでくださいよ」

結局、大和とナギが顔を背け合うという、微笑ましいようなそうでないような写真しか撮れなかった。

「それでは、これで失礼します詠春さん」

「ああ、君も気を付けてくれ」

「お前らも縁があつたらまた会つかもな」

「おう、また闘技場で戦おうぜヤマト！」

「けっ、もう来るんじゃないよ」

「バカフィールド、お前には言っていない」

「ああ!?!」

『紅き翼』との別れをすませ、大和はアリカへと向き直る。

「王女さん、今回はアンタにも世話になった」

「……立ち直ったのはお主自身の力によるものじゃ。わらわは何もしておらぬ」

「それでも、感謝する」

「……ふん」

アリカは顔を背ける。どうやら照れているらしい。

「あんまりバカフィールドが頼りないなら俺を呼べ。多少は力になる」

「んだとコラア！」

「ナギ、もうあなた完璧にチンピラですよ」

そうして大和とテオドラは帝国へと帰還し、『完全なる世界』との抗争に身を投じることになる。

（まだ、あの日の気持ちを完全に取り戻したわけじゃない）

思い返すのは、いつもの場所で、少し気になっていた女の子とした約束。

みんなを助けたい。

(でも、いつかきつと、取り戻してみせる)

大和は再度己に誓う。

たとえ辛いことがあるうとも、今度は見失わないように。

## 第十四話

帝国へと帰還した大和は、敵の情報収集などを全てをテオドラに任し、自分はその圧倒的なまでの戦闘能力を使うことに専念した。

大和ほどの力をもつてすれば下つ端の敵など生け捕りにすることは容易かったが、それでも人質をとられるなどをして、自らの手を汚すこともあった。

人を斬つた日、その夜は例外なく吐いた。

その度に、自分はなんと弱いのだろうかと自嘲する。

その様子を見ていたテオドラも大和の身を案じ、もういい、戦わなくてもいいのだと言った。

だが、大和は諦めなかった。

むしろ人を殺すことに慣れるのを忌避していた。

人を殺すことに罪悪感を感じているし、それを許されようとも思っていない。

だが、胸の中に残る、一つの約束。

自分の夢。

大勢の人を救う、お伽噺の中の英雄になりたい。

ただ、それだけは忘れないように努めた。

そして月日は流れ、とうとう運命の日が来る。

「不気味なくらい静かだな、奴ら」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

オスティアの空中王宮最奥部『墓守り人の宮殿』。

それを一望できる崖の淵に立つ『紅き翼』に、セラスの伝令が届けられる。

「ナギ殿！ 帝国、連合、アリアドネー混成部隊、準備完了しました！」

「おつ、ご苦労さん」

「あ、あああのナギ殿！ も、もしよろしければサインをしても  
らえませんか？」

セラスの催促により、ナギは淀みない動作でサインを書き上げる。

（ ）（ ）（練習してたな）（ ）（ ）

セラスは受け取ったサインを感動の目で見ていたが、ふと気がき、  
こう言った。

「『剣の王』は今回の戦いには参加しないのですか？」

その言葉に、『紅き翼』の面々は顔を見合わせる。

「アイツ、今は帝国の上層部に入り込んだ『完全なる世界』と戦っ  
てるんだろ、お師匠？」

「そつらしいの。時間がかかりそうと言っておったし、来度の戦に  
は間に合わなかったようじゃな……」

『剣の王』こと、五木大和の不在を知り、セラス達の顔が曇る。

だが、

「おいおい、俺がこんな大事な場面で来ないわけがないだろ？」

セラス達の背後から、いつもの飄々とした声が届いた。

「大和君、間に合ったのか!？」

「ええ。少し手間取りましたが、帝国にいた連中はほとんど逮捕しました」

黒い着物に、腰に下げた一本の刀。

以前とまったく変わらない様子で五木大和が合流した。

「ケツ、テメエなんざいなくても余裕だったの」

「久しぶりだな、四人共」

ナギの絡みを軽快にスルーし、『紅き翼』のメンバーに声をかける。

「まったく、こんなタイミングで登場とは、貴方も役者ですね」

「帝国での仕事を終わらせてから速攻で来たんだ。狙ってたわけじゃないよ」

そこで大和は『墓守り人の宮殿』に目を向ける。

「……なるほど、召喚魔共がうじゃうじゃ出てきてやがるな。『紅き翼』が内部に突入し、周りの軍隊がそれを援護する作戦か」

「うむ、お主もワシらと一緒に来るか？」

ゼクトの誘いに、大和は少し考えてから首を振った。

あれほどの数の魔族と戦うとなれば、混成部隊にはかなりの犠牲者が出る。

大和はそれを避けたかった。

「いや、俺は周りの魔族達を全滅させてから合流する。それまで負けんじゃねえぞ？」

「テメエが来る頃には終わらしてやるよ」

「上等だ」

大和とナギは顔を見合わせて不敵に笑う。

それを見たセラスは、この二人がいれば大丈夫だという確信を持った。

「さて、まずはド派手に数を減らしてやるか」

卍解、雀蜂雷公鞭じやくへんらいこうべん

大和の右腕に、八チの下腹部を模したような照準器付きの砲台が出現。

その異様な武器に、その場にいた全員が無意識に一步後ずさる。

彼らの本能が『コレはヤバイ』と警告していた。

大和はそれを、魔族の群れが守護する『墓守り人の宮殿』へ向ける。

「コイツは、二撃決殺の始解状態の時ほど甘くはねえ」

金色の蜂の針が、ミサイルの如く飛翔する。

凄まじいスピードで飛ぶ砲弾は、魔族の群れを簡単に突破。『墓守り人の宮殿』に着弾した。

そして、

一撃必殺。

その場にいた全員の髪を逆立てるほどの大爆発が起こった。

「わ、わっわわわ」

セラスは爆風に吹き飛ばされそうになり、咄嗟に近くの建造物にしがみつく。

あの『紅き翼』でさえ、今まで見たことのない規模の破壊力に瞠目した。

爆風による粉塵が晴れ、現れた光景に、全員の口があんぐりと開く。

『墓守り人の宮殿』の三分の一が消滅していた。

それを見た大和は一言。

「……やりすぎた」

「「「「「「うおおおおおい!!??」「」「」「」「」

大和の額から一筋の冷や汗が流れる。

「いや、滅多に使わない正解だったから手加減の仕方がよく分からなかったんだ」

「というか姫子ちゃんまで巻き込まれてんじゃねえだろうな!?!」



しかし、ただでさえ複雑な転移魔法を即座に、しかも五人もの人数を転移させた代償は大きく、彼は転移と同時に倒れた。

「おい、大丈夫か!？」

水の使徒と特に親しかった火の使徒が駆け寄る。

「……すまない、私はここまでのようだ。お前が、アーウェルンクス様をお守りしろ」

「そんなことを言うな！ そんな、まるで最後の言葉みたいな……！」

火の使徒は必死に彼を抱き起こす。

そんな火の使徒の様子を見た水の使徒は薄く笑った。

「まったくお前は……いつまでたっても………変わらな………」

その言葉を最後に、水の使徒の体から力が抜ける。

「う、お、おおおおおおおおおお！……！」

抱きかかえる体から力が抜けていくことを感じた火の使徒は、嘆き、怒りが籠った叫びを上げた。

それを見たアーウェルンクスはこう思った。

(いや、魔力が切れただけで、まだ死んでないけどね)

「ほら、お前らもさっさと行ってこい」

「色々と納得いかねえ……」

ブツブツと文句を言いつつも、『墓守り人の宮殿』へと突入するナギ達。

大和の一撃により魔族達は数が激減していたが、それでも尋常では

ない数だった。

「さて、俺はコイツらを掃除してからだな」  
刀を天に向けて掲げる。

「霜天に坐せ、氷輪丸」

その声と共に、戦場に闇が下りた。

「そ、空が……！」

セラスが、連合軍が、帝国軍が、アリアドネー軍が、魔族達でさえもが空を見上げる。

天が鉛色の雲に覆い尽くされていく。

それは、まるで神話の中の出来事のようにだった。

てんそうじゅうりん  
天相從臨。四方三里の天候を支配する、これこそが氷輪丸の真の力。

大和は振り返り、呆然としているセラスに告げる。

「援護はいいが、巻き込まれないように注意しろよ？」

そう行って、大和は獣のような笑みを浮かべる。

卍解、大紅蓮氷輪丸。

「最初から、全力で飛ばしていくからなッ！」

『墓守り人の宮殿』の内部にて、『紅き翼』とアーウェルンクス達  
が向かい合う。

「やあ『千の呪文の男』、また会ったね。これで何度目だい？」

今まで幾度となく杖を交わしてきた相手。

それを目の前にして、ナギは冷静だった。

「俺をその名前で呼ぶんじゃねえ。その名前はな、あの野郎をぶっ  
倒した時に改めて名乗る予定なんだよ」

大和との戦いの記憶は、ナギの中に色濃く残っている。

そして、その絶望感と反骨心は、確実にナギの力量を上げていた。

それはナギに限った話ではない。

ラカン、詠春、アルビレオ、ゼクトもまた、かつての敗北を無駄に  
はせず、大和との戦いを通じて己を見つめなおしていた。

今の『紅き翼』は、才能にものを言わした戦闘集団ではない。

自分出来ることを考え、どう動けばよいのかを即座に判断できる  
ようになっていた。

「僕達もこの半年で君に随分数を減らされてしまったよ。それに、さっきの一撃で、僕の従者が一人戦闘不能になってしまったしね」

それを聞いたナギ達は目を逸らす。

アレを目撃してしまった彼らからすれば、かなり複雑な思いだった。

「五対四か。それじゃあ、お師匠は待機していてくれないか」

「確かにこちらの方が一人多いが……よいのか？」

「ああ、お師匠の手を煩わすまでもねえよ。俺たちの成長っぷりをしっかり見てくれ」

そう言って、ゼクトを除いた『紅き翼』が一步前に出る。

彼らの顔を見たゼクトは、喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

（まったく、いつの間そんな顔ができるようになったのじゃろっ  
な）

弟子と仲間達を案じる気持ちはもちろん存在する。

だがそれ以上に、ゼクトは彼らの戦いを見たくなくなった。

「無様な戦いを見せるでないぞ」

「おう、任しとけ！」

今ここに、最終決戦の火蓋が切って落とされた。

「っ、危ないですね！」

アルビレオは、自らに向けて放たれた漆黒の豪腕をかるうじて回避する。

彼が戦う相手は影の使徒。

そして、自らにとって相性の悪い相手でもある。

なぜならば、影で作られる魔法には重量がほとんど存在していない。アルビレオの重力魔法は物体の重さを数十倍にまで増やすことができる。

しかし、元となる質量がなければ、魔法はほとんど意味をなさない。質量が存在しないのは火や風も同じだが、それらは大気ごと押しつぶすことで防ぐことが可能。

だが光や影といった魔法を重力で防ぐには、それこそブラックホール級の重力が要求される。

よって、敵の攻撃は回避か障壁で凌ぐしかなく、現在アルビレオは影の使徒を相手に苦戦していた。

「まったく、私は後ろでコソコソと戦うのが性に合っているのですけどね」

だが、軽口を叩くアルビレオの顔に焦りは無い。

彼もまた、大和との戦いを経験してから変わったのだ。

重力魔法は支援に向いているが、それだけではこれからの戦いで通用しないかもしれない。

そして、彼の選んだ方法とは。

「鬼道とは奥が深い。重力に特化した私ですら、この鬼道の習得に半年もかかりました」

アルビレオが詠唱を開始する。

「滲み出す混濁の紋章 不遜なる狂気の器 湧きあがり・否定し  
痺れ・瞬き 眠りを妨げる 爬行する鉄の王女」

影の使徒がアルビレオの詠唱を止めるべく、影の巨人を生み出す。

影の巨人は質量こそ存在しないものの、魔力に覆われた腕を振り下ろされれば、それはそのまま攻撃力に変わる。

直撃すれば、体術の心得の無いアルビレオがどうなるかは火を見るよりも明らかだ。

見上げんばかりの巨人が腕を振り上げ、アルビレオを圧碎せんと迫る。

「絶えず自壊する泥の人形 結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ」

だが、それよりも一瞬早く詠唱が終わり、

「破道の九十 黒棺」

突如出現した黒い長方体に、影の使徒も、巨人も、完全に呑み込まれた。

「時空が歪むほどの重力の奔流。大和直伝の鬼道です。あなたでは、理解することもできなかつたでしょう？」

黒き棺が消えた後、巨人は消え去り、影の使徒もまた、全身から血を吹き出して倒れる。

ここに勝敗は決した。

「神鳴流奥義、雷光剣！」

「『雷の暴風』！」

青山詠春と対峙しているのは雷の使徒。

神鳴流には雷を放出する技が多く、奇しくも雷を得意とする二人の対決となった。

大和には敗れたものの、詠春は青山家の中でも天才と呼ばれるほどの剣士であり、その技量は高い。

戦いは詠春が優勢のまま進んでいた。

「流石に手強いな、青山詠春」

「諦めて降参でもするつもりか？」

夕風を青眼に構え、油断なく相手を睨みつける。

「いや、この短期間で腕を上げたことに感心しているだけだ」

だがな、と続ける。

「強くなったのは、お前達だけではないぞ！」

叫ぶと同時に、雷の使徒の体が発光する。

さらに体中から放電現象まで起き、魔力が全身に行き渡っていく。

青白く発光する敵に、詠春は警戒を強めた。

だが、集中していた詠春は、その知覚をあっさりと乗り越えられ、背後から一撃を食らった。

「が、はあっ！」

背中に強い衝撃。

その衝撃は肺にまで届き、体の中の酸素を強制的に吐き出させられ

た。

ダメージは残っているが、詠春は現状把握を優先させる。

詠春はあの時、瞬きすらしていなかったにも関わらず、彼の目にはまるで敵が消えたように見えた。

次の瞬間に背後からの攻撃。

さらに、先程の魔力と放電現象を鑑みれば、答えは一つ。

「……雷化か」

「その通り。お前達に対抗するべく、私達も力をつけた」

言葉を交わす最中にも、詠春の身体には傷が増えていく。

雷のスピードは、音速などとは桁が違う。光速の世界だ。

常時雷化こそ会得していないものの、物理攻撃は通用しない。

攻防共に高いバランスのとれた術式だ。

向かい合う詠春と雷の使徒。

だが、その距離は最早ゼロと等しい。

幾多の怪我を負い、圧倒的に詠春が不利な状況だが、その目はまだ死んではいなかった。

「……気に入らん目だな。まだ隠し玉を持っているわけでもなからうに」

「隠し玉ね……お生憎様だが、とっておきが残っている」

「なに？」

「あの男に勝てたのは昨日のことだったからな。実戦でいきなり使うのは少し怖いが、それも致し方ない」

「……お前、何を言っている？」

もう詠春の耳に、敵の言葉は入ってこない。

自分の内に、深く、深く、沈んでいく。

その様子を見た雷の使徒は、絶好の機会だといつものにも関わらず、一歩も動くことができなかった。

まるで、目に見えぬナニカに、気圧されているかの如く。

詠春は夕風を真っ直ぐに突き出す。

そして叫んだ。

「 『 斬月 』 ！ ！ 」

直後、膨大な量の気が詠春の体から吹き出した。

「むっ、ぐ」

詠春の気に押され、雷の使徒は後ずさる。

そして彼が目にしたモノは。

「なんだ……それは……」

詠春の持つ刀。ただの野太刀だったはずのそれが、変化していた。

柄が無い。鍔も無い。刀としてまともな形を成していない。

まるで、鍛え上げた刀をそのまま武器として鍛冶場から持ち出してきたかのよう。

どう考えても上手く扱えるはずがない。

あれならば、以前の方が刀として洗練されていた。

第一、雷化してしまえば一切の物理攻撃は効かない。

だというのに、何故、自分はその刀を恐れているのだ。

詠春が刀を大上段に構える。

明らかに間合いの範囲外。そこから振ろうとも、絶対に当たらない。

だが構わず、上から下へと、真っ直ぐに振り下ろす。

「月牙天衝」

刀が、詠春の気を喰らう。

そして斬月は、気を糧として巨大な斬撃を具現化する。

その光景たるや、まさに三日月。

雷の使徒は、自らに迫る脅威にようやく我を取り戻す。

（ッ、雷化！）

反射的に全身を雷へと作り替える。

自らを褒め称えたいほどのスピードでの発動だった。

この時点で雷の使徒には物理攻撃の全てが通用しなくなっている。

この斬撃がどれほどの威力を有していようと、当たらなければ関係ない。

雷の使徒は、斬撃が自分の身体を通り抜けていくであろう未来を確信した。

だが、その未来は、容易く打ち碎かれる。

「 式の太刀」

いかなる防御も許さぬ三日月が、雷の使徒を圧碎した。

「私にも年長者としての意地がある。あの時のように、大和君にだけ全てを背負わせることはさせない」

「オラオラオラアアツツ！！」

「うおっ、コイツ気合がすげえな！」

拳打の応酬を繰り広げるのは、ジャック・ラカンと炎の使徒。

「よくも、よくもアイツをやってくれたなあっ！！」

「アイツって、ひょっとして大和の攻撃に巻き込まれたってヤツか？ 俺関係なくね？」

「やかましいわあ！」

色々と誤解しながらの戦闘だったが、それでも火の使徒の怒りは確実に攻撃力へと変換されていた。

「うわっとうと、こりゃ結構ヤバイ雰囲気だな」

一撃一撃が岩をも砕くような威力。それが雨あられとばかりに襲いかかって来る。

さすがのラカンも捌ききることができずに、数箇所まともに食らってしまう。

ちやっかり同じ分だけやり返しているが。

「これはこれで楽しいけどよ、キリがねえな」

そう言っつて、ラカンはついこの間習得した必殺技を繰り出すことを決めた。

一度大きく下がって距離をとる。

「よっしゃあ、最後はカッコ良く決めてやるぜ！」

ラカンは腰を落とし、気を体中に送りつける。

火の使徒はラカンの尋常ではない気の量から、大技が来ることを予測し身構えた。

気合を溜めている間に攻撃することもできるだろうが、この戦いは火の使徒にとっては弔い合戦。

（主には悪いが、私はコイツらを正面から打倒してみせる！）

ラカンの気が爆発的に膨れがり、そして

「……やべえ、必殺技の出し方忘れた」

沈黙が場を支配する。

ラカンは冷や汗をダラダラ流し、火の使徒は完全に無表情だ。

そして火の使徒は一步ずつラカンに近づいていく。

その両腕に、煉獄の炎を纏わせながら。

「ちよ、ちよっと待て！ 今の無し！ タンマ！ やり方思い出すまで待ってくれよ！」

相変わらず無表情のまま火の使徒はラカンに近づく。

「ええいくそつ、アレはどうやって出すんだっけか。えーっと、  
こうか！」

無意味に力を溜めたり、奇妙なポーズをとるラカン。

もう二人の距離は半分になっていた。

「だーっ！ 俺様としたことがこんな所で凡ミスかよ！ せっかく  
スゲー技ができたのに！」

喚いても結果は変わらず、どんどん距離を詰められる。

そして、ラカンは結局、

「ああもう何でもいいからなんか出るやああっっっ!!」

ヤケになった。

しかし、元々ラカンは頭で考えて動く人間ではない。

新しい技に関しても同様、感覚を優先させたからこそたどり着けた。

火の使徒の拳が迫るその瞬間、ラカンは完全に適当に術を発動させる。

そして、ラカンの上半身の服が弾け飛び、火の使徒の拳を片手で止めてみせた。

「危ねえ危ねえ、やっと成功したぜ」

「なっ……」

火の使徒の口から驚愕の声が漏れる。

自らの拳を止められたことではない。

ラカンの背中と両肩に、恐ろしいほどの気が纏わりついている。

あまりの気の密度により、ラカンの上着が千切れて飛んだ。

「大和の鬼道を参考にして、それを拳に乗せれば俺最強じゃね？  
つていう発想から思いついた技だ。中々スゲエだろ？」

そう言って、ラカンは空いている右の拳を固めた。

彼の腕は白く練り上げられた鬼道で覆われている。

以前にこの技を見た大和は、呆れた声でこう呟いた。

まさか、自力で『瞬間』に至るヤツがいるとはな。

ラカンが右の拳を振り抜く。

彼の拳打からすれば、それはかなり緩やかな速度であったが、鬼道の方は違った。

ほんの少し指向性を持たされただけで、堤防が決壊するかの如く溢れ出す。

それは火の使徒を呑み込み、壁を破壊し、なお止まらない。

まさに形を持った『暴力』そのものだった。

結局、瞬間は『墓守り人の宮殿』を突き抜け、外に出るまで止まることはなかった。

「さっすが俺様。これで大和にリベンジだな！」

「……あの馬鹿、瞬間の先に人がいなかったからよかったものの、巻き込まれたらどうするつもりだったんだ」

自分のことは棚に上げて、大和は愚痴る。

現在、大和は魔族達の群れのど真ん中にいた。

それというのも、あまりにも敵の数が膨大だったため、一気に終わらせてやろうという考えだった。

「セラス！ 全軍の撤退は完了したか！？」

「はい、この付近では私以外は撤退しました！」

「というかお前はなんで残ってんだよ！ お前もそのまま退けばよかったろうが！」

「私はこれでもアリアドネー部隊を任されています！ 貴方を見捨てるわけには……」

「今から大技放つから邪魔だと言ってんだよ！！」

怒鳴りつけながらも、セラスに群がっていた魔族達を蹴散らす。

そして大和はセラスを片手で抱き寄せた。

「ちょ、大和殿!？」

「黙ってる。絶対に俺から離れるな」

憧れの英雄に抱き寄せられ、さらに『離れるな』などと言われたセラスは赤面する。

そんな状況ではないのだが。

大和は天に向けて、氷輪丸を掲げる。

その時、戦場にひとひらの雪が舞い降りた。

その雪は風の影響を受け、まるで桜の花びらのように空を舞う。

そして、その雪が魔族に触れた瞬間、巨大な氷の華となり覆い尽くした。

セラスは大和の腕の中で目を見開く。

このような技は見たことも聞いたこともない。

さらに、天相従臨により現れた雲から、どンドン雪は降り続けていた。

雪の花びらは不規則な軌道を描き、触れた魔族達を瞬時に凍りつか

せる。

セラスの目には、まるで花びらが魔族の命を吸い取り、花を咲かせているかのように見えた。

ひょうてんひゃつかそう  
氷天百華葬

「すじい……」

確かにこれならば味方にも被害が出かねない。

セラスは自分がかかなり危険な場所にいたのだと気づき、今更ながら

顔を青くする。

そんなことを考えている内に、この周辺の魔族達は全て氷の華に覆われ、まるで氷のバラ園の中にいるかのような錯覚を抱かせた。

「ほら、今の内にとっとと部隊に戻って指揮をしろ。まだ遠くでは別の部隊が戦っているぞ」

「は、はい！」

大和の腕から脱出し、自らの指揮する部隊へと帰還しようとするヘラス。

それを見て、大和も別部隊の援護に向かおうとする。

その瞬間、『墓守り人の宮殿』から大和に向けて閃光が放たれた。

「ッ、やば」

一目見ただけで分かった。

この閃光は違う。

あのアーウェルンクスですら、この光を放つことは不可能。

もっと、そう、この光は別次元のものだ。

(だが、ギリギリかわせる)

大技を放った直後の気が緩んだ瞬間を狙ったのだろうか、それは計算違いだ。

この程度のことですら油断するほど大和は甘くない。

瞬歩を使って回避しようとして試みる。

「あ………」

だが、その直前で気がついた。

自分の後ろで、セラスが閃光を見て硬直している。

完全に固まっており、あの体勢からの回避は不可能。

この状況を打開すべく、大和の頭はフル回転を始める。

そして弾き出した結論は、

「破道の八十八 飛竜撃賊震天雷砲！」

「防御も回避も不可能。」

「ならば迎撃により、少しでも威力を削る。」

「結論から言うと、その作戦はある程度成功した。」

「大和は背後のセラスを守りきることができた。」

「大和殿!？」

て  
砕かれた氷の竜と共に、大和が墮ちていくことを引き換えにし

## 第十五話

「……まったく、理不尽なほどの強さだね」

「ご託はいい。姫子ちゃんが何処にいるか言え」

『墓守り人の宮殿』内部にて、ナギがアーウエルクスを撃破。

彼の胸ぐらを掴み、持ち上げる。

ナギの体には目立った外傷は無く、相当に腕を上げていることを伺わせる光景だった。

「皆さんも終わったようですね」

「まあな。多少の怪我は負ったが」

「うおっ、詠春お前、刀がやたらとカッコ良くなってねえか？」

「四人とも修行を怠っておらんかったようじゃな。まあ、少しヒヤヒヤさせられる場面はあったがの」

他の『紅き翼』のメンバーも集結する。

多少は消耗しているものの、全員が戦闘可能な状態だった。

最早『完全なる世界』に勝ち目は無い。

その場にいた誰もがそう考えていた。

だが、アーウェルンクスは笑う。心底愉快だと言いたげに。

「ふ、ふふふ。まだ、君は僕が黒幕だと思っているのかい……？」

その瞬間、アーウェルンクス諸共に、ナギの腹部を閃光が貫いた。

次の攻撃に一番最初に気づいたのは、やはりゼクトだった。

「皆の者、上からデカいのが来るぞ!!」

ゼクトの声が響きわたると同時、上方から無色の閃光が放たれる。

クラティステー・アイギス  
「最強防護！」

「障壁展開！」

ゼクトは己の魔法の中でも屈指の防御力を誇る楯を呼び出した。アルビレオも、自分の魔力の殆どを障壁に費やす。

「月牙天衝！」

「瞬間！」

詠春とラカンも、自らの最高の攻撃力を誇る技で閃光を相殺せんと試みる。

だが、閃光は止まらない。

巨大な閃光はその威力を削られながらも、『紅き翼』に降り注ぐ。

ラカンの片腕が吹き飛び、詠春は腹部を数箇所貫通されている。

アルビレオは外傷こそ少ないものの魔力が底をつき、一番怪我が少ないのは体力と魔力を温存していたゼクトだった。

「な、何が……起きた……」

詠春が倒れ伏しながらも、攻撃された方向を向く。

「おいおいマジか……アレは、一体何なんだよ」

失った片腕を抑えながらラカンが呆然と呟いた。

魔法世界人である彼には、目の前にいる敵が『どういった存在』か、うっすらとだが認識できる。

一目見ただけでわかった。アレは、自分にとって絶対に敵う者ではない。

それこそ、大和の氷輪丸を見た時以上の絶望。

黒いローブを着た年齢も性別も不明の存在を、ジャック・ラカンは確かに恐れていた。

だが、

「……………はっ、上等だ」

吐血し、腹部から血を流しながらもナギ・スプリングフィールドは立ち上がる。

「おいナギっ！ 待て、アイツはやべえ！」

「おいおいどうしたよジャック。怖気付くなんてお前らしくないぜ」

口の端から血を流しながらも、ナギは不敵に笑う。

「俺には解るんだよ！ アイツは俺らに敵う相手じゃねえんだ！」

「……かもな。俺にだって、アイツがヤバいことぐらい解る」

それでもナギは諦めない。

「けどな、ここで立ち止まってたらあの時と何にも変わんねえだろうがツツ！！」

大和に敗北したあの時、ナギは何も出来なかった。

仲間が傷つけられているというのに、相手に一撃を入れることすら叶わなかった。

その屈辱と恐怖はリーダーであるナギに容赦なく襲いかかった。

だからあの日の夜、ナギは自らに誓ったのだ。

強くなる。

あんな思いを、二度としないために。

ナギの堂々とした後ろ姿に『紅き翼』の闘志に火が灯る。

「……ったく。んなこと言われたら、ビビってる自分が情けなさすぎるだろうが」

ラカン<sup>ラカン</sup>は失った左腕を抑えながらも立ち上がる。

「リーダーにそこまで言わせてしまったなら、我々も応えねばな」

詠春も腹部の怪我を帯で止血しながら、斬月を構える。

「ふふふ、今の私では大して力にはなれそうにありませんが……それでも、微力ながら尽くしましょう」

魔力切れにより震える膝を強引に立たせて、アルビレオがいつもの笑みを浮かべる。

「元よりワシの怪我はこの中で一番浅い。そろそろ出番が欲しかったしな」

目立った外傷の無いゼクトが、ナギの隣に立つ。

そして、

「よく吠えた、バカフィールド」

五木大和が、ボロボロの体を引きずりながら現れた。

「大和君！？ その怪我は！」

「ちょっと外でソイツにやられましてね」

黒いローブの人物、『造物主』を顎でしゃくる。

「よう。さっきの借りを返しに来たぜ」

右足は折れ、体中から血を流し、刀に寄りかかりながらも大和は戦う意思を見せる。

だが、最早近接戦闘は不可能な状態だった。

「おいおい、『剣の王』ともあろうものがボロボロじゃねえか。イメチェンか？」

「はっ、腹に風穴開けておいて、よくほざく」

ナギと軽口を叩きながら、大和は横に並んだ。

これが、大和と『紅き翼』が真の意味で手を組んだ瞬間。

「詠春さん！ 筋肉ダルマ！ 敵の注意を引きつけてくれ！」

大和の指示が飛ぶ。

「はっ、余裕だぜ！」

「任せろ！」

ラカンはを、詠春は斬月を使って『造物主』へと仕掛ける。

だが、二人の攻撃は曼荼羅の如き障壁に阻まれた。

「月牙、天衝！」

詠春は弍の太刀を織り交ぜながら月牙天衝を繰り出すものの、始解に至って間もない。

曼荼羅の障壁を抜けたとしても、『造物主』に致命傷を与えることはできなかった。

慣れぬ戦いを続ける内に、怪我のせいでどんどん体力が削られていく。

「瞬間！」

ラカンは片腕で瞬間を使い、圧倒的なまでの破壊力で『造物主』を薙ぎ倒さんとする。

しかし、『造物主』が掌をかざすと、曼荼羅の障壁の密度が一気に跳ね上がった。

それを見た大和は『造物主』の障壁の特性を理解する。

（オートで全方位に展開している第一の障壁。さらに掌をかざすことによって数十倍の密度になる第二の障壁。……第二の障壁は、恐らく俺でも突破は不可能だ）

現在大和はなんでもなさそうに立っているが、実際は気合で体を支えているだけである。

間違いなくこの場にいるメンバーの中で一番の重傷だ。

接近しての高速戦闘などできるわけもなく、セラスを助ける際に使った鬼道のせいで、気も大して残っていない。

だが、

「おいバカフィールド」

「なんだよ」

「お前の全力で、あの野郎をぶっ倒せ」

今の彼は独りではない。

「……今の俺の最大火力でも、あの障壁を突破する自信はねえぞ」

「構わん。俺が一度だけ、アイツにお前の全力を直撃させてやる。だからお前はただ、バカのように全魔力を注ぎ込めばいい」

あの、二年前の夜とは違う。

「ならば、私たちの魔力も使って下さい。とは言っても、私の魔力はほとんど残っていませんがね。それでも無いよりかはマシでしょう」

「……そうじゃな。今一度、お主らに賭けてみるかの」

もう、独りで何もかもを背負いこむ必要はない

「けっ、この技はテムエにリベンジするためのとっておきだったんだがな！ 仕方ねえからここで披露してやるよ！」

そう叫ぶと同時、ナギの持つ最高品質の媒体である杖に、ナギとアルビレオ、さらにゼクトの魔力が注がれる。

杖は発行しながらその形状を変えていき、神をも殺せるかのような槍へと変化していった。

大和はそれを見届けると、その一撃を確実に当てるための下準備に取り掛かり始める。

(通用するのは一回だけ。だが、その一回は絶対に防ぐことはできない)

大和は刀を抜き、その斬魄刀を呼び出した

「くそつ、二人だけでコイツを抑えんのはキツイぜ！」

「大和君達はまだ準備ができないのか!？」

ラカンと詠春の二人は『造物主』相手に、時間を稼ぐという無謀な行為を続けていた。

既に二人の体には幾重にも傷が刻まれ、流れ出る血が二人の体力を奪っていく。

そして、腹部に深手を受けている詠春は、ラカンよりも体力の消耗

が激しかった。

血を大量に失ったことによる貧血で、詠春は足元の石に躓くという初歩的なミスをしてしまう。

「しまっ」

その隙を見逃す『造物主』ではなく、無色の閃光が詠春を貫いた。

詠春は無言でその場に倒れ伏す。

「こんの、クソツタレがああああああああ！！！」

ラカンの反撃。

瞬間を纏った右腕により、『造物主』の横つ面をぶん殴る。

収束しきれずに溢れたエネルギーが、ラカンを中心として渦巻いた。

「ちくしょうが……」

それでも届かない。

ラカンが最後に見たのは、片腕で自らの攻撃を完全に防いだ『造物

主』と、視界を埋め尽くす無色の閃光だった。

前衛の二人を倒し、大和達に向き直る『造物主』。

「解せんな……」

その黒いローブの奥から男とも女ともとれる声が響く。

「お前達はこの世界の真実を知っているはずだ。だというのに何故、そこまでして彼らに味方する？」

この世界は作り物。

この世界に住む人々も紛い物。

なのに、どうして彼らにこだわるのかと『造物主』は問う。

「確かに、この世界はまやかしのかもしれない」

大和は刀を前方で回転させる。

「でもな、俺が戦っているのは魔法世界人のためじゃねえんだよ」  
残っている気を、全て刀に注ぎ込む。

「ただ俺は、自分自身に胸を張れる俺であろうと決めた。それだけのことだ」

そして大和は悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべる。

「　　なんだか、いい香りがするとは思わねえか？」

「っ！？」

倒れる、  
逆撫さかなで

その瞬間、『造物主』の世界が変わる。

上が下に、下が上に、右が左に、左が右に。

「これは」

「おもしれえだろ？ コイツは逆撫つつてな、敵の動作や感覚を上下左右、全て逆にすることができ」

『造物主』は左腕を動かそうとする。

だが、動いたのは右腕だった。

『造物主』は腕を下げようとする。



体の感覚の異変に慣れる前に、ナギの槍が『造物主』を貫く。

そのはずだった。

「そして、前後も逆か」

いきなり体の感覚が逆になり、すぐに反応できる生物などいない。

なおかつ、上下左右だけでなく、前後までも入れ替わっていることに気付くなど人間技ではない。

しかし、『造物主』は反応してみせる。

飛翔する槍に向け、正確に掌をかざした。

（駄目か！？）

ナギ達の顔に絶望が宿る。

だが、曼荼羅の障壁が展開され、槍が衝突する瞬間。

「ああ、一つ言い忘れていたが」

槍が、前触れなく消滅し

「見えてる方向と、ダメージを受ける方向も逆だから」

背後から現れた雷の槍に、『造物主』は貫かれた。

それを見届けた後、大和の意識は霞んでいく。

元々気合だけで立っていたようなものだった。

体が休息を求め、大和も抵抗することなく倒れる。

ただ、完全に意識が闇に落ちる前に、ゼクトの声と、ナギの怒号が聞こえた気がした。

## 第十六話（前書き）

新たに小説を書き始めるといふ無謀なことをしていますが、こちらの小説を優先させるので安心してください。

（まずこの小説を楽しみにしてくれている人がいるかは疑問ですが……）

## 第十六話

「……つ、ぐ」

「大和殿！？ 目が覚めたんですか！？」

激痛に顔をしかめる大和の視界に広がったのは、見慣れぬ天井とセラスの顔だった。

「ここは……」

「オステイアの艦の中です。戦いが終わった後、一番近くにいた艦隊に救助を求めました」

「他の奴らは……戦いはどうなった？」

「覚えていないのですか？」

そう聞かれ、大和に最後の記憶が蘇る。

ナギの槍が、『造物主』を貫いたことを。

「そうか……俺達は、勝ったのか」

「はいっ。『造物主』を倒した後に魔力無効化の力場が展開されま

したが、それも反転術式で抑え込みました！」

大和は起こしかけていた体をベッドの上に落とす。  
痛む両腕で顔を覆った。

「終わったのか……」

「はいっ……」

セラスの目から涙が溢れる。

「全てが終わりましたっ……」

「そうか……」

「世界は救われました……」

「ああ……」

「私が今ここにいるのも、貴方のおかげです」

「……」

「本当に、ありがとうございました」

ベッドの上の大和に、深々と頭を下げる。

純粹な感謝の眼差しを向けられ、大和は気まずそうに顔をそらした。

「いや、別に……」

「いえつ、貴方に抱きかかえられたり、庇われたりしなかったならば、私は確実に死んでいました！」

自分で言いながら少し恥ずかしかったのか、赤面するセラス。

二、三回ほど深呼吸をして、心を鎮める。

「あのつ、その、それで、べ、別に吊り橋効果とかそんなんじゃないんですけどすね！ わ、私は」

その時、部屋の扉がコンコンとノックされた。

身を乗り出した体勢でフリーズするセラス。

「入っていいぞ」

「うむ、失礼する」

扉を開けて入ってきたのはアリカだった。

「よう、久しぶりだな王女さん」

「ああ。今回の戦いではお主のおかげで、兵達の犠牲がかなり減ら



「他の『紅き翼』達は無事なのか？」

「うむ。ジャック・ラカンと青山詠春が重傷ではあるが、命に別状はない」

「そうか。そいつはなにより」

そう言つて、大和は体を起こす。

「で、本題はなんだ？」

「……」

「アンタが戦後処理を放つて、わざわざ俺のところまで来たんだ。なんかトラブったんだろ？」

「……その通りじゃ」

アリカは話す。

自分達の勝利、それがどんな代償の上に成り立ったのかを。

「なるほど……オスティアの崩落か」

「ああ、わらわは世界を救う代わりに自国を滅ぼす」

「……そうか」

まともな判断力を残した人間ならば、当然の決断だ。

そもそも反転術式を発動させなければ、そのままオスティアは滅びていた。

最善の道は、あの時点で存在しなかった。

アリカは次善の道を即座に選んだだけだ。

アリカに責任などない。

「アンタ、それでいいのか」

「……いいわけ、なかるうがっ！」

オスティアの王女が吠える。

「わらわとて、最後まで他の道を探した！」

「誰が好き好んで自国の民を死なせようか！」

「だが、他の道など存在しなかった!」

「これしか、これしかなかったのじゃ……!」

言い切ったアリカは、俯いて肩を震わせる。

それを見た大和は一つの決意をした。

「なあ王女さん。一つ、とびつきり素敵なプランがあるんだが、乗るか?」

大和の語る作戦。

それは悪魔の契約。

契約したが最後、二度と安らかに過ごせる日は来ない。

そして、アリカは

セラスは艦内を散策していた。

大した怪我はしておらず、部隊の指揮権もアリアドネーからやってきた援軍に譲渡済み。

ぶっっちゃけ暇だった。

しかし、セラスは悩んでいた。

(王族であるアリカ殿に、敬語も使っていなかった……や、やっぱ二人はただならぬ関係!?)

まるつきり見当違いである。

(どうすればいいのでしょうか……アリカ殿に勝てる要素がまったく見当たりません)

セラスは悩み続ける。

一人で百面相をしながら廊下を歩くセラスだったが、通りかかった人が避けていることに気づいてはいない。

(うう、このままじゃ落ち込むばかりです。外に出て頭を冷やしましょ……)

トボトボと歩き続ける。

セラスが大和を憧れるようになったのは、グレート＝ブリッジの戦いよりさらに前だった。

アリアドネーに所属しているセラスは、闘技場の警備を担当したことがある。

その時に見てしまったのだ。圧倒的強者というものを。

氷の竜を操り、ジャック・ラカンを子供のようにあしらった大和。

衝撃を受けた。

自分と大して年が変わらないというのに、彼はどれほどの高みにいるのだろうか。

それからというもの、セラスは大和の噂を追いかけ始める。

グレートブリッジで『紅き翼』を撃破した。

当然だろう。

テオドラ第三皇女の護衛として、闘技場から引き抜かれた。

彼ほどの力ならば、国も放っておくまい。

そして、彼を追いかける理由は、少しずつ変わっていき

甲板に出たセラスは新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んだ。

この艦は王都オスティアに向けて飛行中であり、眺めも最高だった。

いい場所を見つけ、思わず顔を綻ばせる。

しかし、次の瞬間に凍りついた。

「や、大和殿！？ どうしてこんなところに！？」

自分の想い人であり、命の恩人でもある五木大和が甲板にいたからだ。

「ん……ああ、セラスか」

大和はボンヤリとした目をセラスに向ける。

「どうしてこんな場所に来ているんですか！ 貴方は今絶対安静な  
んですよ!？」

「ああ、悪い悪い。すぐに戻るよ」

「……大和殿？」

ここで、セラスはようやく大和の様子がおかしいことに気がつく。

大和は一瞬だけセラスに目を向けたものの、またすぐに外の光景を  
眺め始めた。

だが、セラスが違和感を感じたのはそこではない。

今の大和は、隙だらけなのだ。

それこそ、セラスですら倒せそうなほどだった。

いつもは抜き身の刀のような雰囲気放っていたにも関わらず。

「どうか、なさったのですか？」

「いや、ちょっと外の空気を吸いたくなっただけだ。今から戻る」

そう言って、大和は甲板の手すりから離れた。

そのままセラスの横を通り過ぎ、艦内に戻るつもりとする。

「ま、待って下さい！」

大和が自分の横を通り過ぎようとした時、セラスは思わず大和の手を握りしめた。

「……なんだ？」

「え、あ、その」

思わず止めてしまったものの、セラスにこれといった用事はない。

強いていうならば大和の様子が気になったからなのだが、流石にそれは用事としては苦しい。

（な、何を言えば……）

さらにテンパる。

そして、反射的に口から出てしまった。

「好きです！」

「え……？」

大和がセラスの顔を見る。

そして、セラスは自分が何を言ってしまったのかをようやく自覚した。

（あわわわわわわわわ！！？？ わ、私は一体何を！？）

だが、時既に遅し。

吐いた言葉は飲み込めない。

(ああ、色々と終わりました……)

雰囲気もなにもあったものではない。

こんな告白が受け入れられるはずもないだろう。

セラスは目を閉じ、大和の言葉を待った。

しかし、予想とは違って、頭に手の感触。

「え……」

しばらく硬直してから、ようやく頭が回りだす。

(頭、撫でられてる……?)

恐る恐る目を開ける。

すると、本当に大和に頭を撫でられていた。

「ありがとな」

大和は、笑顔だった。

「お前の気持ちは素直に嬉しい」

しかし、セラスにはやはり違和感しか感じない。

「でも、すまない」

まるで今にも泣きだしてしまいそうな、そんな顔。

「俺なんかのことは忘れて、新しい出会いを探してくれ」

振られたことよりも、大和がそんな顔をしていることの方が、心に刺さった。

『紅き翼』の面々の治療は終わり、ラカンと詠春も出歩けるほどには回復した。

その後、離宮島にて終戦の式典を執り行い、オスティアア市民の大部分がナギ達を祝福してくれた。

ただ、その場に大和の姿はなかった。

ナギ達は現在、離宮島をぶらついている。

「ははは。ボロ雑巾みたいだぜ、ジャック」

「ま、俺と詠春はヤツの攻撃を至近距離で食らっちゃったからな。名誉の負傷ってヤツだ」

「それにしても、ゼクト殿のことは残念だったな……」

「戦争だったんだ、そういうこともあるだろ。敵も味方も大勢死んだ」

「……いや、お師匠は」

ナギはゼクトのことを話そうとしたが、アルビレオに止められる。

（今はまだ話すなっ……）

「おいナギ。それより姫さんとはどうなったんだよ？」

ラカンが暗い空気を変えるためか、おどけた調子で聞く。

「……別に、なんもなかったっつ。式典が終わってからは一度も

会ってねえし」

「本当かー？」

「暑苦しいから顔を寄せんな」

「詠春、貴方の刀はずっとその形態のままなのですか？」

「ああ、コイツは常時解放型というタイプらしくてな。正直持ち運びに苦労している」

そんなやり取りをしていると、近くの建物に備え付けられたモニターが目に入った。

（あれは……今回の戦いで戦死者のリストか）

人の名前が順番にスクロールされている。

気がつけば、いつの間にか周囲の人たちは黙祷を捧げていた。

ナギ達もそれに習う。

ニコラス

ヒューバート

ネヴィル

シーザー

エドワーズ

ルーファス

ゼクト

その名前が出た時、『紅き翼』のメンバーは皆、顔を伏せた。

（お師匠……）

ゼクトがどうなったのか、本当に知っているのはナギとアルビレオだけだ。

しかし、もうゼクトが戻ってこないという意味ならば、ラカン達も間違っではない。

『紅き翼』もオステイア市民も、英雄を失った悲しみに心を痛める。

だが、その次にスクロールされた名前に、『紅き翼』は目を見開いた。

五木大和

第十七話（前書き）

二話同時投稿です。

## 第十七話

「おいどうなってる！ どうして魔法が使えないんだ！」

「そんなもん俺が知るかよ！」

「誰か、私の娘を見かけませんでしたか！？」

王都オスティアはパニックに陥っていた。

ある一時を境に、魔法がまったく使えなくなるという異常事態が発生。

自らの手足のように扱ってきた魔力が消え、オスティアの市民は恐慌状態となった。

さらに追い打ちをかけるかのように地震が起こり、オスティアの数箇所が崩落する。

それはまさに、この世の終わりのような光景だった。

「お母さん！ お母さ きゃあー！」

はぐれた母親を探し、子供が周囲を見回す。

だが、このパニックの中ではそれもままならず、走り回る大人に突き飛ばされてしまった。

「うっ……痛い……」

少女にとって、いつも通りの一日のはずだった。

親の仕事の関係上、離宮島のパレードには行けなかったが、その分夕食を豪華にしようと家族で話し合った。

お母さんと二人で町に出かけ、良い食材を買った。

戦争が終わったお祝いをしよう、とお母さんと笑いあった。

パレードに行けなかった分、お父さんに埋め合わせをしてもらおう、と話し合った。

「なのに、どうして……」

足をくじいてしまったのか、少女は蹲ったまま動かない。

しかし、あることに気がついた。

先程まで逃げ惑っていた周囲の人間が、今は全員立ち止まっている。

「……?」

不審に思い、周りの人間を見回す。

すると、一人の例外もなく空を見上げていた。

少女もつられて上を向く。

すると、そこには

「綺麗……」

見る者を虜にするような、蒼い光がオスティアの街を包み込んでいた。

「おい姫さん！ ナギだ！ 応答しやがれ！」

この魔力消失現象の中で、『紅き翼』もまた動き出していた。

指名手配され、逃亡中に使っていたボロ船に乗り込み、この現象の正体を知っていると思われるアリカに連絡を入れる。

ブリッジのモニターに、アリカの顔が映される。

「……ナギか。何の用だ」

「何の用か、じゃねえだろ！ 一体これはどういうことだ！」

「……見てのとおりだ。妾は世界を滅ぼす黄昏の姫御子の『反魔法場』を、姫御子ごと封印した。これはその代償なのだ」

「っ、なんで言わなかった！」

「言えばどうにかできたのか！」

即座に返され、ナギが言葉に詰まる。

「くそッ、今からそっちに向かう！ 待ってる！」

「ここにお主の力はいらない！ それよりもまだ崩落を始めていない区域に行ってくれ！ 妾達が逃亡中に使用していたボロ船なら

」

「もう乗ってるよ！ ちくしょう、こんな時に大和の野郎は何してんだ！」

その名前を聞いた瞬間、アリカの顔に動揺が生まれた。

「……おい姫さん。アンタ、何か知っているのか」

アリカの表情の変化をナギは見逃さなかった。

「……」

「姫さん！」

生まれた動揺は一瞬だけ。今のアリカは完全に無表情だ。

アリカはゆっくりと口を開く。

「……今、妾達が行なっていることは、ただの『保険』なのだ」

「『保険』だと……？」

「そうだ。この魔力消失現象で失う命は、ほぼゼロだろう」

「姫さん、アンタ何言って……」

その時、蒼い光がどこからともなく舞い降り、オスティアを包み込んでいくのをナギは見た。

首の後ろがチリチリとした感覚を伝える。

この感覚を、ナギは何度も味わったことがあった。

そう、この感覚は

「大和……？」

「さて、始めるか」

オスティアの周囲に無数に存在する浮島。

その中の一つ、直径百メートルもない島に大和はいた。

右手に持った刀を地面に突き立てる。

既に下準備は終えており、後は実行に移すだけ。

大和は深呼吸を一つ、そして、両の手を強く打ち鳴らした。

大和の体から、蒼い光が溢れ出す。

それは絡み合い、もつれ合いながら爆発的に体積を増していく。

さながら蒼一色で構成されたオーロラのように、オスティアを覆った。

それを見届けた大和は息を深く、深く、吐き出す。

一番重要な工程を終え、大和は安堵した。

(だが、まだ集中を切らすわけにはいかない……)

神に祈るような姿のまま、大和は自らの意識の中に潜っていく。

だが、ふと懐かしい気を感じた。

鬼道に長ける大和は、それが詠春による天挺空羅だということをする

ぐに理解する。

(詠春さん……鬼道は苦手だったのに、天挺空羅を使えるようになっていたのか)

まだ京都にいた頃、いつもの場所でよく鬼道の訓練を見ていたことを思い出し、大和は苦笑する。

天に伸びる気の網は大和から見れば拙いものではあるものの、詠春が修行を怠っていないかったことを証明していた。

大和を捕捉することに成功したのか、気の網の一部が大和の元に飛んでくる。

『……君……大和君!』

「詠春さんですね? 聞こえていますよ」

『よし、繋がった!』

天挺空羅の向こう側から複数人の声が聞こえる。

どうやら『紅き翼』の全員が集まっているようだ。

『大和君は今どこにいるんだ!?!』

「オスティアの周囲に浮遊している島の中の一つです」

『そんなところで一体何を……って、おいナギ！ 押すな！』

『おい大和！ テメエこんな時にどこで油売ってんだよ！』

現在、詠春はボロ船の中の一室で座禅を組んでいる。

魔力が消失しているために念話などは使えず、気で発動する鬼道でしか大和と連絡がとれない。

苦手な鬼道を成功させるための努力だったのだが、側にいたナギが飛びついたために体勢が崩れそうだった。

『バカフィールドもいるのか、丁度いい。仲間を連れて今すぐにオスティアから離れる。魔力消失現象に巻き込まれるぞ』

「それはもう聞いた！ 俺達はこれから逃げ遅れた人達の救助を  
」

『必要ない』

ナギの言葉は途中で遮られる。

『だからお前らはさっさとこの場を』

「必要ないって、どついうことだよ」

『……………』

「テムエと姫さんは何を企んでんだよ！ 答えろ大和！」

『……………簡単な話だ。俺が鬼道を使って、オスティアを地面に軟着陸させるということだよ』

それを聞いた『紅き翼』は息を呑む。

大和のデタラメさはよく知ってはいたが、今回はその中でも群を抜いていた。

オスティアはその辺りに浮いている島とは訳が違う。

ウエスペルタティア王国はどちらかと言えば小国の部類に入る。

だが、仮にも一国の首都。

それを一人の鬼道で浮かすなど、最早笑い話だ。

しかし、大和のことを知る人間ならば、また話は違ってくる。

「お前、首都を浮かすなんてこと本当にできるのか」

『ああ。浮かすというよりは、時間停止の鬼道を使って落下のスピードを緩めるといった方が正確だがな』

「マジかよ……」

『マジだ。だからオスティアは俺に任せて、お前らは避難した人達の混乱を収めてくれ』

驚愕する『紅き翼』達だったが、ナギはモニター越しのアリカの様子がおかしいことに気がつく。

「どうした姫さん。顔色が悪いぞ」

「……」

『なんだ、王女さんもいるのか？』

「ああ、モニター越しだけどよ」

「あの、少しよろしいですか？」

通信にアルビレオが割り込む。

『なんだアル。今俺は集中してんだから、できるだけ手短に話せ』

「わかっていきます。私が聞きたいのは、それほどの術を行使する貴方になんらかの代償があるのではないか、ということですよ」

アルビレオがそれを聞いた瞬間、アリカの表情が凍りついた。

『……………』

大和も黙り込んでしまふ。

「返答はなしですか。詠春、貴方の知っている範囲でなにか副作用のようなものがある鬼道はありますか？」

「……ある。俺が知っているのは一刀火葬という鬼道だが、それを放つには腕一本を代償にしなければならない」

犠牲破道と呼ばれる、破道の九十六　一刀火葬。

それは焼け焦げた己の腕を生贄に捧げることで発動する禁術。

そのおぞましさに、『紅き翼』達は顔を歪めた。

「一つの都市を浮かべるといふ鬼道に、何の代償も無い訳がない」

アルビレオもまた、大和に鬼道を教わった身。

だからこそ、出来る範囲が大体わかる。

「大和、貴方はこの犠牲鬼道を使おうとしているのですね？」

『……そうだ』

「一体、何を捧げるつもりなのですか？」

時間停止の鬼道は、それだけで禁術。

ましてや、オスティアを丸々包み込むほどの規模だ。

その分代償も大きく

『 身体全部だ』

その咳きは、空虚に響いた。

「っ、ざっけんな……」

ナギが拳を強く握り込む。血が滲むほどに。

「テメエ、ふざけんじゃねええええッッッ！！！！」

そして叫ぶ。

「何考えてやがる！？ オスティアの連中救って！ そんなでもって自分が犠牲になって！ そんなもんだだけの自己満足じゃねえか！」

『そつだが、それがどうかしたか？ 少なくともお前に俺の人生をどうこう言われる筋合いはない』

「んだとコリア！」

そこで、ナギは気付く。

先程からアリカが一言も喋らないことに。

「まさか姫さん、アンタも……」

アリカはゆっくりと頷く。

「……ああ、知っていた」

「姫さんッ……！」

『おいバカフィールド。王女さんを責めるのはお門違いだぜ。そもそもこの方法を提案したのは俺だしな』

それでもなお言い返そうとするナギだったが、ふと思い出す。

戦死者のリストの中に大和の名前が入っていたことを。

それはつまり、最初から生きて帰るつもりが無いことを証明していた。

『悔しいか？ それならその気持ちをよく胸に刻んでおけ。今お前が感じている無力感は、王女さんもまた感じているものだ』

そう言われてナギは気付く。

モニターの端にチラツと映されたアリカの手。

その手もまた、血が滲んでいた。

『結局のところ、お前に力が無いのが悪い。そして俺には力がある。だから俺を止められないんだよ』

ナギは近くの壁を思いつき殴りつける。

大和の言葉は全て真実だった。

大和のすることに文句を言える筋合いなどない。

『お前は王女さんを救ってやれ。ソイツは俺のことも背負っちゃまうだろうからな』

思えば、最初から大和は自分のためだけに戦っていた。

人を救いたいというのも、ただの自己満足。

こうして犠牲鬼道を発動しているのもまた同じ。

最後まで自分本位に、夢を叶えようとしているに過ぎない。

『俺には叶えたい夢がある。今回の崩落はそれを叶える大チャンスなんだ。誰にも邪魔は、させない』

僕は破道よりも縛道の方が好きだな。作成者の、できるだけ人を殺したくないという思いが伝わってくる。

僕達の持っている技術は、人を傷つけるためのものだ。それは否定しようがない。

でも、この技術で誰かを護こともできると思っただ。

僕はこの技術で、人を守れる存在になりたい。多くの人の命を救えるような存在に。

そう、お伽噺のような英雄に、僕はなりたい。

オスティアが、緩やかに降りてゆく。

その大地にたくさんの人を乗せながら。

人々は皆、外に出て蒼い光を見つめる。

誰もが無言だった。

しかし、誰もが理解していた。

この蒼く、優しい光が、自分達を守っているのだと。

都市が地面に降りるまで、人々はその光から目が離せなかった。

体が消えていく。

自分の手をかざしてみると、地面が透けて見えた。

地面に突き立っている自分の刀を撫でようとする。

残念ながら、その前に手は完全に消えてしまったが。

結局、名前すら付けることはなかった。

しかし、間違いなく自分と共に歩んできた相棒だ。

ありがとうと言おうとして、自分の喉が消えていることに気付く。

苦笑しようとして、口が無いことに気がついた。

仕方なくオスティアの方に目を向ける。

自らの鬼道はその役目を果たし、都市を緩やかに地上へ降ろしている。

これならば被害もほとんど無いだろう。

せめて最後まで見届けたいが、視界が霞んできた。

この瞳もまた、その役目を終えようとしている。

まだ思考は残っているようなので、過去に思いを馳せてみた。

様々な出会いがあった。

挫折したこともあった。

また、自らの足で歩き始めた。

そして、大和に残った最後の誓い。

ねえ、刀子ちゃん。

色々と遠回りしちゃったけど。

一度、諦めそうになったけどさ。

俺、やっと英雄になれたよ

『紅き翼』とアリカがその場所にたどり着いてから、誰も言葉を発しなかった。

大和のいた場所に残っていたもの。

それは、一本の名も無き刀だけ。

皆、無言で見つめ続ける。

一人の英雄の生き様を表す、その一本の刀を

## 第十七話（後書き）

色々と批判が怖い……

当たり前ですが、これで完結はしません。むしろここから始まるという感じです。

## 第一章 最終話

大戦より十数年後。

京都、総本山にて。

「長、お願いします！ 私に神鳴流を教えてください！」

「刹那君……」

「私はこのちゃ……お嬢様が川で溺れた時、何もできませんでした……だから、強くなりたいんです！ 次は守れるようになりたいんです！」

近衛家の屋敷にて、桜咲刹那が詠春に頭を下げていた。

「……刹那君、貴方は木乃香の友としてよくやってくれていると思います。しかし神鳴流を修めるとなると、木乃香との時間もあまり取れなくなるでしょう」

「はい」

「神鳴流の修行は厳しい。途中で断念する者も、残念ながら少なくありません」

「はい」

「それでも、決心は揺るがないのですか？」

「はい！」

ついこの前、木乃香が川で溺れるという事故があった。

幸い命に関わるものではなかったが、その時の無力感は今でも刹那を苛んでいる。

(もう、あんな思いは二度としたくない……！)

刹那の決意の固さを感じ取ったのか、詠春は目を閉じたまま頷いた。

「わかりました。刹那君にはこれから神鳴流の一員として、修行に参加してもらいます」

「ありがとうございます！」

刹那はより一層深く頭を下げる。

「……貴方になら、託してもいいかもしれませんね」

「え？」

ここで待っていて下さいと告げ、詠春はその部屋を後にする。

数分後に戻ってきた詠春は、その手に一本の刀を携えていた。

その刀はあちこちが古びていたものの、汚れや埃は無く、入念な手入れがされていることを伺わせる。

詠春は刀を刹那の前に置いた。

「この刀は私の友がかつて使っていたものです。年代物ですが、造りは頑丈ですので受け取って下さい」

「そ、そんな貴重な刀を私などに渡してよろしいのですか？」

「貴方は木乃香を守ると誓ってくれた。私の友もまた、人を守ろうとする誇り高い人物だったのです。この刀は貴方にこそ相応しいでしょう」

刹那はおずおずと刀を手取る。

子供の手にはずっしりと重く、ゆっくりと引き抜かれた刃は差し込んだ陽光を反射した。

(綺麗や……)

思わず見蕩れてしまう。

「あの、この刀に名前はないのですか？」

「名前は付けられていませんでしたが……刹那君が名付けますか？」

詠春に問われ、刹那は少し考え込む。

「失礼ですが、この刀を使っていた人の名前を聞いてもいいでしょうか？」

「……大和、という名です」

「ならば、私はこの刀の名を『大和』としたいと思います！」

何故だろうか。

まだこの刀に主として認められていないと、刹那はそう感じた。

「私、一生懸命修行します！　そしてこの刀に相応しい剣士になって、お嬢様をお守りしてみせます！」

だからこそ宣言する。

たとえ今は弱くとも、いつか必ずこの無骨で、そして美しい刀に認められるような使い手になってやるよ。

刹那が出ていった後の部屋で、詠春は願った。

「大和君……どうか、彼女達を見守って下さい」

その願いは、未来で確かに聞き届けられる

《第一章 終》

## 第一話（前書き）

この小説の刹那は、ちょっとマシな子です。

## 第一話

詠春に『大和』を授かってから三年、あの日から刹那は毎日修行漬けの日々を送っていた。

神鳴流の修行は厳しく、幼い刹那には辛いものであった。

時には挫けそうになることもあり、その度に『大和』を見て、最初の誓いを思い出す。

このちゃんを守りたい。

それだけを考えて、大の大人でさえ音を上げるような修行を乗り越えてきた。

この三年は体の下地作りに専念し、剣術を習うことはなかったが、同年代の子供と比べれば格段に強い肉体と気を持っていた。

元々人外である鳥族の出身だ。伸び代は人間よりも多い。

基礎を積み上げる期間を終え、刹那は本格的に神鳴流の修行に入ることになった。

しかし、ここで問題が発生する。

関西呪術協会の中で、刹那の立ち位置はいいとは言えない。

元々詠春が何の断りもなく連れてきた子供だ。

詠春からすれば、刹那が人間と鳥族のハーフであるなどと迂闊に吹聴するわけにもいかず、一時期隠し子と噂されたこともあった。

そして一人娘である木乃香と近いこともまた、刹那の立場を悪くしている。

木乃香に取り入りたい一派からすれば、刹那は嫉妬の対象だ。

必然、その悪意は様々な形で刹那に襲い来る。

刹那は迫害されることには慣れていた。

鳥族の里にいた時も、羽や髪が白いということの不吉の対象とされていた。

だから周りの人間に誹謗中傷を受けようと、我慢できた。

他の神鳴流を志す者達に陰口を叩かれようと、我慢できた。

無論、その心は何も感じない訳ではなかったが。

それでも、辛い夜には『大和』を抱いて寝ることで落ち着くことができた。

『大和』に気を込めると何故か不思議な気分になる。

まるで誰かに見守られているような、そんな暖かい気持ちになるのだ。

だから刹那は毎晩気を込め続ける。

ありがとうと、心の中で呟いて。

「はっ！ たあっ！」

山の中に刹那の掛け声が響きわたる。

その声は近くにある滝の音と混じり合い、打ち消されていった。

刹那は『大和』を両手に持ち、何度も振り下ろす。

その軌道はお世辞にも綺麗とは言えず、刃筋も立っていないため、たとえ人に斬りかかってもただの打撃武器に成り下がるだろう。

それ以前に握り方からしておかしい。

刀というものは、利き腕とは逆側の手で柄の先を持つ。

そうすることにより、てこの原理を使って刀を振るうことができるのだ。

しかし刹那の両手はくっついており、まるで野球のバットを持つかのようにだった。

それもそのはず、刹那はまともな剣術の指導を受けていない。

神鳴流の師範代の一人が刹那を疎んでいる派閥の一員であるせいで、剣術の稽古をほとんど見てもらえないのだ。

それどころか道場からも追い出される始末。

行き場を無くす刹那だったが、過去の体験から人に頼ることに慣れていないために、詠春に相談することも思いつかなかった。

このままではこのちゃんを守れない。

そう考えた刹那は、たとえ独学になろうとも力をつけることを決意した。

実際のところ、指導者も無しに剣術が上達することなどほとんど無いのだが、この時の刹那は九歳。

色々浅はかな年頃だった。

しかも修行する場所を選んだのは、よりによって立ち入り禁止の山

本人はそのことを知らずに（教えてくれるような人がいないため）適当に選んだのだが、このことが他の人間に知られれば、むしろ保護者である詠春の立場が悪くなる。

下手に相談するよりもよっぽど迷惑な行為だった。本人はまったく気づいていないが。

自分がかかり危ない橋を渡っていることなど知らずに、刹那は剣を振り続ける。

（アカン……全然強くなってる気がせえへん……）

この場所で素振りをするようになってから五日。

刹那は手応えをまったく掴めずにいた。

（やっぱり、師範代の人に頭下げて教えてもらった方がええんやろ  
うな……）

流石に五日も剣を振っていると、指導者の不在がいかにか大きいかわかる。

刹那が剣を持つ理由は、木乃香を守るため。

そのためには自分のちっぽけなプライドも捨てる覚悟だった。

自分は何も悪いことをしていないのに、という思いは確かにある。

だが、木乃香の優先順位はそれよりも遙かに上。

後一回だけ素振りをしたら、道場に行つて師範代の人に頼み込むことに決めた。

（最後の一回、集中して振ろう……）

『大和』を大上段に構え、気を練り上げる。

息を深く吐き、体中に力を籠める。

そして、裂帛の気合と共に刀を降り下ろそうとして

力を入れすぎだ小娘。そんなんじゃ紙も切れねえよ。

「え……？」

刹那の頭の中に、聞き覚えの無い男の声が響いた。

刀を大上段に構えたまま、周りをキョロキョロと見回す。

見晴らしのよい河原には刹那以外、誰もいない。

首を傾げるも、気のせいだと自分を納得させて、再び刀を降り下ろ  
そうと

　　というか、まず握り方が滅茶苦茶だろうが。まったく、見てい  
てイライラする。

「だ、誰なん!？」

一度だけならば気のせいとすることもできたが、流石に二度目ともなれば無視できない。

刹那は『大和』を構え直し、周囲を警戒する。

しかし、相変わらず周りには誰もいない。

この異常事態に刹那は混乱する。

(だ、誰もおらへんのに声がするって……ひよ、ひよっとしてオバケ!?)

繰り返すが、この時の刹那は九歳である。

オバケや幽霊が苦手な年頃だった。

声が、届いている？ そんなことがあるはずが……おい小娘！

「ひゃ、ひゃい!？」

声が裏返りながらも、なんとか返事をする。

それを聞いた声の主が動揺する気配が伝わってきた。

どういうことだ……いや待て。かなり細かいが、小娘との間に糸バスが繋がっている。一体いつの間に……

謎の声の主は何かを考え込んでいるようだが、刹那としては気が気でない。

この前木乃香と一緒にホラー映画を見てから、そういったオカルト的な存在が非常に苦手になったのだ。

布団を被って泣き叫ぶ刹那とは対照に、木乃香は平然と笑っていたが。

(でも、たとえオバケが相手でも、このちゃんには手出しさせへんー！)

刹那は恐怖を振り払い、木乃香を守る決意を新たにす。

その間も、声の主は考え事をしていた。

まさか、この三年間に毎晩気を込められることで、擬似的な仮契約のようなものが成立したのか？

「お、お前は誰や！ 正体を表せ！」

刹那は気丈にも叫ぶ。

ただし、足は震えていたが。

ああ？

「このちゃんには指一本触れさせへん！」

コイツ何言って……ああ成程。そういつことが。

そう言って、声の主は呆れたようにため息を吐く。

(一体何処にいるんや……まったくわからへん)

こっちだ。お前の正面だよ。

心の中の声に返事され、刹那は戸惑う。

しかも、正面に目を凝らしても滝以外は存在しない。

こっちだっただの。お前がすっかり握り締めているだろうが。

「へ？」

刹那は自分の両手をみる。

その手はしっかりと、詠春から託された刀、『大和』を握り締めていた。

「……」

やっと気づいたか。まったく、相変わらず鈍いヤツだな。

刹那の思考が停止する。

そして頭に過ぎるのは、かつて一本の刀により神鳴流が滅ぼされたことがあった、ということ。

この刀は、それと同じ

「……ん」

ん？

「妖刀やあああああああああああ……！」



この滝に沈むのは二回目か……結構こころって浅いんだよね……

謎の声の主　大和は、沈みゆく中で、現実逃避気味にそんなことを考えていた。

## 第一話（後書き）

作者はオツツダルヴァが好きです。

## 第二話（前書き）

二話同時投稿です。

## 第二話

《全く、湖に投げ込まれたエクスカリバーもこんな心境だったのかね……》

「ほ、本当にごめんなさい。まさか貴方が前の持ち主の人やったなんて……」

《……別に、もう気にしていない。それよりも柄の中までちゃんと拭けよ。目釘の抜き方はわかるな？》

「は、はいっ」

現在、刹那は『大和』をバラバラに分解して河原に並べていた。

刹那は刀を滝壺にぶん投げた後に正気に戻り、詠春から託された大切な刀を捨ててしまったことに気がついた。

すぐに取りに行こうかと思ったがしかし、やはり怖いものは怖い。

結局、回収する決心をするまで十分程の時間を要した。

もちろんその間、大和は滝壺に沈んだままだった。

そして回収した後も問題発生。

大和に散々怒鳴られて、刀に頭を下げ続ける人間という珍しい構図を経た後、刀のあちこちに浸水していることが判明したのだ。

とはいえ、水の中に沈んでいたのだから当然とも言えるが。

このままでは錆び付いてしまうとのことで、刹那は刀のメンテナンスをすることを命じられたのだった。

「えっと、その、大和さん？」

《なんだ小娘》

「どうして刀になっているのか、聞いてもいいですか？」

《断る》

一刀両断。

即座に断られ、刹那は涙目になる。

それを見てさすがに哀れに感じたのか、仕方ないといった風に説明を始めた。

《……昔、俺が生きていた頃だが、その時に少しばかり無茶をしてな。その代償として体を全て持っていかれた》

「か、体全部？」

《ああ。だが、魂は代償の対象外だったらしく、それだけが残ったんだ》

「そ、想像もつかへん……」

一体どれほどの事をすれば、体を全て失うなどという代償を払わねばならないのだろう。

刹那はそれを聞いてみたくもあつたが、何故か話してくれないだろうという確信があつた。

《本来、魂だけ残つたところでそのまま消えるか、悪霊化するかのどちらかしかない。だが俺の場合、運のいいことに、すぐ近くにとり憑く対象があつた》

「それがこの刀やつたん？」

《そういうことだ》

「それって、やっぱり妖刀……」

《ああ？》

「はづつ、く、く、くめんなさい」

完全に立場が逆転しているが、それを突っ込む人間はこの場にな

かった。

「これでよしっ、と」

《刀の手入れの方法はちゃんと覚えておけよ。お前のは色々と順序が間違っていたからな》

「すみません……」

《……まあ、毎日欠かさずに手入れしていたことは褒めてやってもいい》

「え？」

人に褒められることに耐性の無い刹那は、それが自分に向けられた言葉だと気付くのに数瞬の時間を要した。

そして、気付くと同時に真っ赤になって照れる。

「あっ、あっっ」

《……調子に乗るな。言っとくが、普段のお前の刀に対する扱いは結構雑だからな》

「あ、やっぱりそうですよ……」

《ああもういちいち落ち込むんじゃねえ！》

「あつっ、す、すみません……」

しょんぼりする刹那を見て、大和はため息をつく。

もし体があれば、頭をがりがり掻いていただろう。

そして刹那がふと、考える。

(あれ、普段のことを知ってるってことは……ひょっとして)

あることに思い当たり、刹那の顔が青ざめる。

「あ、あああの、大和さん」

《何だよ》

「ひよ、ひよっとして、私の普段の行動も、その、見てたんですか……っ？」

刹那は修行の時を除けば、常に『大和』を持っていた。

それこそ、肌身離さずと言っているいいほどに。

もしも最初から全て見られていたとしたら

《見てたぞ。この間、お前が詠春さんの器を落として割ったこととかもな》

大和がごくあっさりと白状したことにより、刹那の呼吸が止まる。

《俺の刀を受け継いだ日に、はしゃいで振り回した拳句に『ざんがんけん！』とか叫んで岩に斬りかかったことも忘れてねえぞ。オマケに斬れずに刃毀れたもんだから泣き出すし》

「わあああああああああああ！！！！」

《そっぴやー昨日もホラー映画見て泣き喚いていたな、お前。詠春さんの娘は笑って見ていたのに情けない》

「いやあああああああああ！！！！」

これまでの人生における黒歴史を全て見られていたと知り、刹那は顔を真っ赤にして叫ぶ。

《ああそつだ。寝るときに俺を抱くのも勘弁してくれ。夏場は蒸し暑い》

「ひゃあああああああああ！……！」

《それともう一つ。いくらなんでも風呂場に俺を持ち込むのはやめてくれねえか。湿気で錆び付きそつになる》

「きゅっ」

羞恥心が限界突破し、刹那は倒れた。

《本当に、こんなのが主でいいのかな……》

少し早まったかもしれない。

そう思った大和は二度目のため息を吐くのだった。

《腕の振りだけに頼るな。もっと膝を使え》

「えっと、こつですか？」

《肘じゃなくて膝だ！ちゃんと聞いてんのかお前は！》

「あつあつ」

数分後、気絶から目が覚めた刹那は河原で素振りをしていた。

何故こんな状況になっているのかと言うと、目覚めた刹那に対し、大和がこう言い放ったからだ。

お前の剣術、俺が指導してやってもいい。

《また握りが甘くなっているぞ。正しい握り方は教えただろうが》

「は、はい！」

《たとえ今は窮屈で振りにくかろうと、しばらく振り続けていると慣れる。それまでその型を維持しておけ》

「わかりました！」

大和の指導を受けて、かれこれ数時間。

刹那の剣術は劇的に、とまではいかずとも、かなり改善されていた。

鳥族とのハーフであるが故に身体能力に優れ、剣術のセンスもあったのだろう。

幼い刹那は大和の教えをスポンジのように吸収していった。

《力を籠めることと力むことは別だ。基本は脱力、それを一気に爆発させるイメージを持って》

「……」

《どうした？》

「……あの、一つ聞いてもいいですか？」

《何だ、言ってみろ》

何か剣術でわからないことでもあるのか、と大和は考える。

しかし、刹那からの質問は予想外のものだった。

「……どうして、ウチにここまでしてくれるんですか？」

《……ああ？ いきなり何を》

「だって、ウチは弱くて、刀の握り方すらよくわかってなかったし」

《おい小娘、お前》

「それに」

大和の言葉を遮って、続ける。

「今までの私を見てきたんなら、大和さんも知ってるでしょう？」

ウチが、化け物ってこと。

その眩きは、やけに大きく響いた。



思いつきり叫び、ハアハアと肩で息をする刹那。

《そんなヤツをどうやって怖がればいいんだよ。言っておくが、生前の俺は山一つくらい簡単に消し飛ばせるぞ》

「や、山って……」

自分の刀の前の持ち主が規格外の人だったと知り、刹那が驚愕する。

そして同時に気づいた。

ひょっとして、自分は今、慰められているのだろうか？

《そんなへっぽこのくせに、自分が化け物だなんて生意気言いやがって。せめて神鳴流の技の一つくらい覚えてから》

「……」

《……おい、小娘？》

「あ……」

咄嗟に我慢しようとしたが、ダメだった。

表情は変わらぬまま涙が溢れ出し、握りしめた『大和』の柄に落ちていく。

《お、おい、急にどうした》

「ち、違っ……ひっく」

《なぜ急に泣く！？》

一度自覚してしまえば、もう手遅れだった。

今まで、誰にも知られずにいた秘密。

それを初めて受け入れられた感動と、喜びと、様々な思いが胸の中で混ざり合う。

そして、それらの感情は涙となって溢れ出した。

《ああもう俺が言いすぎた！ 悪かったよ！ だから泣くな！》

「ちゃ、ちゃうんです、ぐすっ、その、知られてから、受け入れられたの、初めてやったから」

慌てる大和の声が耳に響く。

彼に感謝を示したいのに、自分の中で上手く言葉にならない。

色んな感情が混じり合って、もっぐちゃぐちゃだった。

刹那は泣き続ける。

両手で刀を握り締めながら。

決してその手を離さぬように。

## 外伝四（前書き）

大和視点です。

一人称は初めて書くので、どうか寛大な目で見てやって下さい。

## 外伝四

ならば、私はこの刀の名前を『大和』にしたいと思います！

私、一生懸命修行します！

そしてこの刀に相応しい剣士になって、お嬢様をお守りしてみ  
せます！

それが、俺と桜咲刹那の出会いだった。

この身が刀となって、幾年が過ぎただろう。

最早時間の感覚など消えていた。

時折詠春さんが現れて、刀の手入れをして去っていく。それだけだった。

だというのに。

「ざんがんけん！」

《ちよ、待て！ 今のお前にそんな技を出せるわけが》

俺の静止も聞かずに、小娘は硬そうな岩に刀を叩きつける。

「てやああっ！」

《うあああああああ！！ 少し刃が欠けたあああああ！！？？》

「た、大変や。長に貰った大事な刀なのに……」

《だったら少しは大事に扱えや!!》

幼い娘一人に翻弄されていた。

「そ、そうや! こういう時は研いで直せば……」

《ああその通り! だから今すぐ詠春さんと呼んでこい!》

「ちよっと待つといてな。今すぐに直すから」

そう言つて小娘は俺を茂みに隠し、駆け出していった。

数分後、戻ってきた小娘はどこから持ってきたのか、砥石を脇に抱えていた。

周りに詠春さんの姿は見えない。

(おい、まさか……)

俺の本能が警鐘を鳴らす。

この類の直感の外れたことがない。

すると案の定、小娘は俺の横に座り込むと、砥石を地面に設置して

「うっ、ごめんな。ウチが未熟なせいで……」

泣きながら、自らの手で俺を研ぎ始めた。

だが、こんな小娘に研ぎの技術があるはずもなく。

《ぐあああああああああ！！！　ちよ、お前、それ側面を削って  
るだけがががががががが！！！！》

……こんな記憶はさっさと消去したい。

桜咲刹那はハーフである。

俺がそのことを知ったのは、小娘に引き取られて直ぐのことだった。どうして俺がそんなことに気がついたのかと言つと

「ふん、ふふん」

《……普通、刀を風呂場に持ち込むか？》

今現在、こんな状況だからだ。

小娘は風呂の中だからか、緩みきった顔で翼を洗っていた。

いくらなんでも油断しすぎだろ、と思わなくもない。

(ロリコンだったら喜ぶ光景なのかもな……)

だが生憎と俺はノーマルだった。

小娘の裸体如きに欲情するわけもなく、むしろ湿気による不快感に顔を歪めていた。

……顔など無いが。



「ほらほらせつちゃん。今ええとこやでー」

「いやや！ 怖いの見たくない！」

《へえ、最近の映画はよくできてるな》

詠春さんの娘、名を木乃香と言ったか。

今はその娘と一緒にホラー映画を見ているのだが、中々の胆力だ。

この映画はかなりリアリティがあり、大人でも少し怖がるであろう  
場面ですら笑顔を絶やさない。

だが、

「うっ……もういや……」

俺の主は、半泣きで必死に画面から目を逸らしていたのだが。

俺は小娘と木乃香が共にいる所をあまり見ない。

いや、木乃香の方はなんだかんだと理由をつけて小娘と一緒に遊ぶうとする。

しかし、小娘が適当な言い訳を出して断ってしまうのだ。明らかに用事がなくとも。

小娘の寝言や、影で飛び交う噂話から判断するに、どうやら以前木乃香が川で溺れた時に、小娘が助けることができなかつたらしい。

その体験から、普通に接することに罪悪感を抱いている、といったところか。

（馬鹿かお前は……）

気がつかないのか？

お前が誘いを断る度に、木乃香が悲しそうな顔をしていることに。

最近では、お前に話しかけることにすら勇気を振り絞っていることに。

お前のその態度が、何よりも木乃香の心を傷つけていることに。

「あ、またあの幽霊が出てきた」

「いやあああああああああー!!」

今日こうして一緒に映画を見ることも、木乃香が強引に約束を取り付けたからだ。

周りの大人達の話盗み聞くに、どうやら木乃香は転校を控えているらしい。

その前にできるだけ、たくさんの思い出を作りたいという考えの現れなのだろう。

「もう勘弁してえなああああああー!!」

「うふふ、怯えるせつちゃんもかわえーな」

……多少、趣味が歪んでいるかもしれないが。

「すう……すう……」

《……暑い》

現在、俺は寝ている小娘に抱き枕のようにしがみつかれていた。

別に、寝ている時に何かに抱きつく癖があっても俺は気にしないが、その対象が刀とあつては流石に呆れざるをえない。

とつか、そんな所を誰かに見られたらどうするつもりだ、この小娘は。

《ったく、布団を蹴飛ばすな。腹を冷やすぞ》

「うっん……」

俺の忠告を右から左に聞き流し、小娘は寝返りをうつ。

俺の声は、誰にも届かない。

禁術とされる鬼道を使ったことにより、体の全てが消失。

魂だけギリギリ残ったものの、意識があるだけで何もできやしない。

刀を自分で動かすことなどできないし、ましてや声すら出せない。

今の俺は、正しく抜け殻だ。

力は無いし、理想も叶えてしまった。

もう俺には人を救う力など残ってはいないのに、どうして意識だけ残ってしまったのかと、考えることもあった。

「ぐへひ……むじや……」

そんな考えが変わってきたのは、つい最近のこと。

（もう、この小娘が刀を託されてから三年か……）

どちらかというと、短かったと思える。

この小娘の起こす行動にはハラハラさせられっぱなしだった。

神鳴流の修行は苦しい。

基礎訓練をしている風景を眺めては、いつ諦めるのかとボンヤリ考えていた。

しかし、コイツは耐えた。

大の大人ですら音を上げるような苦行にもついていった。

その光景を見て、頑張れ、と思うようになったのはいつ頃だっただろうか。

過去に思いを馳せていると、急に小娘が苦しそうな声を上げた。

「この、ちゃん……」

《……》

きっと、木乃香を助けられなかった時のことを夢に見ているのだろう。

寝息は乱れ、顔は苦渋に染まっていく。

見ている方が苦しくなるような表情だった。

だが、

「次は……絶対守るから……」

《……》

思わずため息をつく。

もしも俺に口が残っていたならば、きっと苦笑が浮かんでいただろう。

《まったくコイツは……》

どろどろしていても、放っておけないのかね。

俺の意識が残った理由。

それはまだ分からない。

しかしその鍵は、ひょっとしたらこの小娘が握っているのかもしれないと、俺は思った。

「さむいさむいさむい」



外伝四（後書き）

文がグダグダ……

少し更新に間が開くかもしれません。

## 第三話（前書き）

戦闘シーンですが……すみません、それまでいくつか話を挟みそうです。

## 第三話

《君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ！》

大和の詠唱が、糸<sup>パス</sup>を通じて刹那の頭に響いた。

刹那は緊張を深呼吸で誤魔化す。

これから行う行為はタイミングが命だ。その一瞬を逃す訳にはいかない。

《焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ！》

今だ、小娘！

手に持った刀、『大和』から意思が流れ込む。

刹那は自身の出せる最大限の気を刀に叩き込み、叫んだ。

「破道の三十一 赤火砲！」

緋色に染まった刀身から、勢い良く気弾が飛び出す。

凄まじい速度で射出されたそれは、赤い残光の尾を引いて滝に直撃。

一瞬で大量の水を蒸発させた。

「できた……」

《まあこんなもんか》

「す、凄いです大和さん！ ウチが三十番台の鬼道を使えるなんて、感動しました！」

大和と刹那が初めて会話した日から三日。

現在、二人はいつもの修行場所で『大和』の能力を検証していた。

《使えたって言っても、俺が詠唱やらなんやらを全て肩代わりして  
でだろ。お前は気を消費しただけだろうが》

「それでもです！」

《……まあいいが、最終的にはお前だけで鬼道を使えるようになって  
もらうぞ》

「ええ！？　そ、そんな！」

《確かに俺が詠唱を引き受けることは可能だが、常に俺がお前の側  
にいるとは限らない。それにお前自身が鬼道を理解すれば、威力を  
上げたり気の消費を減らすことにも繋がる》

「うっ……詠唱がややこしくて覚えられません……」

《十分で覚えろ》

「そんなぁ……」

この三日間、大和は刹那の剣の指導をする傍ら、自分にどこまでの  
力があるかを調べていた。

刀と化し、戦闘力は激減してしまっただが、敵がそれを考慮してくれ  
るはずがない。

そして今の刹那では木乃香を守るところか、足手纏いになるのは明白だ。

今の自分にはどれだけの手札があるか、それを確かめることは最優先事項である。

(鬼道は小娘の気を流用すれば使える。だが今の小娘の気の量じゃ心もとない。クソっ、俺が自分で気を生成できたなら……)

現在の大和は自らで気を生み出すことができない。

生命力の源たる身体が存在しないのだから当然だった。

しかし、大和の戦闘方法のほとんどが気に依存している。

事実上、今の大和が単独で戦うのは不可能だった。

(だが、このままの小娘で通用するほど甘くはない。残る可能性と  
言えば斬魄刀だけだが……)

「あ、あの、大和さん。一応覚えられたと思うんですけど」

《ん、ああ。ならやってみせろ》

「あんなのやれと言われても……」

《いきなりさっきほどの威力は求めていない。まずは照明に使える

ほどの球体をイメージしろ》

「は、はいっ」

刹那は目を閉じ、大きく深呼吸する。

そして息を吸い込んだ瞬間、目を開けて叫んだ。

「君臨者よ！ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠しゅ者よ  
」！

《……》

「あ、あれ？」

《……まずは、滑舌の訓練が必要か》

《この場所は、何年経っても変わらないんだな》

「え？」

休憩のために、河原の石に座り込む刹那に大和の声が届く。

「ひょっとして、大和さんもこの場所で修行したことがあるんですか？」

《ん……まあな》

滝と川、河原と森。

記憶の中にある景色とほとんど変わらない。

仲間達と共に修行し、共に遊んだ場所のままだった。

刀子と初めて出会った場所でもあるこの地を、感慨深く眺める。

《もう十数年も昔の話だ。お前が気にすることじゃない》

「……………」

《どうした？》

「あ、あのっ」

刹那は何かを決意するような顔を見ると、大和に向かって声を張り上げた。

「大和さんの昔のことを、聞かせてはもらえませんか!？」

《……………急に何だよ》

「ウチはもっと貴方のことを知りたいんです! だってウチは大和さんのこと何も知らんし、精々知ってることといたら長の友達だったことぐらいしか……………」

どんどん声が小さくなっていく刹那。

「そ、それに大和さんがウチのことなんでも知ってるのに、不公平やないですか!」

《それが本音か》

「え？ あ、いや、その」

《それに、テンパると京都弁になるのも相変わらずだな》

「ええ！？ ウチ、またやってもうたん！？」

《ほら見る》

「あ……」

刹那は恥ずかしそうに顔を下に向ける。

それを見た大和はため息を一つ。

《別に隠すつもりもない。何が聞きたいんだ》

「え……聞いてもええんですか？」

《構わないと言っている》

「なら、えつと……あれ、ウチ何を聞こうとしてたんやっけ」

《……》

視線を感じずとも、大和の雰囲気察することはできるようで、刹那は焦る。



《なんか、前にもこんなアクションあったな》

《へえ……関西では俺はそんな扱いになってんのか》

「ま、まさか憧れの英雄に会えるなんて……」

トリップしている刹那を横目に、大和は考えを巡らす。

（脱走した裏切り者とするより、英雄に祭り上げることによって五

木家の地位向上を図ったか。あのジジイの企みそんな手だ)

《それにしても小娘。五木元蔵が死去したという話は本当か?》

「あ、はい。確か十年ほど昔のことだったはずですけど」

《……そうか》

五木元蔵。

かつて大和を戦場へと送り出した張本人。

少なくとも好いてはいなかった。

大和の生き方を決めつけ、刀子を人質にとり、人を殺すことを強いた。

だが……憎んでいるかと言われれば、返答に迷う。

元蔵は家の五木家の地位を上げることには興味を示さなかった。

幼い大和が折り紙の鶴を元蔵にあげた時も、結局は翌日のゴミ箱に入っていたのを見つけた。

大和が戦闘に類い稀な才能を見せると、元蔵は初めて笑顔を作ったが、恐らくはその笑顔の裏で大和の力をどう利用しようか考えていたのだろう。

何が元蔵をそこまで駆り立てたのか、大和は知らない。

理由を知ったところで過去の事実は消えないし、大和も許す気はない。

ただ、

(一度だけでも、本心で話し合いたかったな……)

奇妙な虚無感と共に、大和はそう思った。

「大和さん？」

《ん、どうした》

「いえ……なんだか、その、悲しいという思いが伝わってきたよう  
な……」

《……悲しい？》

「はい」

《そうか……悲しい、か》

そうか、と大和はもう一度呟く。

それから数分は、二人とも言葉を発しなかった。

沈黙を滝の音が流していく。

その日、大和は肉親を亡くしたことを知り、悲しみの感情を知  
った。

## 第四話（前書き）

超説明回。

独自設定山盛りです。

初めて予約投稿をしました。

## 第四話

「お願いします！ 私に斬魄刀を教えてください！」

《……はあ？》

大和の素性を知った刹那は、刀を相手に土下座するという宗教じみた行為をしていた。

まるで祭壇のように岩の上に置かれている大和としては戸惑うしかない。

《おい小娘、いきなりどうした》

「歴史の長い五木家の中で、最強と言われる大和さんに斬魄刀を教わることができれば、木乃香お嬢様をお守りすることも可能と思いました！」

不退転の覚悟を決めた瞳で大和を見上げる。

今の刹那の力では、精々野生の獣を相手にすることができらぐらいだ。

木乃香を狙う暗殺者はおるか、そこらの見習いにすら勝てるか疑問である。

しかし、あの五木大和から直々に斬魄刀を学ぶことができれば、今の自分でもある程度は通用するかもしれない。

刹那はそう考えた。

「斬魄刀戦術は五木家の秘伝であることを承知の上で、お願いします。私にはもう、これしか……」

そう言つて、刹那はより一層深く頭を下げる。

《……とりあえず頭を上げる。そんな調子じゃ話もできん》

「は、はいっ」

刹那が正座の形になったことを確認して、大和は話し出す。

《まず誤解の無いように言っておくが……斬魄刀はお前が思っているほど使い勝手のいいものじゃない》

「え？」

《斬魄刀を使用するには、まず精神世界で本体を屈服させる必要がある。それだけでも並の人間では一苦労だ。しかも、戦闘時の能力は斬魄刀の機嫌によって左右される》

「斬魄刀の機嫌……ですか？」

「ああ。斬魄刀には意思があり、機嫌もある。ヤツらが使い手に同調しなければ戦闘能力は大きく落ちるんだよ」

刹那は初めて聞く斬魄刀の秘密に驚いた。

関西の人間が抱く斬魄刀のイメージといえば、その多様性と攻撃力だ。

直接的に攻撃する斬魄刀もあれば、火や水といった自然現象を操るものも存在する。

そしてそれらの殆どが一般的な術者達よりも高い戦闘力を持っているのだ。

斬魄刀こそが関西において最強の戦闘方法だ、という意見も少なくない。

しかし、現実的にはそんなことはなかったりする。

斬魄刀は持ち主を選ぶ。

たとえ斬魄刀を屈服させるほどの実力があろうと、本体に気に入らなければ力は半減する。

無論、気に入られていれば限界以上に力を引き出すことも可能だが、そんな人間は滅多にいない。

基本的に斬魄刀の精神は捻くれており、歪んだ人間を好むという性質があるのだ。

反対に、神鳴流ほど安定して戦える戦術はない。

これが斬魄刀の使い手が少なく、そして神鳴流が広く伝わっている理由だ。

大和はそれらの理由を刹那に説明する。

《確かに斬魄刀は強いが、それ以上に不安定だ。今のお前には神鳴流の方が相応しいはず》

「そうですか……」

《逆に、適合率が高ければ限界以上に力を貸してくれることもあるんだけどな。そんなヤツは見たことがない》

大和の言葉を聞き、刹那は顔を俯ける。

木乃香を守るためには力が必要だが、自分の力を制御できない護衛など百害あって一利なしだ。

大和のように完璧に斬魄刀を操るようになるまで、どのぐらいの時



五木大和と言えば、歴代で最も優れた斬魄刀の使い手として有名だ。その大和が斬魄刀に嫌われているという情報は刹那に大きい衝撃を与えた。

《あいつらは基本的に快樂主義者だからな。人助けのために力を振るう俺は、面白みに欠けるんだとよ》

「でも、大和さんは自由自在に斬魄刀を使っていた、って……」

《それは俺が斬魄刀を屈服させて、無理やり力を引き出していただけだ。本当に適合率が高ければ身に付けている装束が変化したりする。一回も経験したことはないが》

「ウチの英雄に対するイメージが崩れていきます……」

《真実なんてそんなもんだ》

憧れの英雄の思わぬ真実を知り、刹那はへこんだ。

《符を使うという手もあるが……近衛家のような魔力も能力も無いお前では、補助に使うのが関の山か》

「近衛家の能力、ですか？ このちゃ……お嬢様に凄まじい魔力があるのを知っていますが、それ以外にも何かあるのですか？」

《ああ。近衛家は先天的に魔力が多い家系だが、それだけじゃない。近衛の血は『招喚』に特化している》

「『招喚』……？」

《式神に使う、いわゆる鬼などの異形を呼び寄せやすい体質だということだ。近衛家の血を使えば、それこそ『リョウメンスクナ』でも呼び出すことができるだろう》

近衛家の血には豊富な魔力の他に、異形をこの世につなぎ止める力を持っている。

一般的な術者が鬼を呼び出すのに必要な魔力を百とすると、近衛の者であれば一の魔力で済む。

勿論、呼び出すことだけで、使役するとなればまた別の話なのだが。

しかし、その血族にのみ伝わる力は青山家とも五木家とも一線を画する。

神鳴流は、本当は近衛家を守護するために生まれたという説があるほどに。

「あの、質問があります」

《何だ》

「『リヨウメンスクナ』って、なんですか？」

《……とても強い鬼、とても覚えておけ》

脱線した話を戻すために、大和は一つ咳払い。

《そんなわけで、地力を上げるには神鳴流が最適なんだが……俺は神鳴流を会得していない》

「え、そうなんですか？」

数多い大和の逸話の中で、その圧倒的なまでの戦闘センスが挙げられる。

剣術にせよ鬼道にせよ、初歩ならば見るだけで習得してしまう、というものだ。

そしてそれは事実であり、大和も斬岩剣くらいなら余裕で使える。

しかし、それはあくまでも我流。洗練された型ではない。

大和の力を知った青山家はその才能を恐れ、神鳴流を習うことを禁じたのだ。

《あとは自分達の土俵である神鳴流で抜かされるのを恐れたとか、そんなんだろ。メンツの問題ってやつだ》

「なるほど」

《で、お前に神鳴流を教えるには、他の誰かに頼む必要があるわけだが……今のお前の立場じゃ、それもままならんか》

「うっ……すみません」

《責めてないっての。誰かお前に神鳴流を教えてくださいそうな人に心当たりは無いのか？》

大和の問いに、刹那は必死に考える。

「長……はやっぱりダメですよね」

《そりゃ、あの人も忙しいだろうしな》

「あ、そういえば」

《心当たりがあるのか？》

「長がこの前言ってたのを思い出しました。つい最近になって、長期の出張から帰ってきた神鳴流の人にお嬢様の護衛をしてもらっている、と」

《へえ……強いのか？》

「自分がかんりの信用を置いている、とも話していました」

《それなら試してみる価値はあるな。そいつの名前は？》

「確か、葛葉刀子っていう人だったはずですよ」

## 第四話（後書き）

次こそ刀子さんのターンのはず。

第五話（前書き）

シリアスが難しい……

## 第五話

あの人が消えてから、どれ程の時間が過ぎただろうか。

私は未だに彼を待ち続けている。

鶴子も素子ちゃんも、あの場所には集まらなくなってしまった。

あの日々を思い出すのが辛いだろう。私だってそうだ。

でも私は今でもあの場所に通っている。

そして待ち続けるのだ。

彼が滝の上から声をかけてくるのを。

『こんな所でどうしたの？』と、いつもの声で呼びかけてくるのを。

でも、彼は帰ってこなかった。

代わりに帰ってきたのは、一本の刀だけ。

その刀を見た瞬間、彼にあの場所で言われたことを思い出した。

僕が英雄になったら、刀子ちゃんも守ってみせるよ。

……嘘つき。

刹那と大和は、現在刀子が留まっているという近衛の屋敷まで来ていた。

護衛という任務の関係上、木乃香の近くに控えているのだろう。

埃一つ無い廊下を歩きながら、刹那は大和に問いかける。

「大和さん、さっきから何も喋ってないですけど……どうかしましたか？」

《……いや、何でもない》

「……」

《……》

あの場所で葛葉刀子の名前を出してから、大和はずっとこの調子である。

幼い刹那にも、大和の様子がおかしいということは察せられた。

刹那は何故こうなったのか、自分なりの推論を組み立てていく。

（葛葉刀子っていう人の話になってから大和さんの様子がおかしくなったから……やっぱり知り合いなんやろうな……）

葛葉刀子という人物は長からの信頼も厚いらしい。

ということとは、長の友人である大和さんとも知り合いであってもおかしくない。

そこまでは刹那にもわかったが、問題はどっいつた知り合いであるか、ということだ。

(……恋人、とかやったりするんやるか)

刹那にはその推測が一番的を得ているように思えた。

というより、それ以外思いつかない。

無意識に腰に差した『大和』を強く握る。

結局二人とも終始無言のまま、刀子がいるという部屋の前にたどり着いた。

刹那は大きく深呼吸を一つ。

「失礼します」

「 ぶっぞ」

短いやり取りの後、刹那はゆっくりと襖を開ける。

その部屋の中で、葛葉刀子は正座をして瞑目していた。

《……っ》

「お入りなさい」

「は、はいっ」

部屋の中に入り、襖を閉める。

部屋の中に私物はほとんどなく、生活感が感じられなかった。

刀子の物とわかるものは、正座している本人の横に置いてある一本の刀だけ。

刹那が部屋に満ちた雰囲気と吞まれていると、刀子がゆっくりと目を見開いた。

「桜咲刹那、ですね」

「あ、はい」

「長から話は聞いています。そこへお座りなさい」

刀子は刹那を対面の座布団に促す。

刹那は緊張でカチコチになりながらも、刀子の前に座った。

「は、初めまして、桜咲刹那と申します。えっと、この度は葛葉さ

んにお願いがあつて参りました」

刹那は拙い敬語を使って必死に話す。

刀子はそれを身動き一つすることなく聞いていた。

「……なるほど、私に神鳴流を教わりたいと、そういうことですね？」

「はいっ、お願いします！」

刀子は再び目を閉じる。

しばらく二人の間に沈黙が下りた。

「……基礎訓練は終えているのですか？」

「え、あ、はい」

「ならば、お嬢様の護衛に差支えの無い範囲でという条件で、指導  
しましょう」

「本当ですか！？」

刹那にその条件に対して不満はない。

というより、自分から頼もつとしていたぐらいだ。

修行をつけてもらえるのはありがたいが、それで木乃香の護衛がおろそかになつては本末転倒である。

「ありがとうございます！」

「いえ」

頭を深く下げる刹那と、あまり興味の無さそうな刀子の姿は対照的だった。

修行の同意を得たことに喜ぶ刹那だったが、ここでさっきの疑問が再び浮かび上がる。

それは、目の前の麗人と大和との関係性。

立ち居振る舞いや（立っていないが）、雰囲気からでも刀子が強いということとはわかる。

さらに言えば、刀子は刹那が今まで見た中でも指折りの美しさだ。とても長と同年代とは思えない。

そのような人物とどういった関係なのか、刹那の中に強い興味が湧いた。

しかし、いざ聞こうとしてふと気付く。

聞いて、答えてもらったとして、そこからどうする？

もし恋人だったと答えられたならば、それは大和を傷つけるだけではないのか？

刹那の頭の中でグルグルと疑問が渦巻く。

聞くべきか、聞かざるべきか、二つの間をさ迷う。

そして、気が付けば刹那は

「あ

口を開き、

「この刀の前の持ち主と、どういったご関係なのですか？」

目の前の女性に聞いていた。

「……」

《……》

刀子は答えない。

大和もまた、何も語らない。

ただ、刀子の返事を待っていることは察せられた。

しばらくの間、沈黙が場を支配する。

そして、刀子はおもむろに口を開き

「　　そんな刀、知りません」

その表情を見て、刹那は理解する。

ああ、やはり、この人と大和さんは親しい間柄だったのだと。

なぜならば、問いに答える時の刀子の表情が、鳥族の里を追放された時の刹那の表情とまったく一緒だったから。

絶望に打ちのめされ、救いなどどこにも無いと告げられた表情。

全てを諦めた表情。

救いを諦めた表情。

それなのに、心のどこかで希望を捨てきれない表情。

その全ての表情に、刹那は覚えがあった。

《小娘……もういい……》

大和の絞り出すような声。

それを聞いて刹那はハツとした。

「 申し訳、ありません」

失礼しましたと言って、刹那は刀子の私室を後にする。

部屋の襖を閉める際に見えた、刀子の顔。

まるで、泣き出しそうな子供の顔。

それが、深く頭にこびりついて離れなかった。

廊下を引き返しながら、刹那は謝り続けた。

「大和さん……すみません、私……」

《いいんだ、気にするな》

悪いのは俺だから、という言葉を言いかけてやめる。

刀子があればほど苦しんでいたことに気が付けなかった自分が言っている台詞ではない。

自分がこの場所を去ってから、もう二十年近く時が流れている。

（もう、とっくに忘れられていると思っていた……）

別れすら告げずに消えた男のことなど。

一本の刀だけを残して、帰ってこなかった男のことなど。

もう既に、忘れ去っているものばかり思っていた。

自分の過去に後悔があるわけではない。

全てを失うことを覚悟して、あの鬼道を使ったのだ。

もしもあの時に戻れるとしても、また同じ選択をするだろう。

自らの夢を叶えるために。

でも、部屋を出る際の刀子の表情が、大和の脳裏に焼き付いて消えなかった

「まったく、戦力を整えるのに、これほどの時間がかかるとはな…  
…そのせいで葛葉刀子が帰還してしまっただではないか」

「まあまあ、いいじゃないですか狩谷さん。彼女の相手は僕がするんですから」

「勝てる勝てないの問題ではない。できる限り不確定要素を増やしたくないのだ」

「まったく……そういう所はシビアですよね、狩谷さんって。強い

くせに」

「お前が大雑把なだけだろう」

「ごもつとも」

京都には多数の派閥がある。

それらの派閥は主に、関東との関係をどうするか、という方針の違いから反発しあっている。

現在は詠春の属する『穏健派』が主流であるが、もちろんその反対も存在する。

それがいわゆる『強硬派』と呼ばれる者達だ。

そして、その『強硬派』の一派が使用している集会所にて、二人の男が向かい合っている。

一人は三、四十代の厳めしい顔をした男。

そしてもう一人は二十代半ばの優男である。

狩谷と呼ばれた厳めしい顔をした男は、優男に向かって告げる。

「本当に信じていいのだろうか？ お前がどれだけ葛葉刀子を引き

つけられるかが、今回の謀反の肝なのだぞ」

「酷いなあ。僕は負けることが前提なんですか？」

優男は少年のように笑う。

そのルックスと相まって、非常に様になる笑顔だった。

だが、

「大丈夫ですよ。僕はあの女を髑り殺すために、今回の謀反に参加するんですから」

優男の雰囲気が一変する。

女性を虜をするような笑顔は、獲物をどうやって狩るか、という残酷な笑顔に。

「あんなカスみたいな家の出のくせして斬魄刀を使う、あの女は許せないんですね。だから僕の心配は無用。手出しも無用です」

「……そうか」

「狩谷さんこそ失敗しないでくださいよ？ 貴方が長の娘を手に入  
れなければ全ては水の泡です。彼女さえ拉致してしまえば、あの甘  
い長はこちらの言うがままでしょうし」

「言われるまでもない」

狩谷と呼ばれた男は踵を返し、集会所の外へと向かう。

優男もそれに追従した。

「今回の謀反、必ず成功させるぞ。『五木葉一』」

「ははは、相変わらず狩谷さんは硬いなあ。そんなに心配しなくて  
も大丈夫ですって」

五木の名を冠する男は笑う。

笑顔の端に、狂気を乗せて。

第五話（後書き）

そろそろ戦闘の予感。

## 第六話

「へー、ここがせつちゃんの修行してる場所なんやー。スゴイ滝やなー」

「このちゃ……お嬢様、あんまり水辺には近づかないでください。昔のようなことがあれば、私は……」

「大丈夫やえ、ここから眺めるだけやから」

その日、いつもの修行場所には近衛木乃香の姿があった。

現在、木乃香は大きめの岩の上に座り、周囲の風景を物珍しげに見ている。

刹那はそんな木乃香をハラハラしながら見守っていた。

どうしてこんな状況になっているかと言うと、それは今朝の朝食後にまで遡る。

いつものように修行に向かおうとした刹那の前に、木乃香が現れた。

話を聞けば、刹那の修行風景が見たいと言う。

刹那は修行は遊びではない、と言って断ろうとするのだが、木乃香も譲らなかった。

木乃香は二週間後、麻帆良の小学校に転校する。

日本でも有数の霊地であり、関東魔法協会の本拠地でもある場所だ。祖父である近衛近右衛門に預けることで木乃香の身の安全を守るという目的もあるが、どちらかという人質としての意味合いの方が強い。

かつて大和が西洋魔法使いを打ち破ったとはいえ、その大和も今は存在せず、そもそも本国からいくらでも兵士の補給は可能だ。

まともに戦えば、関西が負けるのは目に見えている。

人質として麻帆良へと行ってしまえば、そう簡単には京都に帰れなくなってしまう。

それを木乃香は周りの雰囲気から察したようで、最近は刹那に特に構うようになつた。

麻帆良に行く前に、刹那との思い出を作っておきたいのだろう。断ろうとすれば涙目になる始末だ。

そして刹那に逃げ道はなく、結局同行を許してしまった。

(すぐ近くに刀子も隠れているし、問題はないか……二人はまったく気づいていないようだ)

「それじゃあ今から素振りをしますけど、その間は危ないので近寄らないで下さいね」

「うん、わかっとるよ」

岩の上に座る木乃香は、初めて見る刹那の修行風景に目を輝かせている。

その期待の視線を受けている刹那は居心地が悪そうだが。

《小娘、木乃香を意識しすぎだ。体に力が入りすぎている》

「は、はい」

「どうしたん、せつちゃん？」

「え？ あー、えつと、なんでもないです！」

《……忘れていたが、人のいるところで俺に話しかけたら痛い子になるぞ》

(先に言うてくださいいっ)

これは念話も習得させる必要があるな、と大和は思った。

「周囲に異常は無し……と。桜咲も剣の才はあるようですが、私にまったく気づかないというのは少し問題ですね」

葛葉刀子は滝の上から刹那と木乃香を見下ろしていた。

それはもちろん木乃香の護衛のためだ。

あまり縛られるのを好まない木乃香は護衛の人間を撒くことが度々あり、こうして隠れるように見守っているのである。

とはいえ、友達と遊ぶ時に大人が近くにいたら、誰でも嫌だろうが。

「……それにしても、この場所で修行していたとは……」

刀子は滝の下にいる二人に目を向ける。

一生懸命に剣を振る刹那と、それを見守る木乃香。

その二人の姿は、かつての自分達に重なって

刀子はそこで思考を打ち切る。

自分に襲いかかる様々な負の感情を、我慢するのではなく、考えな  
いようにする。

それこそが刀子が過去を乗り越切るための、唯一の方法だった。

(この場所には、あまり来たくない……)

刀子は近くの木に背をもたれさせ、ため息をついた。

ここに来ると、自分が何を失ったのかをはっきりと突きつけられる。

だから大和が………ことを知ってからは、一度もここには来なくな  
った。

(もつやめよう………彼のことを考えるのは………)

刀子は思考を切り替えて、二人を見張る作業に戻った。

刹那は拙いながらも、一通りの型を木乃香に披露しようとしているようだった。

もちろん刀子から見ればまだまだ隙だらけではあるものの、刹那の年齢を考えれば十分だろう。

詠春に『少しでいいから気にかけてやってくれないか』と言われたので、取り敢えず稽古を見るつもりではいたのだが、これは想像以上に教えがいがありそうだ。

(ふむ……強いていうならば、少し重心が高いのが気になりますね……)

刹那の修行をつけることになれば、そこを注意しようと考ええる。

だが、ここで刀子の予想を裏切る光景が目に入った。

(重心が下がった……?)

眼下にいる刹那の剣を振る様子が、急に改善されたのだ。

偶然かと思い、しばらく刹那を見ていたのだが、刹那は明らかに身

体の重心を意識して剣を振っている。

まるで、誰かの忠告を聞いたかのように。

疑問に思う刀子だったが、それよりも優先すべき事項が出現した。

誰かがこの場所に近づいている。

気を使って移動しているのか、一般人に出せるスピードではない。

自らに与えられた役割を鑑みて、即座に刀子は戦闘体勢に入った。

出現した気配は真っ直ぐに刀子に向かってきている。

気を隠す様子がないことから木乃香を狙う暗殺者の線は薄いですが、それでも油断はできない。

数分後、木々の奥から一人分の人影が現れた。

刀子は身構えるが、その人影は両手をひらひらさせながら歩いてくる。

敵対心の無いことを示す仕草だが、刀子は油断をしない。不意打ち

をしてくる可能性もある。

だが、気軽に挨拶をしてきたのは流石に予想外だった。

「やあどうも、葛葉刀子さんですよね？」

その男を見て、刀子は訝しげに眉を潜めた。

「貴方は……五木、葉一さん？」

刀子の前に現れた優男の名前は、五木葉一。

大和の従兄弟に当たり、斬魄刀を操る術に長け、将来を期待されている男だ。

人当たりも良いので、人望も厚い。

まさに好青年を絵に書いたような男だった。

ただ、常に浮かべている微笑が不吉なものに思え、刀子はこれまで関わらないようにしていたのだが。

「なぜこんな場所にいるのですか。ここは立ち入り禁止区域ですよ」

「ははは、それを言ったら葛葉さんもじゃないですか」

「私は木乃香お嬢様の護衛としてここにいます。それよりも質問に答えて下さい」

「うーん、つれないなあ……僕何か葛葉さんに嫌われるようなことしました？」

「いいから、質問に答えなさい」

詰問する刀子に対し、葉一は余裕の態度を崩さない。

「本題に入りますが、僕は長からの伝言を預かってきたんですよ」

「長からの伝言……？」

「ええ、これからは僕が木乃香お嬢様の護衛を務めます。貴方は至急本殿にまで戻るように」と

その言葉を聞いて、刀子は耳を疑った。

「そのような話、私は一言も聞いておりませんが」

「僕にそう言われても困るんですけどね。緊急事態のようでしたし、とにかくここは僕に任せて、早く戻ったほうがいいですよ？」

そう言われて、刀子は少しだけ考える。

しかし、すぐに結論は出た。

「いえ、私はここに残ります」

「……へえ、長の命令に背くのですか？」

「なにか緊急事態が起きているのであれば、尚更お嬢様の側を離れるわけにいきません」

以前、刀子が長期の出張任務から帰ってきた時、詠春は言ったのだ。

刀子君がいる間は、一番信頼できる君に木乃香を任せたい、と。

その詠春が、木乃香を別の人間に任せて帰還せよ、などと言うのは考えにくい。

詠春の言葉とこの得体のしれない男の言葉、どちらを信じるかと聞かれれば、言うまでもなく前者だ。

その刀子の様子を見た葉一は苦笑する。

「僕の言葉は信じられませんか？」

「長の言葉と比べれば」

「ひどいなあ」

葉一はさして気にした風でもなく笑う。

そして、おもむろに懐から一通の封書を取り出した。

「そう言われると思い、僕は長から直筆の手紙を預かってきています」

「手紙？」

「ええ。これなら貴方も納得して下さると思います」

葉一は封書を刀子に差し出す。

「とりあえず、これを読んでから判断してもいいのでは？」

葉一の言うことにも一利ある。

訝しみながらもそれを受け取り、刀子は開封した。

中には一枚の紙が入っており、刀子はそれを取り出して読もうとする。

しかし、紙を取り出した瞬間、絶句した。

中に入っていた紙に書かれていたのは詠春の文字ではなく、五芒星と奇怪な文字の羅列。

それは刀子も何度か見たことがある代物。

転移魔法符！

咄嗟に手放そうとするが、もう既に手遅れ。

封書から符を出した時から、発光を始めている。

自分の迂闊さを恨むと同時に、刀子はその場から飛ばされた。

「今頃、木乃香は刹那君と遊んでいるのだろうか……」

近衛詠春は自室で書類にサインをしながら、そうぼやいた。

正座している詠春の前にある机には、既にサインが書かれた書類が山のように積み上がっている。

仕事が一段落し、気が緩んだ詠春は愛娘のことを考えた。

詠春は、木乃香のことを目に入れても痛くないほどに溺愛している。だから、それ故に迷う。

木乃香に魔法の存在を教えるか否かを。

関西呪術協会の長の一人娘である木乃香の立場は、いつまでも表の世界で暮らすことを許さないだろう。

それ以前に、木乃香は生まれ持った魔力が膨大すぎる。

近衛家の血に籠められた性質もまた、木乃香が狙われる要素となる。

本当は、今すぐにも魔法のことを教えるべきなのだ。

いずれこの世界のことを知るとしても、早くから修行をしていれば、

その分かなりのアドバンテージになる。

場当たりに魔法を知ることが非常に危険だ。

理性は早く魔法を教えるべきだ、と告げている。

しかし、親としての詠春は、木乃香に血生臭い世界など知ってほしくない。

幾度となく繰り返した自問自答。

そして、その問いに結論が出る前に、詠春が気付く。

「静かすぎる……？」

屋敷から音が消えていた。

詠春の部屋は近衛の屋敷の中でも奥まった場所にあるのだが、それにしても気配をまったく感じないというのは普段からしてありえない。

「この時間帯ならば、誰かが掃除でもしているはずだが……」

詠春は数秒考え、立ち上がる。

その際に、背中でボキボキと小気味いい音がして苦笑した。

自分の部屋を出て、少し歩く。

やはり誰とも出くわさなかった。

人の気配を探しながら歩き続けている内に、とうとう縁側にまでたどり着いた。

散歩がてら誰かを探してみるか、と考えて、詠春は外に出るためのスリッパを履く。

そして、上空からの殺気を感じてその場を飛び退くと同時に、

今までいた縁側が破壊された。

「っ、誰だッ！」

「お、これを避けるとは、やっぱり関西の長なだけあるやないか」

詠春は転がって体勢を立て直し、そして縁側を破壊したものを見て息を呑む。

そこにいたのは人としての姿を大きく逸脱した者。

いわゆる、鬼と呼ばれる者の姿だった。

「式神か!？」

「そついうこつちや。依頼主との契約につき、アンタを痛めつけさせてもらうで」

「誰の差し金だ！」

「そりゃ喋ることはできんわ。ワイらもただ雇われただけやしなあ」

鬼はそう嘯くが、式神が使われている時点で十中八九、関西呪術協会  
の誰かだろう。

それならば総本山の結界に反応しなかったのも頷ける。

そう、これは協会内の人間による謀反なのだ。

詠春は懐から一枚の符を取り出し、破いた。

直ぐ側に空間の歪みが生じ、そこに手を突っ込んで斬月を抜き取る。

あまりに巨大すぎる斬月を持ち運ぶための術だ。

斬月を鬼に向けて構える。

「貴様のような鬼一体で私を討ち取るうとは、舐められたものだ」

「いや、アンタが強いこと知ってるで？ サムライマスター言ったら有名やし」

「はは、まさか鬼に評価される時が来ようとは」

十数年も書類仕事を続け、詠春の腕は鈍りきっている。

しかし、鬼一匹を倒すことぐらい造作もない。

詠春は斬月で鬼を両断しようとして一步を踏み出し、そこで踏みとどまった。

この鬼の余裕はなんだ？

ニヤニヤと笑う鬼。

それを見て、詠春は冷静になる。

そして思い出すのは先程の会話。

ワイらもただ雇われただけやしなあ。

「まさか……」

「察しのええ人間やな」

詠春は鬼から視線をずらし、屋敷の屋根を見る。

そこにいたのは、鬼の群れ、いや、軍勢と呼べるほどの鬼の集団だった。

「本当は一对多ってのは気に食わんけどな。依頼主からの命令やら勘弁してくれや」

視界を埋めつくさんとするほどの鬼達を見て、詠春は思う。

無事でいてくれ、木乃香……！

「せつちゃんすごい！ さっきのビュオオってやつ、もう一回やって！」

「は、はいっ！」

《……はあ》

一通り型を終えた刹那を待っていたのは、木乃香からの溢れんばかりの賞賛だった。

三年前、川で溺れる事故があつてから木乃香を避けてきたものの、大好きであることには変わりがない。

木乃香に褒められて、刹那の顔は緩みっぱなしだった。

大和はそんな刹那を見てため息をつく。

《おい小娘、木乃香は一般人だぞ。お前の動きが凄く見えるのは当然だ。それで気を良くしてどうする。第一、お前はさっきも言ったとおり重心の位置が……》

「えへへへ」

《……聞いちゃいねえし》

再びため息。

《……ま、落ち込んでるよりかはいくらかマシか》

刀子と会話をしてからというもの、刹那は大和によそよそしくなつた。

話しかけても上の空で、夜に込める気の通りも悪い。

本人は特に異常はないと言っているが、側で見ていると様子がおかしいのは明白だ。

(刀子と俺のこと、踏み込みすぎたと感じているのだろう……)

刹那の持つ白い翼。

それが原因で、刹那が鳥族の里でひどい迫害を受けてきたことは、大和も知っている。

そのトラウマから、今でも夜にうなされることも。

だが最近は大和になった方だ。

三年前、『大和』を手に入れたばかりの刹那はひどかった。

川で溺れた木乃香を助けられなかったという罪悪感からか、毎晩の

よつに悪夢に苛まれる日々。

見ているだけの大和ですら辛くなるほどの苦しみよう。

大和はうなされる刹那の頭を、撫でてやることもできなかった。

（あの時ほど、身体の無いこの身を呪った時はない）

刹那は対人関係にひどく敏感で、臆病だ。

それも過去を考えれば当然ではあるだろうが、自分と刀子の関係で刹那が苦しむ理由などどこにもない。

（今回はいい気分転換になったか……木乃香には感謝だな）

笑い合う二人を見て、大和はそう思う。

そして、この笑顔が曇ることの無いようにと、祈った。

しかし、その願いは容易く覆される。

大和がふと感じた違和感。

（刀子の気配が……消えた？）

立ち去った、というわけではない。

その場から唐突に消えてしまった、と大和の感覚は告げていた。

疑問に思った大和は自分の感覚を最大限に研ぎ澄ます。

大和が索敵範囲をどんどん広げていくが、刀子の気配は無い。

少なくともこの付近にはいないようだった。

その代わりに、自分達のすぐ近くで一つの気配が索敵に引っかかった。

その感覚を捉えた大和は息を呑む。

刹那の背後から、気配を殺した鬼が近づいている。

《小娘っ！！ 後ろだッ！！》

大和の声は悲鳴じみていた。

自分に察知されずにここまで接近した鬼は只者ではない。

そこらの式神とは一線を描す、明らかに戦闘慣れしている鬼だ。

そんな鬼が、刹那のすぐ後ろにまで忍び寄っている。

「え？」

だが、大和の忠告は遅すぎた。

次の瞬間に大和が見た光景、それは。

鬼の豪腕に跳ね飛ばされ、まるでオモチャのように宙を舞う刹那の姿だった。

第七話（前書き）

更新が遅くなって申し訳ありませんm（  
| |（  
m

とんでもなく難産だった……

## 第七話

木乃香はその光景を信じられなかった。

自分の目の前には、まるで空想の世界から飛び出してきたかのような赤鬼が立っている。

その身から溢れ出る威圧感、木乃香の体を竦ませ、その場から動くことを許さなかった。

身の丈は二メートルを優に越え、その両腕はそこらの女性のウエストよりも太い。

「まったく、狩谷の坊主め……こんな童達を襲えなどと、胸糞の悪くなるような命令をしょって」

その腕により、自らの大切な親友を跳ね飛ばしたことも含め、木乃香はこれを現実だと考えることができなかった

「っ、やってくれる！」

葛葉刀子は森の中で悪態をついた。

あの転移魔法符により飛ばされた場所は、木乃香達の居た場所から遥かに離れた森の中。

ここから全力で戻ったとしても十数分はかかるだろう。

刀子はあるな単純な手にひっかかった自分を殴りたかった。

「とにかく、急いで戻らねば……！」

木乃香達のいる方角へと走り出そうとする刀子。

だが、ついさつき見るはめになった転移魔法の光が、刀子の前方に突き刺さる。

「今更言うのもなんですけど、僕の言うことを最初から信じて本殿に戻ってしまったらどうしようとか考えていました」

光が消えた跡に残っていた人物。

それはもちろん、刀子をこの場所に飛ばした張本人。

「そうなつてしまえば、僕自身の手で貴方を切り刻めなくなつてしまいますから」

「五木、葉一つ……！」

刀子の前に現れた葉一は嗜虐的な笑みを見せる。

それは、普段浮かべている笑顔とはまるで正反対。

まさしく悪魔が乗り移ったような笑顔だった。

「ふ、ふふふ、あはあはははああはああ！　やっとこの時が来た！　この女を断罪できる日が！　僕がこの日をどれほど待ち焦がれたことか！」

葉一は心底嬉しそうに声を上げる。

その様子を見て、刀子は逆に冷静になった。

(落ち着け……相手のペースに乗せられてはいけない)

刀子は自分の中で優先順位をはっきりさせる。

無論、一番は木乃香の身の安全だ。

目の前の男との戦闘を避けることができればベストなのだが、ここは既に相手のフィールド。

刀子を先行させないための仕込みがあってもおかしくないし、まだ転移魔法符を持っている可能性もある。

つまり、ここで刀子の取るべき選択肢は。

(最短時間でこの男を撃破。その後にお嬢様達の下へ……!)

「うん、貴方の考えていることはなんとなく理解できるけど、そうはさせないよ?」

葉一は刀を抜き、刀子へと瞬動で迫る。

刀子も抜刀し、これを受け止めて鏢迫り合いに持ち込む。

双方の刀が擦れ合って、耳障りな音が周囲に拡散した。

「別に私が貴方にどう思われようと構いませんが、お嬢様に危害を加えるのであれば話は別。たとえ宗家の五木家でも手加減はいたしません」

「……そういう上からの態度が……ひどく気に障るんだよなあ!」

葉一は刀に力を込め、その反作用で後ろに下がる。

「斬魄刀は五木家だけのものだ! お前のような下賤の者が使うべきではない!」

「……それが貴方の本性ですか」

「ああそうさ。斬魄刀は選ばれた一族、五木家だけの物。それを凶

々しくも使うお前をどうやって殺そうかといつも考えていた！」

葉一の笑みが一層深くなる。

「色々考えたが やっぱり跪かせて殺すのがいちばんだな」

刀を構え、葉一は解弓を口にした。

「 面を上げる！ 侘助エ！」

その叫びと共に、葉一の刀が変化。

その刀身は中央部分から鉤状に折れ、とても人を斬るには適していない形状だった。

だが、それを見て刀子は警戒する。

斬魄刀の能力は直接攻撃型と鬼道型に大きく分けられる。

前者であれば攻撃手段を見抜くことも容易だが、後者であれば一見しても能力までは判明しない。

あの斬魄刀、侘助は明らかに後者に属するであろう。

（どのような能力かは知りませんが、出す前に終わらせればよいだけの話！）

時間がない現状も含め、刀子は押し切ることを決意。

先程とは逆に、今度は刀子から距離を詰める。

「くっ、お前らは大人しく神鳴流に縋っていればいいものをッ！」

刀子の剣は神鳴流の中でも特に速い。

打ち下ろし、袈裟斬り、斬り上げ、左薙ぎ、逆袈裟、刺突とありとあらゆる技を持って、葉一に迫る。

その一連の動きは暴風のようにでありながら、流れる水のように滑らかでもあった。

現に葉一は反撃どころか、体勢を立て直すことすらおぼつかない。

その刀の特殊な形状を利用して、受け流すのが精一杯だった。

「ええい、ちょこまかと鬱陶しい！」

「神鳴流奥義　斬岩剣！」

体勢を崩した葉一に、刀子は斬岩剣で追い打ちをかける。

葉一は咄嗟に侘助を体との間に滑り込ませるが、そんな不十分な防御では斬岩剣の勢いを殺しきれない。

自然、葉一は吹き飛び、数メートル滑空して木に叩きつけられた。

「がっ……はぁ……！」

肺の中の空気を全て吐き出し、葉一は呻き声をあげる。

力、速度、技量、経験。

それら全ての含めた戦闘能力の差は歴然だった。

そもそも刀子は第一線で戦っている、いわば叩き上げの剣士だ。

命の危機を何度もくぐり抜けてきた経験は刀子の大きな力である。

それに比べて、葉一は剣技こそ洗練されているが、実戦経験はほとんどない。

両者の違いは、剣の腕として如実に現れていた。

「命までは取りませんが……一、二ヶ月は動けないことを覚悟しなさい」

刀子は刃を返し、地面で蹲る葉一を峰打ちで気絶させんと近づいていく。

しかし、葉一から返ってきたのは嘲笑。

「……くっくく」

「……何が可笑しい？」

「あははははははははは！！　まだ気づかないのか！！　お前の負けだよ葛葉刀子！！！」

葉一がそう叫んだ瞬間、刀子の刀に異変が起こる。

（刀が、急に重く……！！？）

取り落としそうになった刀を咄嗟に持ち直す。

刀子の持つ刀は一般に野太刀と呼ばれるもので、その大きい形状に見合った重量を兼ね備えている。

しかし、それでも精々が一キロ前後であり、こんな異常な重さではない。

刀子の手にかかる感触からして、少なくとも百キロを超えている。

（となると、これがあの斬魄刀の能力か！）

「やっと気がついたようだね？　これが僕の斬魄刀、侘助の能力！　『斬りつけた物の重さを倍にする』だ！」

葉一は立ち上がり、刀を下段に構えている刀子を見て笑う。

「相手が重さに耐えかね、詫びるように自らの頭を差し出す。故に  
『侘助』」

「……貴方の性格に似合った、卑屈な能力ですね」

「ハッ、何とでも言いなよ。僕は侘助で貴方の刀を七回斬りつけた。貴方の野太刀の本来の重さが一キロだとすると、既に百二十八キロにまで達している！ そんな刀を振り回せるものか！」

「……」

黙り込んだ刀子を見て気をよくしたのか、葉一の口は止まらない。

まるで演説するような口調で語りだす。

「実にいい眺めだ！ 気に入らないヤツを這い蹲らせるのは何よりも素晴らしい！」

「……」

「この素晴らしい力は五木家にだけ許されている！ 分家のお前が使うべきではないんだよ！」

「……」

「そつだ、分家のくせに僕のことを無視しやがって！ 僕は五木家の中でも特別なんだ！ あの五木大和にだって引けをとらな……」

「少し、黙れ」

刀子はその刀を『片手で』持ち上げる。

「はははは……は？」

「この程度の能力で封じられるほど、神鳴流は甘くない」

葉一の勝ち誇った顔が固まった。

彼は目の前の光景が信じられない。

今まで自分の斬魄刀と戦った相手は、例外なく地を這いつくばっていたのに

「馬鹿な！ そんな重さの刀を片手で持てるはずがない！」

「そうですね。あと五、六回斬りつけられたら少し危なかったでしょうか」

葉一は口を開けたまま呆然とする。

刀子の言うことを信じるならば、彼女は数トンの重量にも耐えられることになる。

そんな人間が存在するのか？

「それと、重量が増すということは、一撃の威力が上がるといっ

とでもあるのですよ?」

刀子は葉一の方へ歩き出す。

百キ口を優に超す重量の刀を、苦もなく持って。

「あ、あはは……嘘だろ」

葉一の背中に硬い感触。

振り返れば、先程叩きつけられた木があった。無意識の内に後ずさりしていたらしい。

しかし、葉一のすぐ目の前には既に刀を振りかぶった刀子の姿が。

「ま、待て! 来るな! 僕を誰だと思って……」

「時間がないので、これ以上貴方の戯言を聞く気はありません」

刀子は無造作に刀を振り下ろす。

葉一は反射的に侘助を構えるが、凄まじい重量となった刀子の野太刀はそれをまったく意に介さない。

一瞬の抵抗の後、あっさりと侘助は叩き折られた。

そしてそのまま葉一の肩に峰打ちが入り、凄まじい轟音が周囲に響きわたる。

舞い上がった砂煙が晴れると、そこには野太刀を振り下ろした刀子と、地面に倒れ伏す葉一の姿。

刀子が刀を振り下ろした先は小規模のクレーターのようになり、葉一はかろうじて生きているといった具合だった。

「……………」

刀子は葉一が完全に気を失っていることを確認すると、残心を解き、刀を鞘に収める。

い（彼の名前を聞くだけでこれほど取り乱してしまつとは……………情けない）

刀子は頭を振って思考を切り替える。

今は反省よりも木乃香達の下へ向かうことが先決。

反省ならばその後によければいい。

自分に護衛を任せてくれた詠春の期待に報いるためにも、今は走るべき。

「お嬢様……どうかご無事で……」

今は亡き想い人のことを胸の中に隠し、刀子は再び戦場へと向かう。

しかし、彼女はまだ知らない。

彼女の人生を大きく変えた場所。

そこで、彼と再会することだ。

第七話（後書き）

侘助が好きな人、すんませんでした。

第八話（前書き）

刹那達の分も詰める予定でしたが、纏めきれませんでした……m（  
——）m

最近、異常に文が思いつかない……

## 第八話

「月牙、天衝ッ！」

人のいない、そして鬼で溢れかえる屋敷で詠春の叫びが響きわたる。詠春の持つ巨大な刀、斬月から三日月状の気の刃が射出され、十数体の鬼をまとめて薙ぎ払った。

「はぁ、はぁっ……くそっ、何体いるんだ！」

詠春は中庭で膝をつく。

専門の庭師により美しく整備されていた庭は、今や見る影もないほどに荒れ果てていた。

屋敷に閉しても同様で、屋根や柱などの様々な場所に戦闘の爪痕が残されている。

今の近衛家の屋敷はまさしく、戦場であった。

この場所で詠春が戦い始めてから、かなりの時間が過ぎている。

十数年もの間、戦闘から遠ざかっていた詠春の一番の弱点は体力だ。そこらの鬼を薙ぎ払うことぐらい現在の詠春でも容易だが、いつまでも戦い続けることができるほど詠春は若くない。

敵の鬼達もそれを理解しているようで、大人数で一気に襲いかかるような真似はせず、詠春を休ませないように波状攻撃を繰り返す。

その結果、詠春は鬼の数を三分の二ほど削ったところで体力が尽きかけていた。

「たった一人でここまでやるとはなあ……さすが大戦の英雄。残りはずっと三百つてところやな。元々は千ぐらいおったのに」

「まだ……それだけ残っているのかッ……!!」

軍勢の中で一回り大きい鬼が詠春の前に出る。

先程から周りの鬼達に指示を出していることから考えて、この鬼は軍勢のトップなのだろう。

「ワイらも別にアンタの命までとれとは言われとらんし、時間稼ぎに専念してっけんけどな。それでもここまで被害が出るとは予想外やわ」

この鬼の言つとおり、詠春に襲い来る攻撃には殺意があまりなかつ

た。

しかし、それは詠春にとって喜ばしいことではない。

時間稼ぎをされるといふことは敵の目的は詠春ではなく、別にあるといふこと。

そして、その目的は考えるまでもなく

（木乃香……！）

「まあそついうわけやから、悪いけどもう少しワイらと遊んでいてもらつて」

「そこをどけえッ……！」

詠春は斬月を握り直し、鬼の一団に向けて駆け出す。

鬼達は詠春の修羅の如き形相に思わず一歩退くが、彼らにも決して破れぬ契約の鎖がある。

彼らは『近衛詠春の足止め』という強制力の下、行動を開始した。

「う、おおおおおおお……！」

視界を埋め尽くす鬼達に対し、斬月を我武者羅に振り回す。

一歩進むにつれ詠春の体には傷が刻まれていき、そしてそれ以上の数の鬼を屠っていった。

体中がボロボロになっても詠春は止まらない。

今この瞬間に木乃香が敵に捕まっているかもしれないと考えると、止まらなかった。

斬撃だけでなく、空いた手でぶん殴り、蹴り上げ、頭突き、ありとあらゆる手段で目の前の鬼を排除していく。

そして、先程のリーダー格の鬼に斬りかかったところで 詠春は前のめりに倒れた。

「血を流しすぎたか……それだけボロボロやったら無理もないな」

「く……そ……」

詠春は無様に倒れた体を必死に起こそうとする。

しかし、彼の手足は動かない。動いてくれない。

既に詠春の身体には一欠片の気も残ってはいなかった。

「……アンタみたいな男は嫌いじゃないけど、ワイらは契約には逆らえん。悪いな」

そう言つて、鬼は右腕を振り上げる。

殺されることはないかもしれないが、あの腕で両足を潰されてしまえばそれで終わり。

木乃香を助けに行くことができなくなる。

(すまない、木乃香……)

詠春は絶望に目を閉じ、その時が来るのを待った。

しかし、予想された衝撃は一向に来ない。

詠春は目を開け、そして驚愕した。

鬼の胸から刀が生えている。

「まったく、大和はんと修行してた頃からちっとも変わっとりまへんな。そのすぐに熱くなる癖」

訳が分からない、という表情をしている鬼を串刺しにしたまま、刀は横に振り払われる。

鬼はなすがままに飛ばされ、保てなくなった体が崩壊していった。

そして、その鬼の後ろにいたのは

「鶴子！？ お、お前、旦那と一緒に旅行に行ってたんじゃない……」

かつて、刀子と共に最前線で戦ってきた女性。

詠春を除いて神鳴流最強とまで呼ばれ、斬魄刀を使う刀子と唯一互角に戦える人物でもある女傑 青山鶴子。

結婚を期に引退し、婿と共に旅行に行っていたはずの鶴子が現れ、詠春は混乱した。

「どうしても何も、いきなり詠春はんの部下から連絡が来たんよ？  
『強硬派が謀反を起こして、長が危ない』って。だから旦那との旅行は中止して、長距離転移魔法符で帰ってきたんだす」

鶴子は軽い口調で言うが、長距離転移魔法符は異常に高く、おいそれと使えるものではない。

安いものでも確実に数百万は飛ぶ。

しかし鶴子はそれを惜しみなく使った。

ここが使い時だと感じたが故に。

「ま、後で代金は請求しますけどな」

そう言っつて、鶴子は倒れた詠春の前に立つ。

前線を退いてなお、鶴子は武人だった。

その背中の頼もしさに、詠春は自分の不甲斐なさを情けなく思っつて苦笑いした。

「はは……そんなもの、いくらでも経費で落とすぞ……」

「それで、木乃香ちゃんは今どこにいるんや？ さっさとコイツら片付けて迎えに行かなあきまへん」

鶴子は周囲の鬼達を視線で威嚇する。

ただ見られたただけだというのにも関わらず、鬼達は喉元に刀の切っ先を当てられているかのような錯覚を感じた。

「それが、最近は遊び場所をしょっちゅう変えるから見当がつかない。刀子君が護衛でついているはずだが……」

「そこらへんは敵さんも織り込み済みのはずや。何かしらの対策を打たれとるやろ」

「くそつ、親でありながら情けない」

「反省は後どす。今はそれよりも木乃香ちゃんの場所を」

見つけるのが先、と続けようとして固まった。

鶴子だけではない。詠春も、周囲の鬼達も同様に凍りつく。

山全体を覆い尽くすような殺気が、突如として出現したからだ。

戦闘中であるにも関わらず、いや、彼らの頭からは既に戦闘のことなど頭から抜け落ちていた。

皆、我を忘れたかのように屋敷の裏手にある立ち入り禁止の山を見る。

あそこに、巨大なナニカがあると、全員の本能が訴えていた。

そして次の瞬間、その場所から爆発したかのように気の奔流が溢れ出す。

「馬鹿な……！」

「これはっ……！ そんな、嘘やろ!？」

詠春と鶴子は、この巨大な気を持ち主を知っている。

これほどまでに研ぎ澄まされた気を忘れるというほうが難しい。

すぐに誰の気か理解できた。

しかし、それは絶対に有り得ない。

なぜならば、この気を持ち主は既に 亡くなっている。

そう、思い出の地より流れ出る気は、確かに五木大和のものだった。

再会の時は、近い。

## 第九話（前書き）

この小説が pickup 小説に載っているのを見て、ジュース吹いた。

## 第九話

《……い……起き……！》

どこからか、大和の声が刹那の頭に響きわたる。

刹那は自分の意識がゆっくりと戻ってくるのを自覚した。

ただし意識が戻ったと言っても、それはまるでテレビの中の出来事のような感覚で、『ああ、自分は気を失っていたのだな』ぐらいにしか思えなかったのだが。

《……すめ……おい、起きろ小娘っ！！》

「う……う……う……」

現実感がひどく欠如しており、前後の記憶もあやふやだ。

体の感覚もほとんど機能しておらず、自分が立っているのか寝ているのかもわからない。

ただ、とても眠く、抗い難い睡魔が自分に襲いかかっていることはわかった。

《なにを悠長に寝ている！ さっさと目を覚ませ！ 殺されるぞ！》

「や、まと……さん？」

《……クソっ、頭を強く打ったのか。肋骨も数本いかれてやがる》  
必死な様子で自分に呼びかける大和の声を聞き、この人でも慌てる  
ことがあるのかと驚いた。

それほどまでに自分はひどい怪我なのだろうか。

………怪我？

ウチはどうして怪我なんか……

よづやくそこまで思考が追いついた時、刹那は思い出した。

今日、自分はいつもの場所で修行をしていたこと。

その場所に木乃香がついてきたこと。

自分が突如現れた鬼により、吹き飛ばされたことも。

刹那は全てを思い出し、そして思い出すと同時に体の感覚が戻ってきた。

一番最初に戻ってきた感覚は苦痛。

体を無理やり引きちぎるような痛みが襲う。

刹那は耐え切れずに胃の中のを全て吐き戻した。

半分以上が血で構成された自らの吐瀉物を見て、刹那は再び気が遠くなる。

だが皮肉にも、刹那の意識を繋ぎ止めたのは鬼の放った言葉だった。

「まったく、狩谷の坊主め……こんな童達を襲えなどと、胸糞の悪くなるような命令をしょって」

童『達』ということとは、あの鬼の標的は自分だけではない。

いや、むしろ長の娘である木乃香の方が本命に違いない。

自分を狙う理由など、どこにもないのだから。

「この……ちゃん」

「む、まだ意識があったのか？ ……やはり童を相手にして、無意識に手加減してしまったたようじゃな」

刹那は『大和』を杖にして、ゆっくりと立ち上がる。

頭を強く打ったせいか、視界は霞み、足は産まれたての仔鹿のように頼りない。

しかしそれでも刹那は立ち上がり、しっかと地面を踏みしめる。

「ふむ……その傷で立ち上がる気概は褒めてやるが、お主のそれは蛮勇というものじゃぞ」

《小娘、もういい立つな！ あの鬼にお前の止めを刺す気はない！》

刹那は霞む視界で鬼の姿を捉える。

鬼は川を跨いだ向こう岸に立っており、そこで自分は鬼の一撃によって川を飛び越えたことを理解した。

鬼にとっては軽く腕を振るった程度なのだろう。

しかしその軽い攻撃により、自分は川の向こう岸まで飛ばされ、頭

から木に叩きつけられた。

恐ろしいほどの腕力である。

それに対し、刹那は鳥族とのハーフと言ってもまだ子供だ。

身体能力で勝るところなど一つもないだろう。

剣術や鬼道にしても、大和から習ってまだ一週間ほど。

とても実戦で使えるレベルではない。

身体能力、技量、経験、戦いにおける全ての要素において、刹那に一欠片の勝機も存在しなかった。

《今のお前じゃ、あの鬼には勝てねえ！ このままだと犬死にするぞ！》

大和も、必死な様子で刹那を止める。

三年間自分を見守り続けてくれた彼の言うことは、きっと正しい。

本当に自分に勝ち目などないのだろう。

でも、刹那は立ち上がる。

《おい、何をやっている！？》

「……刀を持って立ち上がるからには、童といえども戦士。ワシもお主のことを敵と見なすぞ？」

大和の驚いた声が聞こえる。

いつも通りの乱暴な口調ではあったが、確かに自分の身を案じてくれていることがわかった。

……心配してくれて、ありがとうございます。

……心配かけて、ごめんなさい。

でも、ウチは引けません。

刹那は見てしまったから。

鬼の小脇に抱えられた木乃香を。

今まさに鬼に連れていかれようとしている、自分にとって初めての親友を。

その親友が、自分に心配をかけまいと、必死に口を抑えて悲鳴を押し殺しているのを。

だから、

「だから、ウチは戦います」

刹那はふらつく足で一步を踏み出す。

倒れそうな体を『大和』で支えながら。

親友を助けるために、鬼に向かって歩き出す。

《……今のお前じゃ、勝てないぞ》

「それでも、ウチは戦います」

《そんなボロボロの体でか？》

「それでもです」

《たとえば、それで自分が死んだとしてもか？》

大和は問う。

三年前、『大和』を受け取った時の誓い。

それを死ぬまで守り抜く覚悟はあるのか、と

そして刹那は

「はい。それで死んでも、この道に後悔はありません」

《……くそっ、そんな所だけ俺に似やがって》

「え？」

大和のため息が刹那の頭に響く。

なぜだかわからないが、大和が頭を掻きむしっている光景が想像できた。

《ええい、毒を喰らわば皿までだ！ 俺も付き合ってやる！》

「え、あの、大和さん？」

《俺が、あの鬼をぶっ倒す手助けをしようと言っているんだよ！ 返事はどうした！》

「は、はいっ！ よろしくお願いします！」

大和に怒鳴られた瞬間、条件反射で返事をする刹那。

《……絶対に死なせない》

「え？」

《これから斬魄刀戦術を使う！ お前は俺に気を集中させろ！》

「で、でもウチはまだ斬魄刀を屈服させて……」

《俺が変換器の役割をする！ いいから、お前は馬鹿のように気を流し込め！》

大和はそう言うが、実際の所、この作戦が成功する可能性は低かった。

確かに、斬魄刀を屈服させている大和であれば、本体と繋ぎを取ることはそう難しいことではない。

しかし、できるのはあくまで斬魄刀を交渉の座につかせることだけ。

そこから先に、大和の介入できる余地はない。

(俺が知る中で、最もまともな精神の斬魄刀は……)

呼び出す斬魄刀を決め、大和は叫ぶ。

《今から解号を唱える！ 俺の後に復唱をしろ！》

「はいっ！」

《行くぞ、？刹那？！》

「……はい！」

この瞬間、刹那は理解する。

今、始めてこの人に、主として認められたのだと。

《舞え  
舞え》

袖白雪！！  
そでのしじゆき

「長生きはしてみるものじゃない……まさかあの年頃で斬魄刀を扱う者を目にするとは……」

刹那達を襲撃した鬼は、元々この作戦には乗り気でなかった。

子供に手を上げることは彼の流儀に反するものであったし、もとより強者との戦い以外に興味はない。

だからこそ、今回は大戦の英雄である近衛詠春と死合つことができると期待していたのだが、実際に命じられたのは子供を拉致せよという任務。

正直、うんざりする内容だった。

(つまらん仕事はさっさと終わらせて帰還しようと思っておったが……思わぬ収穫じゃな)

心の中でそう呟き、鬼は脇に抱えていた木乃香を地面に降ろす。

「すまぬが、離れていてもらうぞ。流石に子供を抱えながら手合わせをするのは無礼であろうしな」

「せ、せつちゃんに何する気なん!？」

「あの童は幼いながらも戦士の目をしておった。ならば、それ相応の対応するのが礼儀であろう」

そう言って、鬼は刹那のいる方向へと歩いていく。

刹那が解号を唱えた瞬間、この周囲一帯に冷気が包まれた。

白い霧のような冷気は刹那を覆い、その姿を完全に隠している。

鬼は川沿いに立ち、向こう岸にいる刹那を待ち構える体勢をとった。

戦いを愛する鬼に不意打ちをする気など毛頭ない。

立ち向かってくるものには、誰であろうと最大の敬意を。

それこそがこの鬼の流儀である。

そして刹那を覆う霧が晴れ　　鬼は感嘆のため息をついた。

「ほう……白の剣士とは、中々に優雅であるな」

現れた刹那の姿は大きく変わっていた。

ただの胴着だった服は、不浄を一切寄せ付けぬ純白の死覇装へと変化。

その手に握る刀も大きく様相を変え、刀身も鐔も柄も全て純白となり、柄頭に長い帯が尾を引く美しい刀となっていた。

だが、鬼がなによりも美しいと思ったのは、刹那の髪。

鳥族と人間のハーフである刹那の特徴である、アルビノ体質。

背中の羽と同様に忌み嫌われ、今までは染料で隠していた本来の髪

色が現れた。

まるで魂を凍らせる雪女の如き白銀の髪に、鬼は目を奪われる。

そこで刹那はゆっくりと目を開き　その紅の瞳で鬼を見据えた。

最早言葉は不要。

川を隔てて向かい合う二人の間で、それぞれの気がぶつかり合う。

そして、先に動いたのは刹那だった。

先程までのふらついていた足取りとは違い、かなりの強者である鬼を感心させるほどの速度で走り出す。

だが、鬼の驚きはここからだった。

飛ぶなどして避けると思われた川を　そのまま水面を走ってこちらに迫ってきたのだ。

「なんと!？」

鬼は思わぬ現象に目を剥くが、刹那の走った跡を見て得心がいく。

その身から溢れる冷気によって形作られた、氷の道。

水の流れが穏やかである下流ならともかく、滝が直上にある急流での神業を見て、鬼は獣のように笑う。

そうではなくては、と。

川を渡りきって走ってくる刹那に対し、鬼は無造作に腕を振るった。

殺す気の攻撃ではないにしろ、特に手加減をしているわけでもない。

常人が直撃したならば、間違いなく即死の威力だ。

速度も十分にあり、こちらに向かって全力疾走している刹那では左右に方向転換もできず、避けきれないはずだった。

ここで、鬼は二度目の驚愕を味わうことになる。

刹那は勢いをまったく緩めず、いや、むしろ加速した。

そしてそのままスライディングで鬼の腕を掻い潜る。

さらにその際、相手と自分の速度を利用して、鬼の腕を撫でるように切り裂いていった。

予想外の避け方、そして自分の自慢である皮膚が傷つけられたことに鬼は呆然とする。

右腕から鮮血が吹き出し、そこでようやく鬼は我を取り戻した。

（斬魄刀といい今の動きといい、あの童は何者じゃ！？）

鬼は刹那に対して向き直る。

刹那は既に体勢を整えており、刀の切っ先を鬼に向けていた。

その真っ直ぐな瞳を見て、鬼は自分の浅はかさを思い知る。

（何が戦士として認める、じゃ……さっきまでの自分を殴り倒した  
いわい）

そう、今自分の前に存在するのは、紛れもない敵だ。

僅か十にも満たないであろう少女だとしても、それは変わらない。

殺し殺される立場である相手を、上から目線で『認める』とは何様のつもりだ？

鬼は緩みきった自分の性根に喝を入れる。

授業料は既に十分貰った。

余分な血も流れ、頭も冷えた。

鬼はもう慢心しない。

心は熱く、されど頭は冷静に。

再び、死闘が始まる。

刹那は鬼と戦いながら、言い知れぬ全能感に酔いしれていた。

(すごい……次にどう動けばいいのか、手に取るようにわかる！)

先程から鬼と互角以上に戦っている刹那だったが、それはもちろん彼女だけの力ではない。

これらの剣技は全て、大和の戦闘経験から汲み取ったものである。

元々、大和と刹那との間には細い糸パスがあった。

三年間ずっと気を籠められたことにより発生したこの糸は、刹那が斬魄刀『大和』を開放したことで、この瞬間に一気に拡張した。

そこから大和の意思が、刹那に流れ込んでくる。

《右の蹴り上げ、そしてそこから踵落としが来る！ 軸足側に回り込み、アキレス腱を狙え！》

《はいっ！》

常時開放型である、斬魄刀『大和』の能力。

その本質は、鬼道を肩代わりすることや斬魄刀と交渉することではない。

『常に意識を表に出すことができる』

これこそが、斬魄刀である『大和』唯一無二の特性だった。

《右ストレートはフェイント　　！》

《本命は、踏み込みながらの左ショートアッパー　　！》

本来、斬魄刀の意識というものは、使用者が屈服させようと挑む時ぐらいしか表に出ない。

だというのに戦闘中どころか、普段の生活の中でまで刹那と意思疎通できる『大和』は、はつきり言って異常だった。

《刀の腹で相手の攻撃を逸らしつつ》

《身長差を利用して、相手の足元へ潜り込む！》

しかし、それこそが『大和』の本来の使用法。

単純な戦闘だけではなく、知恵や経験、気配の察知まで大和が担当することができる。

使用者を訓練で強化してくれる斬魄刀など、『大和』以外には有り得ない。

「くそッ、足元をうるちよろと！」

《今だ、刹那！》

《はい！》

つまり、『世界最強の英雄が味方になる』ということ。

鬼道や斬魄刀は、その副産物でしかない。

焦れて動きが雑になってきた鬼に対し、刹那は大きく距離をとる。

足元にいた刹那に向けて腕を振り回していた鬼は、咄嗟に刹那を追撃することができない。

その一瞬の間をついて、刹那は袖白雪を地面に突き立てる。

一回、二回、三回、四回。

袖白雪を地面に突き立てる度に、柄頭の帯が白い軌跡を描く。

その一連の動作は戦闘中にも美しく、まるで舞っているかのよう。

鬼は思わず魅入られた。

そして鬼の意識の空白を突き、刹那と大和の舞が完成する。

次の舞、  
白漣はくれん

「っ、しまっ  
！？」

刹那の足元から出現した凍気の濁流。

雪崩の如き広範囲攻撃に、正気に返ったばかりの鬼は成す術もなく  
呑み込まれていく。

さらにそれだけには留まらず、木々や地面、川すらも凍てつかせ、前方五十メートルの空間を全て呑み込んでようやく止まる。

使用者と斬魄刀の心が一つになれば、それはかつての英雄が再び現代に蘇るのと同義。

「や、やりましたよ大和さん！」

《全力でフラグ建ててんじゃねえ！》

ただし心が一つにならなければ、ただの喋る刀に成り下がるの

だが。

「でも流石に今のを直撃すれば、いくら鬼と言っても……」

《ダメージぐらいは通っただろうが……白漣に呑み込まれる寸前、気を体に纏わせて防御していた》

大和は鬼を倒しきれていないと判断。

そして、その判断は正しかったとすぐに証明される。

氷の塊に無数の罅割れが走ったと思えば、その中心から鬼の腕が突き出されたのだ。

「まったく、年寄りにこの寒さは堪えるわい」

「そ、そんな……ほとんど無傷やなんて……」

氷漬けになっていた筈の鬼は、平然とした様子で内から氷を砕いて脱出する。

かなりの気を籠めた一撃だったにも関わらず、大した怪我を負っていないわけでもない鬼を見て、刹那は戸惑った。

大和はというと、鬼の様子を見て一つの推測にたどり着く。

《白漣を防いだあの方法……コイツ、まさか》

大和がその推測を刹那に伝える前に、鬼が口を開く。

「悪いのう嬢ちゃん。ワシはその斬魄刀の能力をほとんど把握しておるんじゃ」

「なっ……」

《……やはりな》

「あの技は白漣じゃったな？ あれは見た目こそ派手じゃが、その分威力が分散しておる故、一対一の勝負には向いとらん。体を気で覆えば致命傷は避けられる」

鬼の言うとおり、白漣は一对多でその本領を發揮する。

とは言っても威力が弱いわけでもないし、攻撃範囲も広い。

相手が回避を選択して巻き込まれれば、十分にダメージを与えられる筈だった。

だが、あの鬼は真つ先に防御を選択した。

「以前、五木家の者と共闘した際にその刀を見る機会があつてな…  
…美しい使い手と刀であつたのを覚えておる」

鬼は懐かしそうな目で袖白雪を見る。

昔のことを思い出しているのだろうか、その顔には微かに愛しさの  
ようなものが浮かんでいた。

だが、鬼は刹那に視線を戻すとニヤリと笑う。

「ただし、今代の使い手は色気がちいと足りんようじゃがの」

「ほ、ほつといてくださいっ!」

《……んな挑発に乗つてる暇があるんなら、ちよつとはこの場を乗  
り切る策を考えろ》

「うっつ……すみません」

実際の所、刹那達はかなり不利な状況だった。

袖白雪のことを知られているということは、事実上切り札の全てが  
封じられているのと等しい。

知っている技をむざむざ受けるほど、あの鬼が甘くないということ  
は刹那にも理解できていた。

(しかし、これ以上の速度の接近戦に刹那の体は耐えられない……  
あの鬼の目も慣れ始めている)

たとえ大和の戦闘経験を使えるからといって、それを扱っているの  
は九歳の刹那だ。

まだ体も出来上がっていない子供の身に、長時間の大和の戦い方は  
毒にしかない。

既に刹那の体中は悲鳴をあげているはずだ。

今までは身長差や交差法などを利用して刹那の負担を減らしていた  
が、鬼がその動きに慣れつつある現状、これ以上の高速戦闘は不可  
能に近かった。

そして、今刹那達が持っている手札の中で、唯一あの鬼を打倒でき  
る手段。

袖白雪を相手の体に突き立て、内側から凍らせて砕く技。

参の舞

白刀しろがね

しかし、当然鬼もこの技を警戒しているだろう。

命中してくれるとは到底思えなかった。

決め手は存在せず、そして持久戦で刹那に勝ち目はない。

八方塞がりだった。

《くそつ、他に何か手段は……》

「大和さん。私に考えがあります」

《ああ？》

先程とは逆に、刹那の意思が大和の中に入ってくる。

刹那の考えた作戦を理解した大和は数秒考え込み、そして刹那に尋ねた。

《確かにこれなら通用するだろうが……お前にできるのか？》

「できます。ウチと、大和さんと、袖白雪なら」

《……そうか》

大和は決断する。

主が無い頭使って必死に考えた作戦だ。

成功させてやろうじゃないか、と

《場所は俺が指定する。それで、お前は自分のやるべきことが理解できているな?》

「はい!」

《いい返事だ》

刹那は改めて鬼に向き直る。

その威圧感は一向に衰える気配を見せない。

一歩間違えれば、間違いなく自分は死ぬ。

それを理解していながらも、刹那はまったく恐怖を感じなかった。

恐怖が麻痺しているのだろうか?

いや、違う。

掌から伝わってくる信頼。

それのおかげで刹那は、まだ戦える。

《準備はいいか、刹那！》

「はいっ！」

戦いは、佳境へと移っていく

## 第九話（後書き）

大和の真の能力発動。

……色々と批判が怖い。

ちなみに、鶴子と詠春が感じた気はこれではありません。

第十話（前書き）

スランプエ……

多分ものすごく読みにくいです。

## 第十話

刹那は悠然と立ち構えている鬼に向け、走り出す。

鬼の目と鼻の先にまで迫った瞬間、大和が合図を出した。

《今だ！ やれ、刹那！》

「縛道の二十一 赤煙遁！」  
せきえんとん

刹那の両手から赤い煙幕が吹き出し、鬼の視界を遮る。

煙幕により刹那は覆い尽くされ、鬼は攻撃目標を完全に見失った。

「くっ、まさか鬼道も操るとは……!!」

鬼は即座に視覚を遮断。

その代わりに他の感覚をフル動員させて、刹那の動きを感知する。

刹那が鬼を倒せる唯一の手段である、参の舞 白刀。

いくら鬼でもあの技を喰らえばただでは済まない。

よって、鬼は研ぎ澄まされた感覚を使い、刹那の迎撃にその全神経を傾ける。

(どこから来る……右か、左か……上の可能性もありじゃな……)

時間が引き伸ばされていく感覚。

刹那が今の鬼に不用意に仕掛ければ、即座に反撃を貰うであろう。

この鬼はやはり、幾戦もの戦いをくぐり抜けてきた猛者であった。

一秒、二秒と時間が流れる。

そのまま数秒が過ぎ、鬼はようやく気づいた。

(あの娘の気配がしない……?)

鬼は目を開ける。

流れてきた風により煙幕が晴れ、そして鬼は自らの失態を呪った。

「やられたのう……」

煙が晴れた先に刹那の姿はなく、そして木乃香の姿もまた消えていた。

木乃香は刹那に横抱きにされ、森の険しい道を移動していた。

大の大人でさえ登るには難しい山道を、刹那は人一人を抱えたまま走って登る。

「せつちゃん……その髪の色……」

「……」

木乃香は混乱の極みに達していた。

ついさっきまで二人楽しく遊んでいたというのに、そこに絵本から飛び出てきたような鬼が現れ、そして自分の親友がその鬼と戦うという異常事態。

いくら木乃香がおおらかであるといっても限界がある。

既に木乃香の頭はパンク寸前だった。

「そ、そうや！　せつちゃんはその鬼に吹き飛ばされて、怪我を……急いで治療せな！」

「このちゃん、聞いてください」

親友の落ち着いた声。

その透き通った声色は、木乃香のパニックを一時停止させるには十分だった。

「今、ウチらはあの鬼に狙われています」

「う、うん」

「鬼のこととか、ウチのこととか色々聞きたいことはあると思うけど……お願いします。今はウチのことを信じて、何も聞かないでください」

「……」

「絶対にこのちゃんはウチが守るから……!!」

刹那の決意に満ちた表情を見て、木乃香は何も言えなくなる。

ただ、木乃香の中でこれだけははっきりしていた。

自分を守るために、親友が傷つくのはいやだ、と。

《そろそろ追いつかれる。急げよ、刹那》

「はい！」

獣道すら無い山の中、刹那は『仕込み』を始めていた。

刹那の最終目標は木乃香を無事に連れて帰ること。

そのためには戦闘を避けて逃げ切れれば最善なのだが、それは不可能だった。

いくら気で強化している肉体といえど、人を抱えていれば逃げる速度も落ちる。

いざとなれば羽を出して逃げるといふ手もあるが、幼い刹那の翼では木乃香を抱えて飛ぶことは無理だ。

つまり、木乃香の安全を確保するには鬼を倒すしかない。

この『仕込み』もそのためのもの。

準備を終えた刹那に、大和は語りかける。

《戦いの前にこんなことを言うのは本意ではないが……木乃香への説明はどうする気だ？》

「……それは」

《目の前でこれだけドンパチやらかしたんだ。いくらなんでもCGで言い訳できる範囲を超えてる。……まあ、そんな言い訳する奴もいないだろうが》

大和は、刹那の迷いを見抜いていた。

木乃香に対し、今回の件をどう説明するのかという迷い。

正直に全てを打ち明けるのか、それとも記憶を消すなどして先延ばしにするのか。

迷いを抱えたまま刹那に戦ってほしくなかった。

《俺としては木乃香に説明すべきだと思っている。関西呪術協会の長である詠春さんの一人娘だ。先延ばしにするのも限界がある》

「それは……」

刹那は即答することができなかった。

無論、刹那もしたくて隠し事をしているわけではない。

洗いざらい告白して、楽になりたいという思いもある。

事実、裏の世界に關することだけであれば木乃香に教えた方がいいと考えている。

それでもやはり、刹那に自らの出自を話す勇氣はなかった。

「……すみません。今はまだ、決められそうにないです」

《別に、お前が謝るようなことじゃない。これは詠春さん達も含めた問題だしな》

こんなことを言い出してすまなかった、と大和は言う。

《俺が言ったことは忘れて、今は戦いに集中しろ。ここで木乃香が連れ去られたら元も子もない》

「はい……」

刹那は結局、迷いを振り払うことはできなかった。

鬼は道なき道を登りながら、刹那達を探していた。

子供の足ではそう遠くまでは逃げれない。

鬼は刹那の足跡を辿りながら、もう少しで追いつけることを確信していた。

「さて、どんな策を用意しておるのか……」

戦いをすっぱかされたことに関して、鬼は刹那を恨んではない。

油断した自分が悪いのであるし、それに逃げ切れないことは刹那も重々承知のはずだ。

つまり刹那は逃げたのではなく、自らを打倒するために策を張り巡らしているのだろう。

その策を鬼は正面から打ち破りたかった。

(ワシの悪い癖じゃが……もう直しようもないからのう。恨むなよ、狩谷)

鬼はさらに歩き続ける。

そしてある程度森が開けた場所まで来て、鬼はようやく見つけた。

木の陰から僅かにはみ出ている着物。

それは確かに木乃香の着ていたものだった。

「……………」

鬼は無言で近づいていき、陰から見える着物に手を伸ばす。

そして手が着物に触れる瞬間、刹那の音が響きわたった

「縛道のー 塞!」

伸ばしていた右手が不可視の力により引き戻され、両腕が腰の後ろに強制的に回される。

さらに追い打ちをかけるかのような声が鬼の耳に届く。

「縛道の四　　這縄！」

鬼の頭上より気で編まれた縄が現れ、鬼の体を拘束していく。

数瞬の内に鬼の体は這縄で雁字搦めにされて、その自由を失った。

鬼は頭上を見上げる。

そこには左手に這縄の先を持ち、右手に袖白雪を構えた刹那の姿。

木の枝から飛び降りた刹那は逆手に構えた袖白雪で、今まさに鬼を貫かんとしていた。

木乃香を囮にして、その隙に鬼道で拘束。

そして袖白雪で止めを刺すつもりなのだろう。

完全に動きを封じられた鬼は、刹那の奇襲を目の当たりにして、つまらなそうに呟いた。

「 所詮、子供の浅知恵じゃの」

鬼は二重にかけられた縛道を、いとも簡単に引きちぎる。

刹那の年齢で鬼道を扱えるのは驚嘆に値するが、それだけだ。

構成が甘く、鬼道衆のそれと比べてひどく脆い。

鬼の腕力を塞き止めるほどの力はなかった。

そして、空中にいる刹那は完全に無防備。

刹那の攻撃はいとも簡単に避けられ、代わりに鬼の右腕が刹那に叩き込まれた。

「っ、く！」

短い悲鳴と共に刹那は吹き飛び、一転三転と地面を転がってようやく

く止まる。

手応えは完璧。

カウンター気味に入った右拳は、刹那の体内に全ての衝撃を与えた。

一番最初のダメージも含めると、最早刹那に立ち上がるだけの力は残っていないだろう。

倒れ伏した刹那を見て、鬼は僅かに落胆の表情を見せる。

(どんな策かと思えば、ただの奇襲であったか……少し買いかぶりすぎたようじゃな)

鬼は刹那の下へと歩きだす。

たとえ子供といえど、戦士の目を宿していた者を見逃す気はない。

刹那に止めを刺すべく、一歩一歩近づいていく。

しかし、鬼と刹那の間に人影が割り込んだ。

「や、やめて！　せつちゃんに手を出したらゆるさへん！」

木の陰に隠れていた木乃香が両腕を開いて鬼を止めようとする。

目に涙を溜め、必死に恐怖を誤魔化している姿を見て、鬼はため息をついた。

「嬢ちゃん。悪いことは言わん……下がってる」

最後の台詞は殺気と共に発せられた。

大人ですら気絶しそうな程の、物理的圧力すら伴っている言葉。

木乃香は気を失うことは無かったものの、足の震えにより立っていることすらままならなくなった。

地面にへたり込んだ木乃香を悠々と跨いでいく鬼。

そして地面に倒れる刹那の前まで来て、鬼は口を開いた。

「何か言い残すことはあるかの？」

「っ……！」

地面に倒れ伏す刹那の目は、まだ死んでいなかった。

刹那は必死に立ち上がるうともがく。

しかし、右手に掴んだ『大和』を杖にする力すら残っておらず、虚しく地面に転がったままだった。

その刹那の姿を見た鬼は数秒瞑目する。

そして、心の中の躊躇いを消すと同時に右手を振り上げた。

一瞬の後に、刹那の命の灯火は消える。

それは、変えようのない運命だ。

ピンチの際に都合良くヒーローが現れるのはお伽噺の中だけ。

刀子は全力でこの場所に向かっているが、到着には十分はかかる。

どう転んでも間に合わない。

しかし、運命は覆される。

奇跡などではなく、他ならぬ刹那と大和の力によって。

「　　ウチらの、勝ちや!!」

鬼の腕が降り下ろされる寸前に、刹那のボロボロの腕が持ち上げられる。

そして刹那は渾身の力を籠めて、袖白雪を地面に突き立てた。

その瞬間、鬼を中心とした円が浮かび上がる。

落ち葉で巧妙に隠されていたその円は、青白い光を放ちながら鬼を包囲した。

「これは……まさかっ!？」

鬼にはこの現象に心当たりがあった。

自分の予測が正しいのならば、この場所においてはただでは済まない。

鬼は咄嗟に脱出を試みる。

しかし、完全に油断していたがために初動が致命的に遅れてしまった。

そして、鬼は巨大な氷柱に囚われる。

(やはり月白! まさか、遅延発動するとは……!)

初の舞

つきしろ  
月白

刀で地面に円を描き、その内部の天地全てを凍らせる技。

攻撃範囲がかなり特殊であり、使い所が難しい技でもある。

刹那はこの技を罠として使うことを考えついた。

あらかじめ刀で円を刻んでおき、範囲内に入った瞬間に発動。

口にするのは簡単だが、可能かというところでもない。

まず、鬼が円の範囲内に入らなければ意味がない。

大和の類い稀な戦術眼がなければ、ここまで正確に鬼を誘い込むことはできなかつただろう。

その上、ただ罠として設置しても反射的に避けられる可能性も高い。

だからこそ刹那は鬼の攻撃を甘んじて受けた。

相手が完全に勝負がついたと考えて、油断するのを待つために。

しかし、それでも鬼にとって致命傷には成り得ない。

並の相手ならば簡単に凍てつかせ、粉々に砕く技だ。

だが、この鬼にとっては数秒間拘束されるだけに過ぎない。

すぐに鬼は内部から氷柱を破壊し、自由の身となるだろう。

「う、あああああああああああああああー！」

目の前で立ち上がり、再び刀を構える存在さえなければ。

刹那はボロボロの体を無理やり起こす。

たった一度のチャンスを活かすために。

親友を、守り抜くために。

(見事じゃ……今度は味方として戦場に立ちたいものじゃのう……)

鬼の腹部に、袖白雪が突き立てられる。

体の内部が凍てついていく感覚を味わいながら、鬼はそう思った。

鬼の輪郭が薄れ、消えていく光景を見て木乃香はようやく我を取り戻した。

「せつちゃん！ 返事をしてえな、せつちゃん！」

木乃香は泣きながら、倒れている刹那にすがりつく。

刹那の髪は元の色に戻っており、直ぐ側に落ちている刀も以前の色彩を取り戻していた。

だが、その身に刻まれた怪我まで元通りになつたわけではない。

鬼の油断を誘うために受けた傷は、深く刹那の体に刻まれていた。

「こういつ時はどうすれば……そ、そうや、まずは血を止めんと！」

木乃香はうる覚えの知識を使い、必死に応急処置を施す。

自らの質の良い着物を惜しげもなく破り、刹那の傷口に巻きつけていった。

溢れ出る血によって、着物は即座に赤く染まっていく。

それを見た木乃香はパニックの悪循環に陥っていった。

(どつすねば……どつすねば……！)

だから、気づけなかったのだろう。

「おいおい、慙愧の旦那がやられたってのはホンマやったんかいな」

自分達を取り囲む、鬼の群れに。

「え……？」

木乃香が気づいた時にはもう遅い。

見渡す限り完全に包囲されており、逃げ道などどこにもなかった。

「慙愧の旦那をヤツたんは倒れとる方みたいやけど……末恐ろしい子供やで」

「まだ十歳ぐらいやん。ホンマにこの子の仕業かいな」

「その刀に旦那の気が残つとる。間違いないやろ」

木乃香には、鬼達の会話をどこか別世界の会話のように感じていた。

ついさっきまで刹那と一緒に笑いあっていたというのに、あの鬼が現れてから全てが狂いだした。

まるで夕子の悪い夢を見ているかのよう。

これが誰かの脚本だとしたら、書いた人はどれだけ意地が悪いのだからか。

「旦那を倒したやつを始末しろっていう契約やしな。こんな子供を手にかけるんは氣い引けるけど、それもしかあないか」

そう言って、巨大な刀を持った一体の鬼が近づいてくる。

木乃香は咄嗟に刹那と鬼の間に割り込んだ。

鬼の眼光を直視するのは二回目だが、たった二回で慣れるわけもない。

木乃香の足はすくみ、意思の力だけで立っているような状態だった。

そんな木乃香の姿を見て、鬼はため息をつく。

「嬢ちゃん、アンタを傷つけるのは依頼外やけど……別に、無傷で連れてこいって言われてるわけちゃうんで？」

遠回しに、邪魔をするなら無理やり排除する、と告げる鬼。

刹那と戦っていた鬼ほどの威圧感ではないが、それでも九歳の子供に耐えられるものではない。

この鬼もまた、直ぐに道を譲るか、気を失うかのどちらかだろうとタカをくくっていた。

「いやや！ 絶対にせつちゃんには手を出させへん！！」

しかし、木乃香は刹那を庇う体勢のまま、一步も動かなかった。

木乃香は雰囲気を読むのが上手い。

それ故に、今回の件で刹那が怪我をしたのは、自分を助けるためだと正しく理解した。

正直な所、鬼だの魔法だのとファンタジーなことはよくわからない。自分の親友が超常の力を操っていたことに、多少のショックもある。ただ、木乃香の中で一つだけはつきりしていること。

刹那は自分を助けるために、巨大な鬼に立ち向かった。ならば、自分もその思いに応えるべきだと。

木乃香はそう思い、刹那の側に落ちていた刀を拾う。初めて持った真剣は想像以上に重く、プルプルと震える腕で持ち上げるのが限界であった。

その様子を見た鬼達から失笑が漏れる。

木乃香の頭に声が響いたのは、そんな時だった。

聞こえるか、近衛木乃香。

「え………?」

木乃香は周囲に目を配るが、周りにいるのは鬼ばかり。

今日は理解できない出来事がたくさんあったが、とうとう幻聴でも聞こえるようになったのだろうか。

時間がないので単刀直入に聞く。その小娘を守りたいか？

しかし、その内容は聞き逃せるものではなかった。

たとえ幻聴であったとしても、刹那を救う方法があるのならば何でも構わない。

必要とあらば、悪魔と契約するのも辞さない覚悟だった。

その思いを声の主に届けるように、必死に念じる。

（お願い！ 誰でもいいから、せっちゃんを……）

果たして木乃香の願いは聞こえたのだろうか、小さく笑ったような声が木乃香の耳に届いた。

この場所に気感受性が強い者がいれば、『大和』から気の糸が伸びていることに気がついただろう。

それは『大和』に残った最後の気で紡がれた鬼道。

縛道の七十七 天艇空羅。

俺の名前は『』。

(最後が聞こえへん………?)

彼(もしくは彼女)の声は、何故か最後の部分だけかすれていて聞こえなかった。

まるでテレビの砂嵐のようだ、と木乃香は思った。

クソっ、糸バスの無い状態で真名を教えるのは難しいか……相変わらず不都合だ。

どうやら声の主の不都合が生じているらしい。

それが刹那の救出に影響しないか、木乃香は生きた心地がしなかった。

悪いが、お前にも多少の代償は払ってもらおう。お前の持っている刀に、自分の血を付ける。

それを聞いた木乃香は、まったく迷う素振りも見せずに素手で刀身を強く握りしめる。

鋭い痛みと共に、木乃香の小さな手から血液が流れだして『大和』を紅く濡らした。

傍目からは何をやっているのかわからず、近づいてきた鬼も首を傾げる。

イメージしろ。お前の、近衛家の血には特殊な力がある。それを強く認識するんだ。

近衛家の血に宿る力。

この世ならざるものを繋ぎ止める、『招喚』の能力。

本来招喚に必要とされる百の魔力を、一の魔力で済ませてしまう異能。

『リョウメンスクナ』すら単独で喚ぶことすら可能とするこの力は、生まれ持った莫大な魔力と合わせれば、まさに反則級である。

ドクン、と。

心臓の鼓動のような音が周囲に鳴り響いた。

「なんや、今のは……」

「エライ悪寒を感じたぞ」

鬼達も不審気な様子で目を合わせる。

その間も、鼓動の音は響き続けていく。

「ッ、嬢ちゃんの仕業かい！」

刹那達に近づいてきていた、巨大な刀を持った鬼が異変に気づく。

木乃香の持っている『大和』は薄く発光し、周囲に気をまき散らし始めていた。

「何企んでんのか知らんが、させへんぞ！」

巨大な刀を持った鬼は木乃香に向かって駆け出す。

彼の本能が、アレを放っておいてはいけないと警告していた。

十数メートルあつた距離を瞬時に縮め、刀を振り上げる。

長の娘を殺してはいけない契約だったので、刀を返した峰打ちの体勢だ。

しかし、鬼の力でマトモに喰らえば、それだけでも致命傷になりかねない。

彼はそれほどまで焦っていた。

なんの変哲もない刀が放つ、恐ろしい威圧感によって。

耳を澄ませる！ 今のお前には聞こえるはずだ！

木乃香は目を閉じる。

手に持った刀がとんでもない熱を持っていた。

刀から鳴り響く鼓動は早まり、痛いほどの圧力をぶつけてくる。

血液によって結ばれた簡易的の糸パスを通して、木乃香の魔力が吸い上げられていく。

目を閉じた木乃香に、鬼の刀が振り下ろされた。

叫べ！ 俺の名は……！

木乃香は叫ぶ。

喉がちぎれんばかりの大声で。

彼の名を喚んだ。

「『大和』！！」

薄く目を開けた木乃香は、自分がまだ生きていることを確認する。

自分は鬼の刀の直撃を喰らっているはず。

それなのに、何故？

木乃香はゆっくりと顔を上げる。

そして眼前の光景を見て 驚愕した。

先程まで自分の手に持っていた刀が宙に浮き、鬼の剣を防いでいた。

木乃香は現在、『大和』にまったく触れていない。

刀は完全に独力で宙に浮いて、鬼の刀から木乃香を守っていた。

「マジかいな……」

木乃香に向けて刀を振り下ろした鬼もまた、同様に驚いていた。

彼の刀は鬼専用のとんでもなく巨大なものだ。

大きさに見合った重量もあり、鬼の腕力で振りおろせば岩など粉々に砕く。

だというのに、木の枝のように細い刀一本により、彼の刀は完全に受け止められていた。

いくら力を籠めてもまったく動かない。

まるで地球に斬りつけているような感触だった。

木乃香はその光景を呆然と見つめ 気づいた。

自分を守る刀の柄に、誰かの右手が浮かび上がっていることに。

いや、右手だけではない。

右腕、右肩、背中、左腕、腰、両足、首、そして頭が順々に浮かび上がっていく。

全身が浮かび上がったその少年は、黒い着物を着ていた。

その服装は、先程刹那が纏っていた純白の装束の正反対である。

「ッ、なんやお前は！」

鬼は突如現れた少年に対し、再び刀を振り上げる。



そして少年が自分の顔に掌をかざした時、ああ、ここで自分は死ぬのだなとボンヤリ思った。

だが、

すまない。怖い思いをさせたな。

(11の声……わっきの)

薄れていく意識の中、最後に聞こえたのは確かに

大和は木乃香を『白伏』で眠らせて、木にもたれさせる。

そして、倒れている刹那に近づいて治療系の鬼道を発動させた。

大和に治療系鬼道の適正はほとんど存在しなかったが、血反吐を吐くような修練により、一流のそれと遜色ないレベルで使用できる。

光に包まれた刹那の怪我はどんどん消えていき、完治とまではいかないが、命に関わるような傷はなくなった。

穏やかな寝息を立てる刹那をそっと抱え上げ、木乃香の隣にもたれさせる。

そこまでして、ようやく鬼の内の一人が我に帰った。

「おい坊主！ テメエ一体どこから湧いてでやがった！」

「……………」

「なんとか言えやコラ！」

「……………最近の式神は高性能なんだな」

「ああ!?!」

大和は喚き散らす鬼に向き直る。

そして、感情の籠っていない目で、こつ告げた。

「首が無いのに、喋れるなんてよ」

「はあ？ コイツ、一体何を……………言っ……………て……………」

ゴロリ、と

喚いていた鬼の首が落ちる。

それを見て、鬼達はようやく戦闘体勢に移る。

今までの少年を注視していたにも関わらず、いつ鬼の首を切り落としたのかまったく解らなかった。

「俺は今、ひどくイラついている。自分でも驚くぐらいに」

森の中、大和の音が響きわたる。

「お前らに八つ当たりすんのは筋違いってわかってるんだけどな。悪いけど、止まれそうにない」

大和は俯きながら、震えていた。

それは恐怖ではなく、むしろその逆

「　　テメエら、八つ裂きにしてやる」

限界まで抑えられていた殺気が、総本山全てを覆い尽くすほどに拡散する。

鬼よりも鬼のような形相を浮かべて、主を傷つけられた五木大和は怒りの咆吼を上げた。

## 第十話（後書き）

大和さんがログインしました。

大学が始まるので、更新のペースがかなり落ちます。

二週間に一回ぐらいだと思ってください。

## 第十一話（前書き）

二つ名メーカーという、名前を入力すればライトノベル風の二つ名がでてくるサイトを知り、試しに『五木大和』と入力してみた。

結果、『トリプルバインド亡骸』

……合ってる！？

## 第十一話

「くそッ、何がどうなってやがる!」

「何なんだよ、あの化け物は!」

「いいから散らばらんか! 一箇所にいれば終わりじゃぞ!」

現在、刹那達を襲おうとしていた鬼達は森の中を逃げ惑っていた。

その姿はまさに恐慌状態といった様相で、三メートル級の身長と相まって非常に滑稽だった。

「ハッ、ハアッ、ちくしょう! あんな化け物があるだなんて聞いたらへんぞ!」

彼らはそこらの術者が操る式神とは一線を画した存在であり、それぞれが書物に名を残すほどの力を持っている。

現在近衛家を襲撃している鬼と比べれば、一体で十数体に匹敵するほどだ。

それほどの力を持った鬼が多数集結したことで、確かに油断もあつただろう。

相手が子供だということも、それに拍車をかけたのかもしれない。

だがそれでも、自分たちがここまで追い詰められるとは、彼らは夢にも思わなかった。

森の中を走る鬼は、先程起こった悪夢を思い出す。

大和達を取り囲んでいる鬼達の心は一つだった。

先程のような巨大な殺気を放つ相手に、まともに戦って勝てるわけがない。

自分達の有利な点と言えば、目の前の少年には守らねばならない存在がいること。

そして、自分達はこの少年を完全に包囲しているということである。

つまり少年が動くと同時に、反対側の鬼が二人の少女を人質にとる。

少年に狙われなければ倒れている刹那達に向かい、狙われた鬼は運が無かったと諦める。

作戦とも呼べない代物だったが、これが生き残る可能性が一番高いことも事実。

鬼達はアイコンタクトだけでこの作戦を理解した。

「夕闇に誘え 弥勒丸」

少年が解号を唱えると同時、小さな旋風が『大和』を覆う。

風が晴れた時にはその姿を大きく変え、先端に刃の付いた錫杖が現れた。

五木家の代名詞ともいえる斬魄刀が登場したことにより、鬼達の緊張感が一気に増す。

（直接攻撃系か？ いや、外見だけでは判断できへん。何かしらの能力を持つとる可能性もある）

鬼達はいつでも飛び出せるように身構える。

仲間の内、誰かが犠牲になるのは確定だが、これほどの殺気を放つ相手に一体の犠牲で済めば御の字だ。

慚愧がいれば許さないであろう行為だが、鬼達もなりふり構ってられない状況だった。

しかし、その企みは一瞬で破壊される。

少年が錫杖を構えた次の瞬間、三人を中心とした巨大な竜巻が放出された。

「な、なんやと!？」

「ちょ、これは流石にデタラメすぎるっちゅうに!!」

これが少年の持つ斬魂刀

弥勒丸の特性。

その錫杖は風を自由自在に操り、全てを呑み込む暴風を発生させる。弥勒丸の生み出した竜巻は全ての鬼を巻き込み、上空へと舞いあげた。

「ぬおおツ！ こ、これは予想外じゃ！」

「あ、アカン、木がこっちに飛んでき……ぐああああ！」

鬼達は竜巻に翻弄され、共に舞いあげられた樹木や岩などに潰される者もいる。

が、それでも過半数の鬼達は、自分達に向かって飛んできた物体を破壊して、なんとかやり過ごしていた。

少年が自ら、嵐の中に追いかけてくるまでの話だったが。

「……………はい？」

間抜けな声を出した鬼は弥勒丸によって胴を両断され、淡い光を放

ちながら還っていった。

だが、そこで殺戮は終わらない。

鬼達を叩き潰している樹木や岩を、むしろ足場として用いて、少年は三次元的な動きを見せる。

全てを吹き飛ばす嵐の中、少年にだけ風の精霊が味方についたかのような幻想的な光景だった。

錫杖の刃によって首を刎ねられ、柄によって頭を潰され、石突きによって心臓を貫かれる。

そこに一切の慈悲はない。

少年に狙われた者は例外なく還されていった。

鬼達は必死に抵抗を試みるが、少年の動きを目で捉えることすらかなわない。

彼らの目には微かな黒い残像が映るのみ。

刃で体を斬られた瞬間に捨て身で少年を捕まえようとした鬼もいたが、その者の腕は食材のようにみじん切りにされた。

(こんな相手にしとつたら、命がいくつあっても足りへんぞ！)

生き残っていた鬼達は、即座に撤退を決意する。

空中の足場を使って、死にもの狂いで竜巻の外へと飛び出した。

これまでの攻防で、竜巻の外へ脱出できた鬼は六体。

完敗だった。

少年の虐殺から逃げ延びた六体内、一体が木にもたれかかって休んでいた。

「こ、ここまで来れば、流石に追いつけんやろ……」

そう呟いた瞬間、『あれ、これってフラグってやつやったっけ？』と自分で思ったが、少年の気はあの場所から動いておらず、既に数キロの距離が開いていた。

少なくとも瞬時に移動できる長さではない。

ひとまず助かった安堵から、大きく息を吐く。

（一時撤退するっつーことで契約を誤魔化したけど、後でまたあの場所に行かなあかんしな……正直割に合わんで）

鬼という存在は、基本的に契約を破ることはできない。

この鬼が命じられたのは、慙愧を倒した者の抹殺と近衛木乃香の拉致。

今は『命令達成が困難なので、とりあえず一時撤退している』という名目で少年から逃げているのだが、いつまでもこうしていることはできない。

（他の逃げたヤツらと合流するか……大して変わらんやろうけど、何かエ工作戦が思い浮かぶかもしれんし）

そう考え、鬼はもたれていた木から体を起こそうとする。

だが、完全に起き上がる前に背中の木ごと、体を刀に貫かれた。

「がッ、はあッ……!？」

何が起こったのか、鬼はすぐに理解することができなかった。

あの少年の気は、相変わらずさっきの場所から動いていない。

だということになぜ、自分の心臓は刀に貫かれているのだろうか？

(一体、何が……っ!?)

振り向いた鬼は目を見開く。

彼の視界に映ったもの、それは異常な長さを持つ刀の姿。

その刀は数キロの距離を一瞬でゼロにし、隠れていた樹木ごと鬼を貫いたのだ。

(まさか、刀で射殺いころされるとは思わなかった……)

鬼から刀がゆっくりと引き抜かれていく。

そう、それはまさしく『狙撃』だった。

霊核である心臓を完全に破壊され、鬼は地面に崩れ落ちる。

(狩谷はん……こいつは、アンタの手に負える相手とちゃいませ  
……)

「馬鹿な……私の式神達が、消えていく……!？」

深い森の中、強硬派のトップである狩谷総一郎は驚愕に目を見開いていた。

普段から冷静な彼をここまで動揺させている事柄、それは近衛木乃香に差し向けた式神達のことごとくが撃破されていることである。

狩谷は術者としては超一流と言っても過言ではなく、それに比例して操る式神達の力量もまた高い。

彼が最も信頼の置いている式神である慙愧が還された時も驚いたが、それは情報にあった桜咲とかいう護衛が相打ちにでも持ち込んだのだらうと考えた。

少なくとも慙愧と戦って無事ではいるはずがないし、保険として用意していた鬼達を向かわせればいい。

どちらにせよ、大勢には影響はないと判断。

彼の計画は、問題なく進んでいると思われた。

だというのに、彼の放った式神達は消えていく。

（五木葉一がしくじった？ いや、確かに葛葉刀子が転移されるのを確認している……となると、他にも護衛がつけられていたのか？）

狩谷は状況を整理しながら、撤退の準備を始めていた。

仮に葛葉刀子とは別に護衛がつけられていた場合、こちらに向かって来る可能性がある。

屈辱はあるが、今はそれよりもこの場を逃れ、機を改めるのが優先だ。

幸い、まだ鬼は数体残っている。

その全てに足止めを命じれば、自分が逃げる時間ぐらいは稼げるだろう。

鬼を招喚する際に使った触媒を手早く回収すると、狩谷は下山するべく走り出した。

縛道の六十六 六杖光牢

「なっ………!?!」

だが、数歩も進まぬ内に、六つの光の帯が狩谷の胴を拘束する。

(もう追いつかれたのか!?　いくらなんでも早すぎる……っ!)

あまりに早いタイミングでの奇襲に、狩谷はパニックに陥りかけた。しかし、すぐに気付く。

ついさっきまで残っていた式神の反応が、今はもう消えていることに。

(おのれッ、こんなところで捕まるわけには……!)

狩谷は必死に脱出を試みる。

しかし、狩谷ほどの術者をして、ここまで美しく構成された術式はお目にかかったことがなかった。

この一欠片の隙もない術式を崩すのは不可能と判断する。

そして、狩谷の取った行動は

「破道の三十三　　赤火砲!」

完全な力技。

自らを縛る六杖光牢に、思い切り赤火砲を叩き込む。

「ぬ、ぐッ……！」

無論、それだけの至近距離で赤火砲を放てば自分もただでは済まない。

狩谷の体は爆風により傷ついていく。

だが、狩谷の捨て身の覚悟は確かに実を結び、その身を縛る鬼道は砕かれた。

自由の身となった狩谷は、潜んでいる襲撃者を見つけるために周囲の警戒をする。

そして、森の奥から声が響いてきた。

どうして、そこまでする？

「どっしって、だと？」

狩谷は声の出処を探るが、どうやら鬼道で声が散らされているらしく、場所はわからなかった。

舌打ちしそうな内心を抑えて、この状況を打開する策を考えるために会話で時間稼ぎをする。

「どうせ、貴様らは我々のことをただの危険分子としか見ていないのだろうな。我々の思想こそが、関西の生き残る唯一の道だということに」

長の娘を拉致するってのも、その第一歩か？

「ああ。木乃香嬢を使って長を脅し、関西の新しい方針を表明させるつもりだった。それが貴様のせいで、全て水の泡になりそうだな」

狩谷の腕からは血がとめどなく流れだし、赤い水溜まりを作っていた。

出血のせいで意識が朦朧とし、打開策が思いつかない。

だが、狩谷の口は止まらなかった。

「関西の勢力は、関東に比べれば非常に小さな組織なのだ。長年日本のトップでいたせいで野心は薄れているし、魔法世界に後盾があるわけでもない。これほどの力の差があつてなお、健全な関係を結べると思うか？」

否、と狩谷は断言する。

「かつて関西が不当に攻め込まれたにも関わらず、ろくな謝罪もよこさなかったのがいい証拠だ！ 我々は舐められているんだよ！ どうせその気になればいつでも滅ぼせるのだから、今はどうでもいい、とな！」

狩谷の言葉に熱が籠る。

時間稼ぎのための会話は、いつの間にか本来の目的を外れていた。

「穏健派などと謳っているが、その実態は関東に媚を売っているだけに過ぎん！ 戦うのが嫌だという理由だけで、武力を持たないという危険性が理解できていないのだ！ このままだと関西は自然消滅するぞ！」

(……正論だ)

大和は森の中に身を潜めながら、狩谷の言葉を聞いていた。

既に頭も冷え、狩谷の言葉を分析できるぐらいの余裕は回復している。

つまり狩谷の言いたいことは、関西には力が必要だということ。

別に戦争したいがために力をつけるというわけではない。

対等でない者達が、対等な関係を結ぼうとしても、必ずどこかで綻びが生まれるのだ。

そしてその綻びこそが、二十年前の総本山襲撃事件である。

大和が襲撃者を葬ったことで難を逃れたが、その大和も事件の後に関西を抜け、関東に対抗できる術を失った。

(責任の一端は俺にもあるってことか……クソツタレめ)

思わず拳を強く握りしめる。

大和が狩谷と戦っている理由は、刹那が傷つけられたからだ。

関西の将来などを考えて戦っていたわけではない。

しかし、こうして狩谷の目的を知った以上、彼の思想に少なからず賛同してしまう自分がいた。

(詠春さんとは、後で話し合う必要があるな……)

大和はそう決意すると、鞘から刀を抜き放つ。

確かに狩谷の言いたいこともわかるが、木乃香を拉致し、刹那を傷つける方法まで認めることはできない。

故に、大和は狩谷を無力化する道を選ぶ。

鳴け

清虫<sup>すずむし</sup>。

解号と唱えると同時に大和の刀が変化、鏢に小さなリングが現る。

そのリングを中心として、指向性を持った超音波が狩谷に放たれた。

「つつ………！」

三半規管を直接揺さぶられ、狩谷の体が傾いでいく。

大量に出血したことに加えて、体のバランスを司る器官を攻撃されればひとたまりもない。

狩谷は執念だけで踏ん張り、倒れる寸前にこう言った。

「貴様ら穩健派のせいで、大和さんが犠牲になったのだ……！」

薄れゆく意識の中、狩谷は昔の記憶を思い起こす。

まだ幼い頃、鬼道の才能が無いことに悩み、誰も頼れなかった自分に話しかけてくれた人のことを。

鬼道にはコツがあつてね、まず黒い穴がぼっかりと空いているのを想像するんだ。そして、その穴の中に飛び込むイメージを持つてくらん。

そうそう、そんな感じだよ。呑み込みが早いね。

きっと君は一流の術者になれる。その力を誰かのために使ってくれたら、僕も嬉しいかな。

あの人からしたら、落ち込んでいる少年に気まぐれでアドバイスを  
しただけなのだろう。

きつとすぐに自分のことなど忘れてしまったに違いない。

でも、彼の言葉は全て、自分の中に残っている。

だから、彼に全てを押し付けて、のうのうと暮らしている穏健派を  
憎んだ。

（結局私は、あの子の仇を討ちたかったただけか……）

今の自分を、大和さんが見たら何と言っただろうなと自嘲し、狩谷の  
意識は闇に落ちた。

狩谷が完全に気を失っていることを確認すると、大和は自らの姿を隠す鬼道である曲光を解除した。

「あの時の、子供だったのか……？」

まだ京都にいた頃、大和が修行をしようとした時に見かけた子供。

落ち込んでいる様子だったので話しかけてみれば、鬼道の才能が無いことを苦しがっていた。

だからちよつとしたコツを教えてあげたのだが

「そうか……もう二十年も経っているんだもん……」

あの時の子供は大人になり、決して曲げぬ信念を宿していた。

よく見れば、確かにあの頃の面影がある。

「……鬼道、ちゃんと練習してたんだな」

狩谷に目を覚ます様子はない。

鬼を招喚するのに大量の魔力を消費していたことに加え、かなりの量の血を流していた。

少なくとも、丸一日は起きないだろう。

そして目が覚めた時には、既に捕らえられているはずだ。

「事情は話しておくよ。お前はお前なりに、関西を守ろうとしていたんだ、って」

処罰は免れないだろうが、詠春の性格からいって極刑もないはずだ。

それと、と続ける。

「ごめんな。俺はお前が思っているほど強くない」

自分はその時、色々なものから背を向けた

詠春や鶴子、素子達から。

夢や理想、そして何より、守ると誓った少女からさえも。

その裏切りは大和の胸にトゲとして突き刺さり、今だに消えない

大和は自分の右手を見る。

手の輪郭は薄れており、その奥の地面が透けて見えた。

木乃香から魔力供給を受けて実体化したといっても、所詮は仮初の肉體。

大和が死人だという事実は変わらない。

タイムリミットが近づいていた。

「……こんな俺でも、あの小娘一人救えたのなら上出来か」

大和は索敵範囲を広げ、刹那と木乃香の場所を探る。

二人の位置は変わっておらず、穏やかな気の様子から無事であることが窺えた。

そして、その二人に凄まじい速度で迫る気の反応が一つ。

「っ、まだ残党がいたのか!？」

大和はあの二人から迂闊に離れたことを後悔した。

この移動速度から推測するに、相手はかなりの実力者。

急いで刹那達の下へ走り出すが、消えかけたこの体で自分に何ができるだろう。

「くそッ!!」

走る、走る。

消えかけた足で、大和は必死に走り続けた。

(頼む、間に合ってくれっ……!!)

早めに気づけたのが幸運だったのだろう。

大和は気の持ち主よりも先に、あの思い出の修行場所までやってくる事ができた。

しかし、相手もすぐにここまでやってくるだろう。

（左腕が消えた。右足もほとんど消えてる……守りきれるか……！  
？）

刀を右手に握り締め、相手を待ち構える。

正直、達人を相手に戦える状態ではない。

それでも、せめて相打ちには持ち込む覚悟だった。

そして、川の向こう側に現れた人物を見て、大和は目を見開く。

「え……？」

その声は、どちらのものだったか。

相手もまた、信じられないといった表情でこちらを見ていた。

「刀、子……」

「大和……君……？」

そこにいたのは、かつてこの場所で自分が守ると誓い、そして裏切ってしまった少女だった。



## 第十一話（後書き）

この小説では詠春さんも色々頑張っていますので、そこらへんは後でちゃんと説明します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0818v/>

---

ネギま！で斬魄刀

2011年10月9日08時23分発行